川柳塔

平成十五年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九〇九号

日川協加盟

No. 909

二月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東３丁目７番８号　〒584-0023
TEL 0721-25-7210　FAX 0721-25-9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町４丁目５番８号 〒103-0021
（日本橋川村ビル4F）
TEL 03-5255-5158　FAX 03-5255-5159
http://www.koki-envelope.com

第４回　文学ルート川柳募集

文学ルート（松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市）

募集作品　文学ルート（５市）周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗行事などを題材とする川柳。（未発表のオリジナル作品に限ります）

宿題・応募先（宿題に応じてご応募ください。各２句）

松江市	「日本海」「小泉八雲」	松江市産業振興部　観光文化課 〒690-8540 松江市末次町86	TEL(0852)55-5293 FAX(0852)55-5564
尾道市	「映　画」「　絵　」	尾道市産業文化振興部 観光文化課 〒722-8501 尾道市久保一丁目15-1	TEL(0848)25-7366 FAX(0848)25-7293
今治市	「水　軍」「サイクリング」	今治市教育委員会　文化振興課 〒794-8511 今治市別宮町一丁目4-1	TEL(0898)36-1608 FAX(0898)25-1700
松山市	「人力車」「湯の町」	松山市企画財政部 国際文化振興課 〒790-8571 松山市二番町四丁目7-2	TEL(089)948-6634 FAX(089)943-9001
高知市	「桂　浜」「尾長鶏」	高知市教育委員会　生涯学習課 〒780-0870 高知市本町四丁目3-30	TEL(088)822-6394 FAX(088)823-1095

応募方法

・専用の応募用紙、または官製はがき、封書に書かれた作品（FAXによる応募可）。
・応募作品には「宿題」及び、氏名（ふりがな）、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号等、必要事項を明記してください。（雅号の場合は本名も明記）
・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。

応募締切　平成15年３月31日(月)（当日消印有効）
出品料　無　料　　**選　考**　平成15年５・６月
発　表　平成15年７月、入賞者に通知します。（表彰式は、平成15年９月を予定しています）
選考委員（第二次選者）仲川たけし・吉岡龍城・橘高薫風
（第一次選者）昌子　萬吉（松江市）八島　白龍（尾道市）越智　青園（今治市）
丹下美津子（松山市）竹村　温夫（高知市）
賞　大賞　１点　　奨励賞　５点　　佳作賞　若干

仁徳御陵

河内天笑

ふるさとは大仙陵のあるところ　摩天郎

昭和四十八年十二月二日、仁徳御陵正面やや左寄りに黒御影のどっしりとした故八木摩天郎先生（堺川柳会会長）の句碑が建立されました。

「大きな山のような御陵」だというので大仙陵（むかしは大山陵）という名がつけられたと考えられています。正しくは百舌鳥耳原中陵（もずみみはらなかのみささぎ）といいます。エジプトの一番大きいピラミッドより、中国の秦始皇帝陵よりもはるかに仁徳御陵は大きく、まさに大きな山のような世界一のお墓です。『日本書紀』によれば仁徳天皇がなくなられる二十年前からつくり始められ、延べ一八〇万人以上の人々が働いたと言われています。この頃の日本は一つの国としてまとまってきて天皇を中心とした大和朝廷の力がいかに強大であったかがよくわかります。

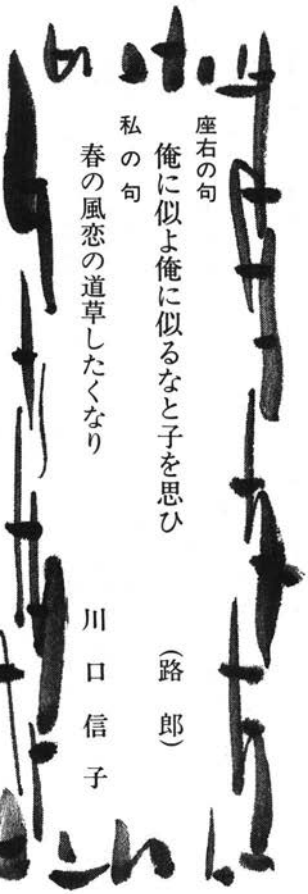
この御陵は前方後円墳で南北四八五メートルもあり前方部の高さが三十四メートル、後円部は三十六メートルで面積はおよそ四六四、〇〇〇平方メートルもあり、その周りには三重の堀が青々と水をたたえています。なお、お堀のまわりは二、八五〇メートルの遊歩道になっています。またその周りには十五の陪冢（ばいちょう）（大きな古墳の周りにつくられる小さな古墳）をもつ素晴らしい古墳です。

百舌鳥耳原中陵の百舌鳥耳原という地名について『日本書紀』におもしろい話がのせられています。天皇になられた数年のちの秋の、御陵つくりはじめの日に、この場所に来られた際、鹿が走ってきて工事をしている人たちの前で、急に倒れて死にました。勢いよく走ってた鹿が急に死んだので不思議に思い近寄ってみると、鹿の耳からモズが飛び去ったのです。鹿の耳の中は、すっかりモズに食い裂かれていたのです。この小さなモズの勇ましさをたたえて、この地を百舌鳥耳原と呼ぶことにしたということです。このことからモズは、大阪府の鳥（府鳥）として決められています。

昭和七十八年昭和史はつづく　哲　秋

土居哲秋さんの年賀句です。摩天郎さんの句碑も三十年たちました。この昭和四十八年には、五月に出雲で尼緑之助さんの「灯台の夕陽　神話を抱き寄せる」が建立され、十一月には薫風名誉主幹の『肉眼』が刊行されました。刊行の句会で、川柳塔わかやま吟社主宰の垂井葵水さんの事故死を弔む黙祷をしたのを憶えています。

今回を皮切りにわが町「堺」の歴史や町並み、人物等をご案内して参りたいと思います。なお昨年十二月中旬から年末まで風邪をひきダウンしました。たくさん賀状を頂きましたが、どなた様にも賀状をお出し出来なかったことをお詫び致します。



座右の句
俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　（路郎）

私の句
春の風恋の道草したくなり　川口信子

川柳塔　二月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　仁徳御陵……河内天笑…（1）
花の教え……板尾岳人…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
自選集……奥田みつ子選…（54）
水煙抄……東野大八…（78）
麻生路郎物語（14）……波多野五楽庵選…（81）
愛染帖……（84）
誹風柳多留二四篇研究　51……政岡日枝子選…（86）
茴香の花……西口いわる…（92）
秀句鑑賞「同人吟……松本文子…（94）
　　「水煙抄……

花の教え

板尾岳人

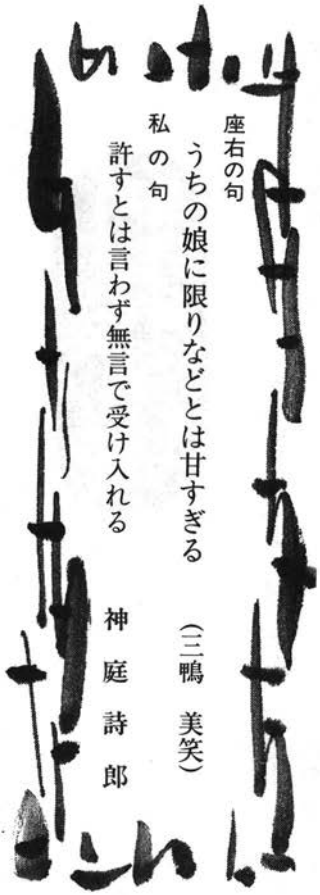
ひとの過ちは見やすく、自分の過ちはよく見えない。はじめのうちはこちらが偉いと思っていたから、オレはあんな過ちはしないと気張っていたが、そうではない。人の過ちが見えるということは、こちらにも過ちをする可能性があるから見えるので、やはり似たりよったりだなと思うことがあり、懊悩もあり反芻することが歳をとるごとに気付くことも多いものです。

昔よく親父から言われたかなり下品な言葉に「目糞鼻糞を笑う」というのがあります。泥臭い言葉の中にかえって、上品な言葉以上に深刻な意味があると思うのです。

目糞が鼻糞をつかまえて、お前はきたないぞと言う。鼻糞は目糞をつかまえて、お前はきたないぞと言うわけでしょう。これは笑う方も笑われているわけだし、非難をする方も非難をされているわけです。

机に向かっていて考えがまとまらなくなってくると、頭がかゆくなり頭を掻くと、頭垢が出てくる。頭垢はきれいなものではない。それから耳がかゆくなる。それで耳を掻く

「短」……石尾かつ乃選……(88)
一路集「段」……北川竹萌選……(88)
「次」……吉村さち子選……(89)
初歩教室「漬ける」……三宅保州……(90)
■エッセー 長かった一日……桜井千秀……(95)
野田素身郎氏を偲ぶ……田中正坊……(96)
権代康女さん さようなら……小西雄々……(97)
一月本社句会……(98)
各地柳壇(佳句地十選/上田俊路)……(102)
柳界展望……(117)
二月各地句会案内……(118)
■編集後記……楓楽・義子……(120)



座右の句

うちの娘に限りなどとは甘すぎる　(三鴨　美笑)

私の句

許すとは言わず無言で受け入れる　神庭詩郎

と耳のアカが出てくる。歳を取るとこれが盛んに出てくるが、妻は「それは新陳代謝が盛んなのだから、結構なことだ」とうまいことを言う。いろいろほめ方もあるものだ。

おのれのとがは
いつわりの深し
賭師の不利のさいを
隠すがごとく
自ら覆いかくすなり

僕はばくちなどしたことはないけれど茶碗を伏せて、サイコロを転がすのですが、その時何かトリックがあって、うまくごまかすことです。お釈迦さまはそういうことを知っておられるわけで、なかなか隅に置けないと思う。現代の僕達も悪はやはり出来るだけ隠そうとするのです。

他人の悪いところはすぐ見つかるけれど、他人の美点はなかなかわからない。他人の悪口を言って、それが表沙汰になると人間関係が悪くなる。

一年草でもあんなに美しい花をつけて終わっていく。枯れればもう翌年は生えてこない。一年切りの花ですら、無言できれいに咲くことによって僕達に何かを教えてくれるわけです。愛は理解から生まれてくる。理解から愛も生まれてくる。

百人の男が覗く女傘　岳人

川柳塔

河内天笑選

宝塚市　嵯峨根　保子

Eメールあの親指は密使だな
ルミナリエ点いて今年の字は　帰
平均を越えたあたりが好きな場所
ノルウェーの鯖では船場煮もできず
国籍をみかんに問うたことはない
老舗からパンフが届く不況風

鳥取県　新家完司

にんげんの声がうるさい十二月
銀行の壁に一発回し蹴り
奴にだけには当たらぬように宝籤
ベッカムも僕も目玉はふたつずつ
鳩山も小沢も顔で損している
もたれるとじんわり温い土の壁

大阪市　川端一歩

駑馬千里馳けて築いた小さい幸
除夜の鐘僕には夢の道しるべ
親子とはこうありたいネ鴨の列
莫山の書にふれ二人仲なおり
僕の脳賞味期限は朝のうち
彼の人も髪を結うてる春だもの

松江市　銭山昌枝

花鋏今日で三日も探している
満腹になると言葉も眠くなる
要するにときどきカッコイイ夫
みんな不況でみんな何とか生きている
羊の画思い浮かべて墨を摺る
友達の友達に出す年賀状

堺市　矢倉五月

悔いないがパスポートいる里帰り
働いたエプロン褒めて今日終える
雪しんしん素直になってくる心
使い捨てカイロを雪の駅で買う
星影のワルツで締める同窓会
シップ貼る時だけ夫の肌に触れ

弘前市　今　愁女

ふっくらと手の甲腫らした霜焼けよ
悴(かじか)んだ手に母の手の暖かさ
除雪車の音遠ざかり朝明ける
お隣に先を越されて雪を掻く
雪やんで静止画像の北の街
佳き人の雪礫なら打たれたし

黒石市　相馬一花

悪友のお蔭で今日の僕がある
子の居ない夫婦も金は貯らない
こそこそと整形をして美女に化け
英語よりかなり分からぬ津軽弁
研ぐように女は眉を整える
ウインクが下手で獲物が掛からない

鳥取市　福永ひかり

子や孫へ申し送っていく債務
一番にメダルは母に見せに行く
世襲制政治にクエスチョンマーク
過労死を認めるほどの時間外
一杯の酒で他愛もなく眠り
財産は鍵のいらないものにする

鳥取市　有沢せつ子

封開けるときめきを買う福袋
渋滞のおかげで出来たプロポーズ
早起きの孤老は鳥と話し好き
三面鏡左の顔に亡母が居る
ジャンボくじ遣い道まで決めて買い
ロボットの犬が休める電池切れ

米子市　林瑞枝

アメリカ支配の地球テロにも三分の理
亀嵩(かめだけ)の湯に紡がれる思いやり
孫二人に嫁来い観音拝んで来る
茅葺きの世界遺産のすごい屋根
ユーモラスな対話に潜む血の絆
山河に抱かれ恥じることなく足の跡

鳥取県　羽津川公乃

爺サマとプリントゴッコ気合い入れ
悪筆もキャラクターです済みません
まだ古稀だ恋のチャンスも視野にある
息子孫声がよく似てややこしい
日本語の良さしみじみと聞くニュース
ネクタイの趣味それぞれにニュースアナ

箕面市　岩津ようじ

ああそうか今日から私八十歳
酒　饅頭両刀使い八十歳
河豚白子うまし人間のは如何
色気ない話ばっかり忘年会
われに過ぎたる雪見酒掘炬燵
恥ずかし気なくアメリカを褒める人

鳥取市　徳田ひろこ

しっかりと春を掴める沈丁花
ポップコーンのように弾けてきた梅花
労りの言葉で疲れとぶものを
清流に育って華奢なあばら骨
巻き過ぎの螺子ロボットのストライキ

鳥取市　田中憧子

サスペンスの小道具にりんごとナイフ
ひとりっ子の吐息だあれも気がつかぬ
囲炉裏ばた子らは民話にとけてゆく
いつまでもあると思っているお金
頷いてくれれば鍵は開くのだが

鳥取市　植田一京

わたくしも少し飾ってお年始へ
言い過ぎたお世辞が傷にふれている
真剣が過ぎて喜劇のようになり
幸不幸考えてみりゃばんてんこ
五七五に遊んで疲れまだ知らず

鳥取市　前田一枝

七光り日増しに色も艶もあせ
二人して行く田んぼ道蝶になる
計算はぴったりなのに銭足らぬ
嘘まぜてうわさ話に花そえる
どう真似をしても美人になれもせず

鳥取市　夏目一粋

年寄りにありがたいのは良い天気
死後のこと死んだらきっと便りする
記憶力落ちてパソコン頼りだす
ありがとう手放す金が愛おしい
色っぽい欠片も見せぬ娘が不安

鳥取市　美田旋風

騙されるお方は皆さんお金持ち
おだてられ歌が音符に乗ってくる
正月がすめば煩悩目を覚ます
亡き父の肖像母の城守る
尻尾切り素顔になると気が軽い

鳥取市　岸本宏章

十一字すごい戒名戴いた
夕暮れの月は忍者のように出る
あんぱんの円周率は三でよい
ふるさとの山は仁王のように立ち
長生きはいやだとみんな嘘を言う

鳥取市　岸本孝子

気が付けばたくさん溜めた皮下脂肪
いよいよのときには見せる貯金帳
ダイエット挫折覚悟でまた始め
風呂上がり一番好きな顔で寝る
だんだんと欲が薄れていく不安

鳥取市　倉益一瑶

予定通り花は開かぬものと知り
割る皿は値踏みしてある妻の乱
お白粉の下にジェラシー秘めている
人生の岐路に矢印などはない
土俵際運とはそんなもんですか

鳥取市　録沢風花

青リンゴ未熟なままで翔びたがる
旧家跡いつしか広い駐車場
流れゆく刻の流れに遅れだす
一年を歩いた足にありがとう
来る年も夢に向って大地踏む

鳥取市　近藤佳子

神さまに愚痴こぼすこと増えてきた
友逝って銀杏はどっと地を覆う
じゃが芋の芽かき亡母を偲びつつ
料理ずき菓子ずき母は話し好き
コスモスに埋もれて少女期に還る

鳥取市　福田登美

冷静をよそおう暮れの空財布
未知数の余生に小さい夢を抱く
疑問符になるべく波は立たせない
躓けば他人を見る目おおらかに
生きてきた証汚れてきた辞典

倉吉市　松本よしえ

字の読めぬ曽祖母何でも知っている
モノクロの写真で歳が隠せない
職退いて駅も定期もグッドバイ
不器用な狸うろうろ肥り過ぎ
おやおやと風も覗いた外れ籤

倉吉市　最上和枝

鐘撞いて二礼二拍手無理を言う
旅の写真わたし一人が目を瞑る
頭脳明晰顔は十人並でよい
おんぼろになってもへらず口止まぬ
悪びれもせずに大きな嘘を吐く

米子市　木村富美子

迷ったら祈る形で立ち止まる
迷い道北斗の星を北に見て
ふる里の山に似ている旅の宿
限りある力大事に小出しする
北風に凛と若芽が力溜め

米子市　澤田千春

刻まれた山が見知らぬ町になる
五臓六腑安心できぬ歳になり
桑畑も明日はいよいよ駐車場
大地踏み転ばぬように手を組もう
裏返す枕の下に虹を見た

米子市　鷲見正子

ふるさとの訛うれしい時に出る
散る美学　京の紅葉に負けられぬ
円らな目この子に何を残そうか
保険掛け乗る飛行機が無事に着く
手の平でニコニコ遊ぶお父ちゃん

米子市　野坂なみ

羊雲明日の空も青ですね
傘寿になって僕の干支まで欲がでる
道連れになろうと傘が攻めたてる（イージス艦派遣）
島に生まれて島の織り機になりました
水を濁して懲罰受けて生きている

米子市　門脇晶子

地球の呻き声聞こえるか神の耳
音痴でも宴会場でご愛嬌
迷わずに歩いているは白い杖
笑い声あるグループはよい仲間
迷って買ったブラウスだのに似合わない

米子市　白根ふみ

煤はらい隠れたものが生きかえる
人脈を消してアドレス軽くなる
洗い流したい地球に住んでいる
念おしのために蔵人手で計る
心にはゆとりがあって粗食の日

米子市　政岡日枝子

力みすぎて等身大を見失う
相槌がきらいで瞼とじている
水に浸せば紙の礫もおとなしい
向い風無駄な力は使わない
無念気にざくろが一つ木に残る

鳥取県　石谷美恵子

スーパーの野菜年中旬の貌
ほどほどにお盆の中で触れている
お互いに家族に触れず逢うている
私の脂肪勿体ないのツケ
ゴミ入れの手紙の端が乱のもと

鳥取県　黒田くに子

羊年のお目出度になる岩田帯
レンタルのドレスで形だけの式
男いっぴき枯れても母を泣かさない
フルーツワイン愛のむつ言聞いている
くつろぎの一刻ワイン胃になじむ

鳥取県　土橋睦子

桜咲く頃に逢おうと言う便り
冬を越す棕櫚も元気に芽を伸ばす
おっとりとした羊だが毎夜飲む
石南花の蕾も笑う年の暮れ
ファミリーの余韻のこして出る喫茶

鳥取県　国森武子

一人ずつ私の周囲消えてゆく
あの人が死んだか少し目をつむる
姉の事次々浮かぶ墓の前
法要にわれ最年長者驚きぬ
生き方を体がきめてくれる歳

鳥取県　西原艶子

華やいだ日を思い出すツーショット
体調が微妙に狂う歳であり
キティちゃんより本物の猫が好き
孫のように猫の温もり抱いてみる
夫婦愛煮詰っている智恵子抄

鳥取県　田村きみ子

幸せと思う紙くずすぐ溜まる
悪口を笑って喋るのは不良
鉛筆を持つと悪魔になるわたし
愚痴を消すように大根真っ二つ
美しい思い出白いままの恋

鳥取県　土橋はるお

株券が金庫の奥で欠伸する
色っぽい女にポーッとお巡りさん
死ぬまでに余った金はみな御布施
道交法まもれと酒に叱られる
えらそうに言うけど僕も不器用だ

鳥取県　谷口次男

よく聞けば喜劇と悲劇紙一重
雄弁家消えて詭弁家だけの国
どうしてだ経済大国屍に
相撲界チャンコを捨てたツケがくる
羊顔貧乏神のように見え

鳥取県　林露杖

初雪に珠玉顕に抱く万年青
鉢一つ倒し木枯し吹き抜けた
柊の香に偲ばれる遠きひと
鈴成りのまんま腐熟の庭の柿
信心も老いの我がままかもしれぬ

鳥取県　小谷孝美

ストレスを吐けずウーロン茶がまずい
一色をたして女の顔になる
なにくそと嫁は打たれて強くなる
やさしさに触れて血潮が熱くなる
本心は小出しで話まとまらぬ

鳥取県　乾喜与志

両陛下迎え土俵のにぎやかさ
名を忘れた人から笑顔ありがたや
悲しみを忘れて唄にはげまされ
好天気椿の花も温もりぬ
孫つれて公民館の豆ひろい

鳥取県　吉田孔美子

エプロンを付けたサムライお当番
甲斐性とは裏切ることかサムライよ
サムライは獅子　連れしょんなどしない
蘇るサムライＳＬが吠える
座して死すサムライでした母も

松江市　津川紫晃

今朝の夢続きがみたく布団干す
反省のポーズばかりが上手くなり
つぶやきがいくつも溜まる冬の耳
木枯しに絡まれている冬帽子
背丈より大きな飴に夢を買う

出雲市　園山多賀子

四面楚歌金子みすゞと対峙する
打算などない点滴の一雫
したたかに生き一枚の絵を捨てる
温かい情け拡大コピーする
焦点の炎(ほむら)に亡夫のベレー帽

出雲市　岸桂子

灯の消えたあの日の失意忘れない
定位置でいつもわたしを見てる山
する事は山ほどあって明日にする
必要とされているのに気づかない
乾杯の音頭につられ一気飲み

出雲市　城多喜

足もとにまさかの落し穴がある
背伸びしてまだ人間を続けている
足枷が恋しい人についている
横歩き後ろ歩きで見た世相
だれにでも同じ笑顔をするつもり

出雲市　伊藤玲子

退院を待っててくれて母は逝く
点滴のさし処なし痛痛し
黒枠の母はいちばん美しい
もう居ない母の病院来てしまう
近頃は生の野菜が好みです

出雲市　小玉満江

中国道木立ちも私も冬支度
滝の音いろは紅葉を拾う道
川下り鮎の笹焼き旨い酒
色あせた紅葉ばかりの霧の町
わがままが可愛く見える青りんご

出雲市　青山久子

過ぎ去った思い出みんな茜色
お隣の屋根からにらむ鬼瓦
どん底になれば次には上るだけ
拉致ニュース胸がしぐれてくるばかり
裏ぎりの友にもいれるレモンティー

大田市　伊藤寿美

ゆっくりと無になる墨を摩っている
やがて子も川の深さを知るだろう
損ばかりしていた亡父の帽子掛け
過ぎた日の渚で聞いたニニロッソ
カーナビで今浦島が帰る里

島根県　榊原秀子

夕鴉呼び合う声に暮れてゆく
血圧の機嫌いい日の墓まいり
美術館招待券でありがたい
念入りに爪を切ってる昼下り
追憶のしじまこわしにきた霰

倉敷市　小野克枝

期待されすぎて若葉が育たない
玄関で三つ指突いたのは昔
本心が作り笑いの底にある
細い根にしがみついてるすねかじり
折れ櫛を握って女まだ迷い

倉敷市　井上富子

平凡という檻から出ない意気地なし
芸術的なお世辞にぽっとゆるむ頬
親孝行　日本人の忘れ物
ＩＴの壁も齧ってみる入歯
白雲を引いて飛びたつパスポート

岡山県　小林妻子

掌に乗せてる顎が頷かぬ
高い木の上で浮かんで来た一句
雪を掃く箒を買いに行ってくる
厨房も電化ゴキブリ不況なり
背広着るくらし藁屋が気に入らず

岡山県　矢内寿恵子

ローカル線土の匂いのそこかしこ
何時までも負けず嫌いを押し通す
老いたりな嫁のタクトのまま踊る
長生きを何の才能ないままに
踊り場で一息いれてまた登る

岡山県　大石あすなろ

とりあえず相槌うっただけのこと
どこで咲いても自己陶酔の赤いバラ
一の矢をはずして真意見さだめる
つじつまを合わす計算先にする
改革のめどがたたないこの景気

広島市　森田文

語り継がれ歌い継がれてひばり節
風の街長いマフラーよく売れる
出席者の数だけ笑顔クラス会
人も菜も一霜ごとに引き締まる
憧れを温めている花の種

竹原市　小島蘭幸

わたくしの初春文学のこみちから
犬が来た日から私もよく笑う
公務員大きな名札つけている
五十五歳短気は起こさないように
洋式トイレに反対してたのは昔

竹原市　正畑半覚

古希の殻を今割って出たヒヨコです
古希の坂道は開けてくるものだ
いつまでも恋をしたいと願う古希
神様にもらった古希の自然体
少年の翼で古希をとんでゆく

竹原市　森井菁居

もう功は追わぬ六十四歳の新春
明日があるサンフレ涙こぼすまい
清潔な駅のトイレに有るロマン
絵手紙に友の本音が詰めてある
平常心守ると運が向いて来た

竹原市　石原淑子

ムートンの温さふんわり夫に似て
凍てついた水仙凛と抱く蕾
ぐいのみのクースと語る沖縄よ
ファンタジー今年も神戸ルミナリエ
臘梅の夢ふつふつとひらくなり

竹原市　時広一路

一泊で五分温泉だというに
燃え尽きた落葉火葬にしてあげる
なあ時計もう秒針は要らないよ
男でも毎日鏡見るんだよ
影法師少し小さくなったかな

竹原市　三宅不朽

旬の値も路地も詳しくなる散歩
また肉か親父の味噌が恋しかり
限定版予約自惚れではないか
花の種どちらにしますお姑さん
産み月へ姑のえくぼが深くなる

広島県　藤解静風

おとなしく終る羊の瞳ではない
忙しさを楽しむことを知った喜寿
奥さまは魔女か笑顔を絶やさない
苦労した分だけ妻が気まま言う
少し猫背の妻と先祖の墓洗う

宇部市　平田実男

ボールにも人生にもあるイレギュラー
目の上のコブがブッシュに多過ぎる
失敗の数勲章の一つかも
ハンドルの遊びが人生にも欲しい
ときめきが若さの秘訣かも知れぬ

美祢市　安平次　弘道

好奇心馬鹿な男と言う勿れ
原点に戻れば迷い消えていた
位置変えて見れば満更嘘でなし
臓器移植やる気はあるが断わられ
一番を目指す男の鞭がなる

唐津市　樋口輝夫

嘘ウソっとまともに女嬉しがり
縄のれん女房の方が顔が利き
パパとママよう使わない飴と鞭
大臣の原稿ルビが振ってある
兵馬俑疲れた顔で立っている

唐津市　久保正剣

キャバレーを回る落ち目のヒット曲
大怪我も過失問われぬ徳俵
幾つもの狼煙を抱いて火の女
拉致したい女に甘いジン・フィズ
軍配はドローと言えぬ取り直し

唐津市　宗水笑

僕の意見妻が書いてるアンケート
告別式ネクタイはずす帰り道
鳥威し泰然と聞く籠の鳥
ネクタイの結び目ずれる古希の首
女房の財布から借るワンカップ

松山市　古手川光

爺ちゃんが子供に還り地に還る
この川を上ると父母が眠る郷
日本の中心だった明日香村
お詫びの社告目立たぬとこに畏まり
ノーベル賞で割り食わされた小柴さん

松山市　宮尾みのり

スマートに田舎育ちは割り切れぬ
逆転にするB面を持っている
山のあなたへ夢をつないで暮れかかる
いい人にされて苦労がまたふえる
王様の耳不都合は入らない

松山市　丹下美津子

十二月一杯妻のスケジュール
お手振りも上手になられ愛子さま
知らないでいる仕合わせな老夫婦
一人旅もしもと腹に巻く不安
若いなあ女将の誘いぽろり乗る

愛媛県　中居善信

明日食う米なら蔵に積んである
サラ金に追われた顔が焦ってる
顔だけを浮かして癒す農休日
白は白妻に言い訳などしない
言葉にしたら貴方は遠いとこへ行く

香川県　清川玲子

民謡がころがって居る里の土間
米援助している国が謀反する
稲かりの後は案山子も無職なり
人並みの幸せがある裏通り
寒風に色鮮やかな柿すだれ

香川県　神保坊太郎

円いから迂かつに折目つけられぬ
私の昔を焼いている煙
まなうらに僕より若い母が住む
秋夜長妻が挑んだ指相撲
長旅でやつれましたネ諭吉さま

香川県　成重放任

白描の光を放つ古い床
金のない時に限って金が要り
白無垢に希望と不安入り乱れ
福耳を持つがかあちゃん金づまり
寿が今年も年金狙ってる

香川県　池内かおり

莫山の墨と余白に魅せられる
国道で転んでからはローヒール
生きている証イビキもリズミカル
宴たけなわ誰もカラオケ聞いてない
血圧を下げる大きな深呼吸

香川県　川崎ひかり

住む人が作った道に無駄がない
日本が治安一とはもう仮説
人間は根こそぎ取るから恐ろしい
他人様が落ちる穴だと思ってた
年玉の刑に処されるお正月

高知県　赤川菊野

かた結び徐々にほぐれる拉致家族
大陸の赤い夕日に会いたくて
今年からハードル少し低い目に
賞味期限切れても私女です
私だけ歳をとってるわけじゃない

砂川市　大橋政良

折れた矢の中に私の矢もあった
失敗を黙って見てる肚の中
土つき野菜虫も卵も糞もある
曲っても胡瓜まっすぐでも胡瓜
古時計少しとぼけている振り子

弘前市　蒔苗果林

車だけせかせか小春　日曜日
市になるも農外利用出来ぬ土地
お金生む手立ても失せた草畑
老いてなお裏読む余裕遅ればせ
行く宛のない足元に霰舞う

山の湖人の手垢がついてきた
人間が森を壊して街づくり
みちのくの人情雪に育まれ
朝刊の運勢当たらぬまま暮れる
楽しみは最後にとってある肴

弘前市　福士慕情

日給が大黒柱となりにけり
厭わしい昼夜の勤務打ってつけ
睡魔が襲う睡魔が誘う夜学かな
弟妹の暮らし気になる給料日
日給が月給となる嬉しさよ

弘前市　櫻庭順風

お若いと言われるほどの歳になる
潑剌と老いゆく知恵は寡婦のもの
身を守るための敬語と褒め言葉
風ばかり読んでる足が地に付かぬ
家計簿を覗くと空っ風が吹く

弘前市　高橋岳水

雪模様土鍋ぐつぐつ俺が春
星が降る平凡ごろり早寝する
アドレスはビルの谷間の水たまり
裏金を知らぬ男の不精髭
ユートピアだんごころりと丸くなる

弘前市　一戸ツネ

配当のない株ばかり持っている
負けそうになったら握り飯を食う
手の中の虹を時々舐めている
お別れに来たのか今にして思う
あっけない最期にそっと拍手する

弘前市　高瀬霜石

雪灯籠　闇を照らして武者震い
無に還り闇のとりこになってゆく
日晒しの夏が恋しい白い闇
白い闇抜けて笑顔の福寿草
困惑の作り笑いが徒になり

弘前市　岡本花匠

親友は酒お守りとしてニトロ
レッテルをなかなか剥がさない他人
高いからうかうか死ねぬ墓所墓石
富士山を見るとウトウトする機上
性格の悪さは判らない写真

東京都　播本充子

拳骨を貰ったことのない頭
恵まれて蔭の苦労を読み取れず
人任せ脳の働き鈍くさせ
家補修となりへ腰を低くさせ
機内食真面目に食べた胃のもたれ

横浜市　清水潮華

横浜市　小野　句多留

IT化なくて充分満ちている
涙一杯ためる女をもてあます
バスツアー購買欲ではち切れる
あきらめて消える夫婦の喧嘩元
悲しくて笑ってしまうくじの列（有楽町宝くじ）

横浜市　保田　絹子

新薬が効けばリスクも付いてくる
補聴器に内緒話も聞こえるよ
口ほどに強くはないと子は見抜き
紅顔も厚顔になり冷めてくる
宝籤買う日暦と睨めっこ

横浜市　菊地　政勝

寝たきりの母に想い出話され
鈍行で良いこれからの二人旅
妻だけに聞こえてほしいひとり言
じぐざぐに歩いています好奇心
噛み切れぬ肉に入れ歯が悲鳴あげ

静岡県　薗田　獏沓

コンクリで堰き止められて川は死ぬ
座右の銘立派に書いて怠けてる
骨抜きの魚が売れる新世紀
悪友が午後来て座り日が落ちる
体型にぴったり合った既製服

富山市　舟渡　杏花

錠剤が一つころがる雪催い
ガン告知突如男が試される
屋台曳くぼくは都会の演出家
格安の皿を砕いている不満
妻の念力バカにしていた午前さま

愛知県　早川　盛夫

音のないラーメンなんて美味くない
人が見ているとハッスルしてしまう
花の無い部屋に男がひとり住む
足音を立てないように生きている
毎日のことに髭の煩わしさ

滋賀県　中　宗明

収穫祭笛の音耳に心地よい
まだまだと思ってるうち喜寿迎え
何もかも委せながらも口はさみ
リンゴ狩りリンゴに似た子ばかりいる
長老が古武士に見える城下町

京都市　高島　啓子

仏壇のおかきを急に欲しくなる
類焼のしない火事なら見に出ない
魚狙う鷺一本の槍となる
ネクタイとルージュに決めている土産
当る順まだまだ来ない宝くじ

六度目の羊と恙無く歩む
一生懸命生きてはるのに値切れない
奥深いこころに触れた寂光院
般若心経ひととき楽になるいのち
泣き笑いまだまだ生きてやるつもり

京都府　稲葉冬葉

天下御免大阪弁のパスポート（フランス紀行）
グレース妃の人気を語る墓の花
昔話したいアルルのはね橋で
アヴィニヨンの橋を少女の目で眺め
そこここで恋拾えそうシャンゼリゼ

大阪市　西出楓楽

ミステリーツアー遊びごころの忙中閑
銀杏はらはら一緒に浸る露天風呂
働ける幸休日もフル稼働
老い先は神のみぞ知る遊び癖
不況風しばし忘れる戎橋

大阪市　津守柳伸

露天風呂浮いた落葉と無に還る
姦しい足場奥入瀬雪模様
青空がじっとさせない万歩計
夢買った年末ジャンボ神棚へ
風車くるくる無垢な瞳が光る

大阪市　津守なぎさ

大金に埋れ歳より老けて見え
電話口家族の序列できている
医療費が嵩むペットに手内職
夫婦して酒好き多額納税者
赤いバラきれい奇麗と煽り立て

大阪市　大川桃花

クリスマスまだキリストに会ってない
一人になった時を妻からしつけられ
仮の世にお金貯めてる人がいる
図書館の判子を押した本がある
妻に聞いてからご返事いたします

大阪市　前たもつ

年輪が男を磨く初日の出
遠過ぎて神の返事が聞こえない
油断してブラックホールにはまり込む
ゴールまであと僅かです駆けてます
灯という字の温さ穏やかさ

大阪市　小糸昭子

古稀迎えとても大事な今日あした
今年こそ今年こそはともう言わぬ
年金の贅沢朝寝朝ビール
眠り過ぎる夫に不眠症の妻
長電話夫の血圧上る頃

大阪市　神夏磯典子

全身をふわり浮かせてしまい風呂
侮った坂でつまずく同じ場所
強風に耐えたコスモス労られ
存在感残して柿の実のひとつ
今年また命もらいに大根焚き

大阪市　星野　きらり

コスモスを一度整列させたいな
子沢山家族のように小菊咲く
南高梅朝の一粒おまじない
シクラメン見てみて見てと逆さ立ち
北上す桜と共に旅したし

大阪市　古今堂　蕉子

しばらくは開けず抱いてるプレゼント
美しい人が肴にされてはる
たこ焼きをふうふう食べている美人
すんなりと嘘の言いわけ通ってる
お芝居のつもり本気で泣けて来た

大阪市　中澤　伽羅

強がりを言っても心満たされず
難病とたたかう友に労られ
灯がゆれて夫の笑顔優しげに
焼芋の匂いにつられ一つ買う
それぞれに言いたい事を言う仲間

大阪市　西川　更紗

電子辞書子は奨めるが広辞苑
一口目尻尾に餡こつまってた
ただいまと誰もいないが大声で
食べた分みかんの皮は風呂に浮く
十二月褪せずに義士が語られる

大阪市　玉置　英子

寂聴法話　目から鱗が落ちました
拉致の子を呼ぶ母涙涸れるまで
あれ思いこれ思いつつ年賀書く
理由なき反抗亭主が拗ねている
黙々と蟹の身せせる忘年会

大阪市　板東　倫子

天下り口利き献金エンドレス
過去開く未来を拓く銅羅が鳴る
高所恐怖症とても神には近づけぬ
街角にストレイシープ群れている
何もせん専務で無難二十年

大阪市　浦田　綏子

一滴も呑まぬ顔にも油断せず
不況風テナント募集ビル寒し
焼き芋を割ればフーッと熱い息
筋一本通す加減が掴まれず
気楽そうに見えるお方も持つ悩み

大阪府　米澤　俶子

大阪市　町田達子

年齢を意識し出した八十路坂
無病息災願ってお札受けに行く
嵐山モダン化タレントの店が増え
燃え残る紅葉鮮やか渡月橋
大宮人の遊んだ頃をふと思い

和泉市　中川楓

メークより一生もののスキンケア
脚ギプスゆたんぽのよな介護受け
露天湯を女一人であふれさせ
モーニング小さな幸せ茹玉子
会席に追加の鮑主役めく

大阪狭山市　矢野梓

お喋りの中で学んでいる手抜き
喋るだけ喋ったらもう居なくなり
遊びすぎ帰ってからが忙しい
抽選の前と後ろで鈴が鳴り
他人事だからはっきりさせたがり

泉佐野市　山本蛙城

パワーショベル行くぞ尾行をしてみよか
戦前の日本そっくり笑えよか
さすがだねアルミ貨さえも落ちて居ず
使用前使用後写真出来すぎな
万歳の音頭とれとはよいしょだな

河内長野市　水谷正子

小春日に母思い出す障子張り
お掃除に来やはる前に掃除する
すらすらと生年月日未だ言える
あなた好きけれどヴィトンはもっと好き
通販を遊び気分で取っている

河内長野市　山岡冨美子

肩書きの取れた名刺の潔さ
幸せな人だな笑顔美しい
反論をポッケに入れるかごめの輪
哀感を水面に映す中之島
新しい眼鏡を買っていた羊

河内長野市　村上直樹

小川から消えためだかの拉致疑惑
黒眼鏡はみ出すほどの下心
革張りの椅子は知ってる裏表
踏ん張って雪解けを待つふきの薹
春はそこ明日へでっかい深呼吸

河内長野市　加島由一

朝風呂で新聞読んで出てこない
朝食にカスピ海産ヨーグルト
パソコンは馬券買うためもっている
四コーナ妻の話は聞いてない
緊張と緩和妻にも発泡酒

河内長野市　植村喜代

自然美に叶う物なし秋紅葉
すれ違う人さえ怖い歩道橋
考えずにしたばっかりに取り消せず
いつ何処で何が起るか知れぬ老い
年の暮れ犬もせわしく鳴いている

岸和田市　髙須賀金太

呑めぬのも鍋で盛り上がっています
たこ焼きは元祖の会津屋に限る
てっちりの安値ありがた味が薄れ
健康に薬減らしてからなった
暖冬ですとまだ意地を張る気象台

岸和田市　岩佐ダン吉

ジンクスはおまへん青い空仰ぐ
信という重い一字を投げられる
無に還れよくそんなこと言えますね
八起き目を信じ倒れているダルマ
武器はもう捨てよう同じ星にいる

岸和田市　宮野みつ江

元旦の日記今年の夢一行
贈り手の気負いが見える包装紙
小さな箱大きなハート詰め贈る
指輪より優しい言葉欲しいのに
一合のお酒で私鳥になる

岸和田市　原さよ子

母の手の温みが沁みるチャンチャンコ
宝くじみな当てる気の列続く
漬物にこだわる父の茶漬け好き
心根はピンチの時によくわかる
ぼけたかな同じすかたん繰返す

岸和田市　井伊東吉

デフレ下に並ぶパチンコ宝くじ
党を毀す時期やって来た総理殿
傲慢が残り危機感無くしてる
火薬減り客も減ってるＵＳＪ
家庭にも電飾流行る十二月

堺市　山本半銭

我が道を探りあぐねてはぐれ雲
命日の今日一日はしおらしく
仏さまに不老長寿の茶を献じ
プレゼントされて無邪気な有頂天
明星が私にウインクしてくれる

堺市　西村りつえ

一年のパワー頂く初日の出
バーゲンの一張羅弾むコンサート
オーナーに頭が痛い補強策
積んだ徳はげ出してきた長寿国
終便に伏せ字があった母の文

寒いねと風邪を土産に友が来る
こけるでと言うた私がけ躓く
温い人に私も付いて行く
猫舌と言うて鍋焼き食べている
明日の朝素直にごめん言えそうだ

堺市　齋藤　さくら

校歌にはまだ美しい山や川
外国でも笑いのとれる太郎冠者
日なたぼこ猫にちょっかいかけようか
妻の愚痴我関せずの日なたぼこ
困ったなあ明日はなにして過ごそうか

堺市　志田　千代

来世も夫婦のような予感する
中吊りが父の情報源らしい
平民と書いた昔を父語る
無人機が御金貸すよと誘ってる
ベストセラー聖書を越えるものはない

四条畷市　吉岡　修

ハイテクに囲まれ会話減ってゆく
憎しみは鋭角でくる紙つぶて
アリバイを知っているのはカラスだけ
おはようで夫婦の喜劇始まりぬ
ジパングか青春切符か小さい旅

吹田市　山本　希久子

風向きが変わり本音が見え隠れ
伝言板五七五で書いてある
おおきにと言えば返って来る笑顔
昭和一桁ついに皆が古稀になり
けんか相手今は女房だけとなり

吹田市　太田　昭

日向には鳩も議員も寄って来る
ちんまりと年金の輪に住んでいる
愛妻も月は許して露天風呂
タマちゃんも日本の行方眺めたい
淑やかに皇居の庭の白い猫

吹田市　野下　之男

箱一杯笑い声詰め届けます
玄関を出る時いつも振り返る
秋の蚊をつかまえている午後の部屋
二人分コーヒー沸いて仲直り
曇り空雲におしゃれを見てもらう

吹田市　大谷　篤子

十二月八日六十年前の朝
運試し今年もこりず買うジャンボ
老い二人何も変らぬクリスマス
しめなわも台湾製と書いてある
来年も元気で聞くぞ百八つ

交野市　森本　弘風

夕焼けの頭だけ見るビルの窓
趣味の輪がもうおしゃべりの輪になった
お説教しすぎて少し借りつくる
ハンドルの遊びにも似たティータイム
だらだらとした日もあって良しとする

豊中市　江見見清

南無大師遍照金剛ああしんど
落ちるなと言うのに落ちる寒椿
古家を愛した祖父の血をうける
築百年冬でも風がよく通る
明日こそは片付けようと寝てしまう

豊中市　安藤寿美子

竹釘は百年先も家ささえ
ふれて見て自分で買った嬉しさよ
親よりも長いつき合い夫婦とは
テレビから今夜のメニュー決めました
二十歳から十飛びで来た八十路坂

豊中市　山門タミ

クレパスでゆったり画くあるがまま
妖しい赤よりも静かな青がいい
うやむや橋を渡るとそこは永田町
いつからか疎遠になった祖国愛
人前で叱ると白い眼が刺さる

高槻市　左右田泰雄

モンタンの枯葉レトロなティールーム
激辛を食べた熱さが夜明けまで
風貌は宮本武蔵冬木立
飲みたくて飲むコーヒーのうまいこと
アベマリヤ聖夜は私の誕生日

富田林市　藤田泰子

生きて来たようにしか老い生きられず
医者の梯子健康買いに行くように
少年の渇き大海まだ知らず
痛みどめ心の傷はまだ癒えず
風雪をしのいだ椿横を向く

富田林市　片岡智恵子

聞き流す事を覚えて丸く生き
逢えばまた咲くかも知れぬ恋の花
美しい思い出ばかり残る恋
ポケットで温もり丸くなる礫
本当の自分を知っている鏡

富田林市　大橋鐘造

泣きにきた仏間に広い海がある
年金が細る私の現在地
お返しがピンポン球のようにくる
疲れてる背中に温い国なまり
入門書積んで羊を数えてる

富田林市　中井アキ

高石市　浅野房子

コンマ以下の話にしばし座が白け
問題はみんな抱えているのです
訂正も大人気ないと黙っとく
葬式は必ず顔を出している
ほめてほしいらしいが今日は止めておく

羽曳野市　吉川寿美

仏にはまだまだなれぬへそ曲り
子に見せる後姿を立て直す
掃き寄せた落ち葉の私語もきいてやる
借り物の椅子で答が出て来ない
てのひらの運命の川を流される

羽曳野市　酒井一壺

さりげなく被る帽子がよく似合い
私に似合う帽子は売ってない
気が付けば乗ってた女性専用車
嘘よりも化けるのうまい不審船
泥被る覚悟で啖呵切る度胸

羽曳野市　川口信子

手のひらの薬が増えてゆく恐さ
自分史の余白まだある夢を追い
見えにくい癖を子供が背負ってる
愛憎に揺れた日もある茜雲
どう生きる余生の画布に迷う彩

羽曳野市　三好専平

手のなかは隠したままで肩を抱き
だまされる方が悪いに腹を立て
つま楊子すこし余分にとってくる
新聞の広告読んだことがない
右向くと左のことを忘れてる

東大阪市　北村賢子

受賞する男死刑判決受ける女
人類の罪責めてるような子の瞳
他人事と見て見ぬふりに罪がある
路地暮らし勝手知ったる他人の家
交わし合う指輪もなくて五十年

東大阪市　谷口義

ベレー帽かぶった人が手を上げる
失礼でない現金の贈り物
約束は何にもしない夫婦です
揉めているところは避けて通ってる
サイダーを飲んで元気なおばあちゃん

東大阪市　安永春

事始め師へ郵送の句用箋
気遣いのそっと嬉しくありがとう
プレゼントなにもいらない会いたいの
うろうろと不良の鳩が夜の駅
火種抱く赤ネクタイのブッシュさん

新春の空に私の夢が舞う
私を反省させる猿が居る
もう少しお借りしますは本のこと
夫婦愛老いた指でも光ってる
チョコレート渡しそびれて食べました

東大阪市　指宿千枝子

びりでよし一緒に走りたいのです
正直で頑固な人の横に居る
飲み会で写す仏の顔ばかり
笑うしかないので笑うことにする
おでん鍋今日と明日を煮込んでる

東大阪市　中岡妙

落丁のあたりに少し好奇心
常識が妙な所に置いてある
最大の敵かも知れぬ両隣
辛い時頑張る嬉しい時張り切る
もう少し焦らせてやろういい返事

藤井寺市　太田扶美代

催促の手紙を筆で書いている
きっかけを掴むと枝がよく伸びる
乱丁はきっとわたしのせいだろう
飛び石をひょいと渡った影法師
身のこなしさすが育ちの良さが出る

藤井寺市　髙田美代子

仏に借りて鬼に催促されている
三面鏡冷酷すぎる傍観者
ノーという答に賭けた四面楚歌
充電へ力を借りる焼き鳥屋
終わってみれば案じたことが馬鹿みたい

枚方市　海老池洋

子育ての隣が活気配る朝
妻の留守おでんおでんの日が続く
手拍子が多くて独楽が止まれない
嫁いだ娘もう方言で電話くれ
十九年バージンのままポチが逝く

枚方市　宮川珠笑

暇だから忙しくなる資金繰り
妻の乱家事丸投げにして出掛け
一日を髭剃りながら組み立てる
本当の故人を知った通夜の席
娘と合わす週に一度の休肝日

大阪市　鶴田遠野

にんげんを育む母の強い愛
今日からは親類になる他人さん
明日の風どちらへ向くかよく眠り
まくらが長うて早い話の出来ぬ性
明日またねと軽く別れてそのまんま

大阪市　本間満津子

大阪市　奥村五月

末席の意見はただの雑魚でない
院号を金までだして買わされる
命がけそれでも行くかパスポート
戴いて喜びきれぬ癌保険
手術後の骨が浮きでる露天風呂

松原市　國見蘭香

かび臭い作法急には使えない
寒い夜はわたしもつられ一人なべ
陽が沈むさようならよと言うように
靴替えて隣の犬に吠えられる
携帯を切ると落ちつく旨い酒

寝屋川市　冨山ルイ子

おだやかな顔こちらまで和まされ（母に会いに行く）
大声で泣き出しこちらももらい泣き
さよならと永久の訣れの予感かも
まだ今も見果てぬ夢を追い求め
峰打ちをされた傷口まだ痛む

寝屋川市　森茜

仙人が息吹きかけて桂林くもる（桂林　2句）
連山へ吸いこまれゆく二胡の音よ
かの国へ青いリボンが届くよう
外つ国の指紋も届くエアメール
出おくれたジョークバッグにしまい込む

寝屋川市　酒井勇太朗

幕引きが出来ず老醜さらけ出す
用心をし過ぎて罠が見抜けない
華燭の典見届けたいよ孫五人
古希夫婦揃って元気ジム通い
表彰の額が淋しい三回忌

寝屋川市　平松かすみ

鬼は外言われるほどに強くなり
ウインクと誤解しないで花粉症
活発な孫にはらはら滑り台
重ね着の叔母に似て来た六十路坂
重箱の出番もなくて核家族

寝屋川市　江口度

乱数表のように野菊が咲きほこり
心決め爪を切ってるオペ前夜
母さんが一番強いと思うポチ
荒れた掌に家族の丸い顔がすむ
夫婦喧嘩好きと嫌いは紙一重

箕面市　出口セツ子

新年に密かに燃えている野心
実父も義母も逝って淋しいお正月
新年の挨拶に行く家が無い
数の子も餅も亡父の好きなもの
ありがとう今日を謳歌をして生きる

八尾市　井尻　民

どこまでが他人でどこまでが絆
去年とは違うひとりのルミナリエ
味はおまかせの女将の店による
夕映えの岬私のために凪ぐ
いきさつを喋り終ってつく吐息

八尾市　髙杉千歩

二ン月の鬼が恋しい歳の豆
吉報を待っているのに長電話
自分史の本音に迷う削除キー
二千円札お年玉にみな化ける
如月やスロースローですぐ昏れる

八尾市　宮崎シマ子

少し過労私の気圧乱気流
足もとへ物言いたそうに来た落ち葉
夜鳴そばの笛ゆっくりと夜が更ける
どの扉あけても主導権は女
淋しくてやたら電話をかけまくる

八尾市　内海幸生

裸木の蕾へそっと息をかけ
寝て映す手鏡に居る他人様
同じもの毎年くれる友が居る
拉致なんかするもんですか年寄りを
ジャンボくじ買うてはるよ金持ちが

八尾市　神原まさと

欲が出たとたんに株価下がり出し
逃げ腰でパンをやるから吠えられる
カシミヤのコート値下げで手が届く
予防接種受けたとたんに風邪を引く
食堂で子の食べ残し食べるパパ

八尾市　村上ミツ子

せまい日本に夏日冬日が同居する
雨の日は雨を味方にして過ごす
作詞した校歌にいつも癒される
むつかしい字だよう読まんよう書かん
どうしても手足がついてきてくれぬ

八尾市　山本宏至

意表つく子供の問いにうろたえる
好きなもの後に残して食べる癖
まだ生きていたかと友の悪いギャグ
駅員の介助嬉しい車椅子
口惜しさに酒が誘いをかけてくる

八尾市　吉村一風

生かされてだんだん募る生きる欲
さくらの花に切って障子の穴うめる
生き甲斐を探す夫婦の花鋏
頭下げ言葉少なに退き上手
度の過ぎた世話はするなと祖母ぼつり

八尾市　生嶋　ますみ

十指みな役目があって交わす手話
有頂天のケータイあたり気にしない
陽が沈むまでに夫に謝ろう
酒飲めぬ遺伝子までも貰い受け
耳たぶにやさしい響きひつじ年

大阪府　籾山　隆盛

正式に娶ると八十歳の父
日向ぼこ日課に鶴を折る痴呆
ミサイルも地震も予告なしにくる
二日酔い昨日と今日がつながらず
ビル街の珈琲館は地下にある

神戸市　池田　善守

ルビー婚妻への悪に時効なし
他人ごとのように思えた古稀を越え
妻の身になりきれなくて悔いる日々
貯め方から使い方へと変わる金
やってあげる心はニセのボランティア

川西市　米原　雪子

披露宴予算を越える客の数
聞き上手相槍だけで喋らせる
相槍に愚痴が勢いづいてくる
検診の結果気になる不養生
伝統の鍛冶の技継ぐ父子の愛

川西市　西内　朋月

逝く秋を惜しんで月と酌み交わす
廃屋にどんより垂れる冬の雲
襟立てておでん食ってる宵戎
放尿の音に元気を確かめる
安いだけ仕上げも早い理髪店

三田市　北野　哲男

おみくじは今年大吉年の暮れ
七五三孫の手をひく無神論
遺影でも四方睨みの姑がいる
み仏の掌に盛りかねるほど願う
天下取る手相で妻には叶わない

尼崎市　春城　武庫坊

遊ぶ子がおらず未来の絵が描けぬ
歳重ね景色の裏が見えてくる
雑踏に浮かれた顔が見付からぬ
自販機によごれたコイン選って入れ
第九聴き今年の憂さが皆流れ

尼崎市　春城　年代

十二月なにをしてたんこの一年
十二月今更ながらガラス拭く
弟の余命車を買い替える
この街を離れたいのに苔がむす
いやらしいとは思わぬが馴れ馴れしい

尼崎市　長浜澄子

大阪人　口上抜きにすんまへん
毎日が一足す一はつまらない
交わらぬ視線の奥に自己主張
神さまの軍配気にはせぬことに
オーイと呼び舛が返らない不安

尼崎市　田辺鹿太

バランスの取れた食事は味気ない
ストレスが溜ると飯が砂になる
悪女かも知れない妻が小煩い
打ち明けるチャンスを待っている主治医
歩数計ノルマのあとの缶ビール

伊丹市　山崎君子

寒ボタン菰をかぶってさまになる
干し柿はしわ多いほど美人とか
大根だき恵みいただく傘さして
ノーベル賞暗やみぬける二つの光
男手のありがたさしむ杵の音

西宮市　西口いわゑ

生かされて数えきれないほどの悪
知っていることも尋ねて仲なおり
手の中の夢よ大きくジャンプせよ
背のびした分だけちぢむ命かな
もうひとつの顔が背中に刻まれる

西宮市　長谷川淳

居酒屋というスタンドで給油する
友の名をまた消しに来た郵便屋
五十年経って理想の妻となる
国富めどなぜか私にない余裕
メイドインチャイナに席を奪われる

西宮市　門谷たず子

日本海の波が噛みつく蟹の宿
人間の小ささ嗤う波がしら
娘夫婦と旅の雪さえあたたかし
こんないい日もあってそろそろ老いてゆく
他人事とは言えぬアドレスの赤線

西宮市　井上松煙

寒菊の強かに咲く心意気
おおらかに手を振りいとし愛子さま
二人だけ暖まってる鮟鱇鍋
お隣のセコムにうちも安堵する
借金が緊張感を駆り立てる

姫路市　古川奮水

鮮魚屋の声は何時でもハネている
雑魚ばかり寄って師走の缶ビール
難聴の夫婦の会話面白い
ロック歌手おへそに光るもの見せる
割烹の老舗で日替り昼を食う

保険金掛けた旅行が無事終る
ねむらないラジオとねむれない私
深深と独りの夜の吟醸酒
癌と闘う美しい憂です
命とはアスファルトさえ割って咲く

橿原市　居谷真理子

世直しの旗手を捜して年明ける
ＩＴで世界の風をキャッチする
雪月花愛でて流れていく月日
青年のもやもやカント読み始め
長生きの薬たっぷり出すカルテ

奈良県　渡辺富子

頼母しい貴方敵にも味方にも
話半分なるべく大きい嘘をつく
コンビニの目玉骨抜きしたサンマ
目の鱗落しに暮れの街歩く
喫煙家同士悲哀を分ちあう

和歌山市　福本英子

コミュニティ五七五の枠の中
自己判断口に溜まった唾を呑む
顎引いて少し笑ってからポーズ
まだ走る気の息切れにトホホホホ
薪ストーブと出会う岬の船着き場

和歌山市　桜井千秀

こんなところにこんな写真がまあ若い
食べ盛り育ち盛りの皮下脂肪
皺寄せが上の子に来る子沢山
ハイハイと聞いて背中へあかんべい
夕食まで何度味見のおでん鍋

和歌山市　田中みね

一日をまるで私は全自動
ごめんなさい言われて構え崩れかけ
スカーフにこだわって見る初対面
カタカナが攻める私の広辞苑
紙オムツ輪廻の果てを知っている

和歌山市　吉村さち子

冬枯れの道でバランスくずれそう
初孫が出来たと姪のはしゃぎよう
冨有柿の甘さと友の真心と
子には子の暮しがあって聞かぬこと
トンネルを幾つぬけたか空の青

和歌山市　細川稚代

若者の言葉拾えぬ周波数
すかたんも言うてバランスとっている
いい男に見えるお鍋の向こう側
まどろみの中で椿の落ちる音
一部始終見てるホテルのボーイさん

和歌山市　楠見章子

和歌山市　古久保　和　子

電飾の街で師走の空騒ぎ
忙しい私を呼んでいるケトル
短日の門に灯を点け忘れ
オリオン座明日は告白するつもり
レプリカの埴輪に帰る故郷がない

和歌山市　木　本　朱　夏

フランスという美しい贈り物
ゴッホの耳捜す黄色いカフェテラス
カタコトで値切る楽しさ蚤の市
ブランドに群れる醜い日本人
昨日今日明日へセーヌの無表情

和歌山市　玉　置　当　代

置いてきた子供気遣う空の果て
一呼吸置くと和んでくる空気
仲ようもしたいがストレスも溜まる
口堅く閉じて災い避けている
さまざまな知恵詰込んでボケてゆく

和歌山市　上　地　登美代

銀河鉄道時どきぼくも乗りに行く
宇宙人とカミオカンデで逢えるかも
現実にアニメが部屋をノックする
土と虫付いた野菜のねぶちもの
大根と話が弾む畑の中

和歌山市　榎　原　公　子

歯磨きはソルトで朝を引き締める
カレーにソースかけあの頃の話する
回し飲み　みな兄弟の顔になる
ＩＴの小難かしさに背を向ける
ぬるま湯のあくびへ水を掛けられる

和歌山市　川　上　大　輪

艫綱を解くと女蝶になる
鉤括弧の中は立ち入り禁止です
起立礼から始まった理想論
ひとり旅どこで降りてもいい切符
金の無い奴ほど荒い金遣い

海南市　三　宅　保　州

戻れない道にもつけておく印
パソコンにみんな向かっている職場
ケータイが鳴ったと嬉しそうな妻
ねつ造以来本物かなと思う土器
妥協したときから消えている自信

和歌山県　中　後　清　史

上段の構えが好きな星条旗
一筋の道に紆余曲折がある
好き嫌い強くて伏兵も多し
テレビショッピングが部屋を攻めてくる
趣味ですと軽く言うたが必死です

鳥取市　西村黙光

やることがないと碁敵やってくる
口先で勝負するのも面白い
碁敵と感情線を磨き合い
碁敵が呆けの化け物追っ払う

鳥取市　杉本孝男

恥をかくつもりで綴る原稿紙
細腕でよければ加勢してもよい
あなた好き　か細い声が届かない
冷汗もの選者の器量試される

鳥取市　福島庸二

白黒をつけがたいほど名勝負
頼みごと盛り沢山の初参り
年金の暮らしにきつい負担増
十人が十色で光る座談会

鳥取市　宮脇道子

曼珠沙華幼な心に恐い花
好奇心強い女で球を打つ（グランドゴルフ）
自己反省全くなくて世を憂い
結ばれて釣りさげられる大根よ

鳥取市　加藤茶人

語りたい夢が盃からあふれ
恥さらす僕は性善説が好き
色っぽい女に似合う京なまり
末席で酒の力も借りた愚痴

鳥取市　山本益子

山紫水明　自然美に酔うひとり旅
親子にもジェラシー火花歯止めなく
反骨の父元気なく影薄い
介護保険　身を守るため学ぶこと

鳥取市　山宮愛恵

一滴のレモンに満ちる力水
豪快な人が黙々みかん剥く
寝転んで天付き体操する花野
何処にでも行ける私の幸せ度

鳥取市　中村金祥

披露宴晒すつもりの功労記
北の国まだまだ秘話があるらしい
予想屋も悲鳴をあげる株下落
何もかも無くしてみたら強くなり

鳥取市　春木圭一郎

広い海小さな自分また感ず
自分にも分からぬ私持て余す
決めた道自分の足で真っ直ぐに
迷わない自分の心信じたい

鳥取市　冨山檳榔樹

初日の出拝み悩みが消されゆく
茄子紫　蕾から着て艶を出す
脳細胞老化させぬぞ土性骨
好きだから許して欲しい嘘を買う

鳥取市　武田帆雀

エンジンが掛からぬ朝のボールペン
草虱とってあげると言う女
使い場によって役立つ丸太ん棒
暮れるまで頭を下げるレジの娘

鳥取市　田村邦昭

色っぽい女将目当ての群れにいる
素顔には人間らしさ残ってる
通勤の靴にも妻が光ってる
パソコンを孫に学んで恋を打ち

倉吉市　野口節子

晩学のペンが重たくなって来た
見て見て見て輝いた日のハイライト
病む母に二月の風は厳しすぎ
和やかな風が生れるおはよーさん

倉吉市　山中康子

温泉の効きめ真の友が出来
四階の窓から山の機嫌問う
内定を喜ぶ孫の胸に鐘
退院の我が家の灯りあたたかい

倉吉市　猪川由美子

金総書記美女と拉致とが好きらしい
不況の嵐ジングルベルが聞こえない
クリスマス神は不在のバカ騒ぎ
クリスマスケーキ歳重ねても止められず

倉吉市　山本玲子

北風がゆさぶりかける木守り柿
夜目遠目おやおや妻も美人だね
ハタチの写真いまの姿は予想外
同情はしても真実他人事

倉吉市　米田幸子

鼻ぐすり嗅いだと背なに書いてある
お迎えが来たら静かに受けてたつ
元気だが明日の保証は何も無い
嬉しいと自然に顔がほころびる

倉吉市　牧野芳光

仮の服仮のネクタイ仮の顔
軒先に吊ってあるのは自尊心
ハイヒール神経質な音がする
人の良い女がべた足で歩く

米子市　神庭詩郎

観光地景色を消してビルを建て
進学の孫関西弁のなまかじり
理解せぬまま手を上げた多数決
少しうつぶらり鈍行一人旅

米子市　木村春枝

役終えた落葉の中に紅一葉
一年の計をゆるめに立て直す
言うべきか言わざるべきか口ごもる
年男ふくよかな風抱いて来る

悪声でも真実こめた声がいい
かたつむりこんな雪の日どこに住む
スイートピー仏さんには春の風
強がりの裏に弱さがへばりつく

米子市　中井ゆき

手紙より声の便りを待つ母で
無農薬をいわれついつい買いだめす
それぞれの星が織りなす天体ショー
機械には弱くて父に頼りきる

米子市　光井玲子

嫌嫌と点滴細き手が拒み（小児病棟にて　2句）
抜け殻の親残し子は神の下
運不運銭の力が強過ぎる
亡き夫に会いたくなると目を閉じる

米子市　永井三津子

旅に出てふだんの暮しふり返る
期待しないで春の風船ふくります
荒く織った絆時々補修する
ふり出しに戻って迷い晴れてきた

米子市　青戸田鶴

一泊の旅胃薬をポケットに
紙袋旅のみやげがにぎやかい
ふる里に帰る切符が弾み出す
目が覚めて昨夜の夢を振り返る

鳥取県　石尾かつ乃

一呼吸おいて話せば波立たぬ
趣味という薬に気力貰ってる
コンビニの明かりで活気戻る街
言い訳に風邪を時どき利用する

鳥取県　鳥羽直市

出払って連休静か風を聞く
甘い顔すれば大役させられる
働いた汗生きている心地する
嫁迎え土台しっかり固くなり

鳥取県　鳥羽玲子

この家は売れぬよ亡妻の帰る家
向こう岸見ればいつでも美しい
百薬に勝る孫等の肩叩き
いい話喋りたくなりドッコイショ

鳥取県　西沖彰雄

そばがらの枕で明日の夢を見る
止まれ進め母の信号愛のむち
ほどほどに出来ない性で仲違い
国文祭終り街中ホッとする

鳥取県　太田幸枝

大正の末期うまれでやや頑固
生き甲斐がこんなに余生楽しませ
気づかいに触れて温もる白い杖
風となり亡妻が僕の樹揺すり出す

鳥取県　山本正光

鳥取県　平井栄翁

注ぐだけに下戸二次会へ後を追う
判決に屈せぬ男北育ち
本人が知らないだけの千鳥足
星空と混浴をした露天風呂

鳥取県　近藤春恵

夢かない機上の客となって飛ぶ
よくしゃべる男だんだん薄く見え
横文字が老いの頭をいじめ出す
最後まで人生の花咲かせたい

鳥取県　西川和子

父母眠るふる里だから足が向く
薬より効くと温泉通いする
切れ味が勝負スカッと刈り上げる
研ぎ上げた鋏に暮しささえられ

鳥取県　原　みさを

撃つのはまてアラビアンナイトはまだ序曲
タマちゃんと総理画面の両端に
ハッピーエンドにするための嘘まだつづく
まだ川柳やってるのかと酒つがれ

鳥取県　埒　寛子

旅半ば道連れ違っていたらしい
幕降りる終着駅をきめぬまま
願いごとあってか雪に残る柿
おかしいと言われてるらし誰も来ぬ

鳥取県　さえき　やえ

父似です自慢のように言う娘
ふやすより今あるものを枯らすまい
人間のゴミになるまい写経する
羊のくる道美しく清めとく

鳥取県　上田俊路

コスモスが休耕田に秋を呼ぶ
収穫祭隣は新車買ったらし
インフルエンザ予防接種は初雪日
晩学の励みに電子辞書を買う

鳥取県(故)　権代康女

成功のジャンプに笑顔ほころびる
表情が豊かになって芸がさえ
長寝して腰の痛みが増してくる
迷うほど品数有ってきめかねる

鳥取県　下田茂登子

年金でどうにか食べて老い二人
意識ない老母横綱と格がつく
何もかも見ておりますと仏さま
川柳に出合い苦しみ語りかけ

松江市　佐野木みえ

深い井戸耳を澄ませば笑い声
師走とは忙しそうな人の波
また一つ趣味を増やして年の暮れ
原発の地元豊かなテニス場

台本の足りぬ言葉を考える
ストーブが燃えて背中を急っつつく
曖昧なままで崩れる水ぎょうざ
門灯が嘘を素早くまとめさす

松江市　河本　畔

山裾に噛み付いているショベルカー
百薬の長は女房が処方する
打ち明けて喉もとの棘やっと抜け
満身創痍見せぬ男の空元気

松江市　三島　淞丘

母に似る美人ばかりだ三姉妹
ばらの花棘に守られ美しい
山と食べた松茸飯は輸入物
美しい女の浪費美しい

松江市　小川　注湖

焼け太りスポット浴びて三拍子
島暮し分身の舟とひねもす
彼の世には賀状出したい人ばかり
自省してもろもろ流す石鹸粉

松江市　安食　友子

冬ばらの命にふれる陽の温み
短日の畜舎主待つ牛の声
野ばら一輪飾りわたしの誕生日
磯笛に海女は命をかけている

出雲市　小白金　房子

如月の想いの果ての猛吹雪
どっちみち日本はミサイル射程距離
お静かにお願いしますお殿様
人形の家にも雪が降りつもる

出雲市　石倉　芙佐子

朔の日は縁起かついで物入れる
宅配が来ると師走の顔になり
どっと写真同窓会の縁起物
洗濯をすると女は寿命のび

出雲市　富田　蘭水

右左見てはしぶしぶ手を上げる
真心はいつか通じる門が開く
善と悪背中合わせのなわを縒る
口ぐせをよく我慢して聞いてくれ

出雲市　久谷　まこと

木枯しに見届けられていく木の葉
僕だけが木枯しに遇うわけでない
忘年会下戸に虚しい呑み放題
忘れよう忘年会に会った数

出雲市　岡　あきら

夢をみよう夢を抱こう春の詩
取り直しあって人生面白い
一病を庇いマスクが離せない
冬穴がどんどん深くなるモグラ

出雲市　吉岡　きみえ

食べた柿プイと飛ばした種から芽
ああお酒俺は良いけど胃が怒る
ふぐ刺も良いが温もるアンコウ鍋
寒くては貧乏神も近寄れず

出雲市　板垣夢酔

情熱で貯めたお金が底をつく
わたくしの回りはみんなお金持ち
善人の顔で時々ズルをする
婦人科の椅子にためらい置いている

出雲市　佐藤治代

せせらぎに乗って落葉の旅つづく
落ちそうな雷鳴だった無事だった
石蕗の花無人の駅に灯を点す
干柿がゆっくり歳をとっている

島根県　森茂美

親の恩無欲になって子に返す
一日のはじまり母が笛を吹く
紅葉狩り紅い雫の下にいる
好奇心輝いている子の瞳

島根県　多々納テル子

新年や枯木に花を咲かせよう
つい昨日の記憶でご無沙汰してました
会うて話して後のサヨナラなおさみし
雪だよりクシャミの数を競い合い

岡山市　川端柳子

逃げ道のひとつぐらいは開けてやり
チャレンジの意欲もうすれ老いさびし
ストレスも試練のひとつかも知れず
はじめての歌舞伎に八十路興奮も

岡山市　井上柳五郎

指一本怪我して指の恩をしる
もめ事も水に流して澄む川面
老いてまだ欲をたくわえおしゃれする
くよくよを叱ってくれる里の山

岡山県　富坂志重

ひとり住む事にもなれて羽根たたむ
鬼と仏を飼いならしてる姑の胸
火の鳥をいまだ離せぬのも喜劇
誤字脱字が大手を振った古日記

岡山県　山本玉恵

沈黙のお祈り産声待っている
地図にない自由な道を老い二人
反骨の後ろ姿にある自信
人生の壁の厚さを今思う

岡山県　福原悦子

源流の湧水だって春が好き
けもの道私の地図に確と書き
ネクタイのしがらみ外し好々爺
アンテナにピョンヤン放送入らない

竹原市　古谷節夫

竹原市　岩本笑子

冬将軍のメールは春が怖いとか
杵もちを御裾分けして年が暮れ
善人は疲れますねと肩をもみ
さらばさらばカウントダウンの向う側

広島県　福島万年

風船について行きたい青い空
先生の魔法の杖で子が光る
ばあちゃんの新車は赤のニューマーチ
医者とする大腸内視鏡の旅

熊本市　永田俊子

教育勅語忘れぬ私嫌になる
無口でも喋る分野は持っている
存在感老人軽い咳をする
自問自答して足跡をたしかめる

熊本県　岩切康子

長旅へ覚悟の杖を使って見
誘われて来たに気遣う事多し
食べ方を習い珍種の土産買い
話題から命日になり連れ墓参

熊本県　高野宵草

叱られた釘効いている十七忌
畏友逝くなぜだ何故だと木魚の音
自分史は辿りたくない恥ばかり
神仏と一緒に食べた朝ご飯

唐津市　市丸晴翠

慈悲深い母にもあった阿修羅の日
待つことに疲れた母のおでん鍋
入浴剤今日は別府と孫が決め
連れ添った足腰に出る不協和音

唐津市　山口高明

駿馬駆る春の岬で風になる
お顔だけ磨き磨かぬ台所
琴線に触れるおとこが見つからぬ
何時の世も民草ばかり搾取され

唐津市　井上勝視

母と娘の深い絆の口喧嘩
不条理もゴリ押しをする武力の差
写経する心に欲は無いだろか
不摂生の果てはやっぱり神頼み

香川県　瀧井勝

快適な列車着くのが速すぎる
大根を漬けて大事が一つ済み
溺愛が呪縛となって子が背き
細やかな暮し彩る庭の梅

松山市　高橋宏臣

障りない言葉を探す初対面
正直な人ねお世辞がぎこちない
快復の明日へ次々欲が出る
追求が過ぎると転げ出た誤算

冷暖房操作を忘れ使われず
隣から山茶花こちら向いて咲き
お隣へ長芋あげる柿が来る
こつこつと誠実一路除夜の鐘

高知市　北川竹萌

ケイタイが父娘のきずな連れてくる
それぞれの旅に不慣れな手をつなぐ
罪汚れ洗うお四国クリスマス
結局は独りになって歳暮れる

高知県　小澤幸泉

まっとうに歩めば幸に出逢います
好きなこと毎日できて日々楽し
里の駅母の匂いの風に逢う
見て見ない振りする人が多過ぎる

十和田市　阿部進

来て欲しい来て欲しくない孫の数
名刺代わりになっている津軽弁
開け放つ窓から友は腹を割る
やじ馬の中に潜った好奇心

弘前市　小寺花峯

半月板無理も強気も通じない
熱い心で貼った切手は鼓動する
小事みな捨てて津軽は雪になる
穏やかな日よストーブは丸く燃え

弘前市　宮崎ヒサ子

胃袋も真冬日の夜は熱燗を
寂しさに我慢が続く雪地蔵
明日も雪酒と湯豆腐だけの夜
姿見の中で小さく背伸びする

弘前市　相馬銀波

朝ドラに合わせて起床する夫婦
長風呂の音を時々見守られ
不景気をよそにペットが増えてゆく
捨てるにも惜しい空箱もて余し

弘前市　須郷井蛙

人の世の汚れを嘆く地蔵さま
じょんがらを踊る女はただ無心
母の忌やよされよされと雪が降る
雪五尺雪の下にも芽吹くもの

青森県　西谷大吾

茶畑に乙女のままで喜寿を過ぎ
楢山にラットと住んで恙無し
仕損じも思い直せばバネになる
簡易婚どこかで式を挙げて来る

国分寺市　酒井輝

東京で人情の種播きましょう（東京転居）
ダンボールの山にかくれて泣きそうだ
主婦キャリア消し飛んでするヘマばかり
元気出しまず見参のゴミ捨て場

国分寺市　岸野あやめ

東京都　後藤早智

突然に踏み絵のような分かれ道
立ち尽すトキは思い出断ち切れず
不器用なヒツジに辛い回れ右
気兼ねせず今日の生命を使い切り

横浜市　田中笑子

古稀迎え余生みつめる第一歩
占いは好きじゃないけど気にはなる
帳じりの合わぬ家計簿続く日々
優勝へ暗示をかけるお呪い

富士宮市　渥美弧秀

傘寿の宴心おきなく酔い始め
追伸の一行絆深まりぬ
青春の謎読み返す古日記
愛子様振る手が愛し母の胸

富山市　島ひかる

おだやかに正月がゆく香を焚く
晴天も雲で見えない富士も良し
また逢えることを信じている別れ
豊かさの裏に潜んでいる怖さ

京都市　都倉求芽

信念というほどでなしただの意地
叩いたらぐわんと唸る鉄が好き
言いすぎてあとのまつりの悔いの酒
助手席が家の中でも口挟む

亀岡市　井上森生

天地の恵みはここにも蕗の薹
紅葉に十円玉を翳し見る（宇治平等院）
優雅にも世界遺産と京料理
経営の指南にきらり雅号印

京都府　丹後屋肇

小春日の郵便受けに督促状
俎板の鯉よ利いてくる麻酔
一皮が剥げず地団駄踏む未熟
ジャンボくじ当った夢が打つ鼓動

大阪市　安達はじめ

窓際の椅子でゆれてる心の灯
ひっそりと心に住んでいた般若
突き放すことで心を引き寄せる
冗談の中の本音に気がつかず

大阪市　清水絹子

看病の合間の紫煙止められず
七五三の孫引き寄せる母と姑
祝儀通夜いつの間にやら年の暮れ
年の暮れ日増しに派手な抽選器

大阪市　寺井東雲

運がつく働き者の妻が来た
勤労感謝出来ないほどに仕事ない
値切るのは大阪弁にかぎります
平和かなタマちゃん人気続いてる

大阪市　津村志華子

辻褄を合わす片棒かつがされ
グルメ旅出好きの母の靴が鳴る
子の部屋はまるで芝居の楽屋裏
婆ちゃんはへそくりしっかり抱いてはる

大阪市　小泉ひさ乃

ささやかな贅主婦ひとりカプチーノ
不況続き手持ち無沙汰の招き猫
不運かな男は夫しか知らず
整骨師の手から伝わる癒し系

大阪市　榎本舞夢

気分良くファッション変えて街に出る
誘われて今日しかないと出かけてる
整理したはずなのにまた増えている
バカラの皿ほこらしく盛るサクランボ

大阪市　鈴木トヨ子

身をいとい未年へと身構える
未年三代集う屠蘇の膳
落椿雪に抱かれて艶を増す
ストレスをすっきり捨てるおぜんざい

大阪市　中村叡子

団体が着き露天風呂芋の子に
有名な夕日の名所刹那待つ
今度こそ土産買わぬと思いつつ
炭石鹸効能書きに魅かされて

大阪市　熊代菜月

笑顔からきれいな花を咲かせよう
青信号杖を忘れて走り出し
もう五分あと五分だけ冬の朝
願いごと無くても合わす小さい手

大阪市　松尾柳右子

カラフルな傘が行きかう御堂筋
木枯しも気にせぬ二人御堂筋
賑やかなざんか散るも賑やかに
人生の醍醐味川柳カラオケに

大阪市　中田あい子

タマちゃんも都会の灯好きらしい
呆れます同じ手口でだまされて
朝日うけ鶴のひとむれ神々しい
よいがよい　わるいがわるいでもない世

大阪市　川原章久

妻にあわすと息子にあわぬ歩の早さ
これからはもう保険屋が来ぬ傘寿
おみくじの凶の怖さに手は出さぬ
本年もどうぞよろしく神仏

大阪市　伊藤博仁

色づいて張り替え迫る紙障子
落ち葉踏む音懐かしや里の秋
八十のスタートにつく征き残り
かまきりの骸を埋めた雨上がり

太陽が沈み切るまで見惚れてる
諭吉さんわたしの家でごゆっくり
ぶくぶくとひつじ肥って走れない
天国も地獄もいつか一人旅

大阪市　榎本　日の出

火消し壺女の炎（ほむら）消しかねる
隣からとろりと煮えた蕪来る
料亭の石蕗の花客招く
指先をくわえ手袋えいと脱ぐ

大阪市　大塚節子

許せないそうは言うても許したい
返答は聞かれた時に考える
一まわり大きくなっていく冬芽
香も立てず見た目に地味な枇杷の花

池田市　栗田久子

十二月大忙しで過ぎてゆき
喉仏だんだん小さく消えそうだ
入れ歯して具合悪いがまんする
正座して新聞を読む妻強し

池田市　岡本吉太郎

先生は涼しい顔で秘書が盾
税理士が辣腕発揮する二月
節分の豆九十一黄粉餅
梅笑う気候不順も何のその

和泉市　岡井やすお

小春日に背筋が温い南窓
年金の暮らしにネクタイ遠ざかり
冬木立寒さに堪える唸り声
酒一合満足という血の巡り

和泉市　西岡洛酔

借る時の話と違う使い方
晩酌へ贔屓の投手出るテレビ
訓練はバタバタしない震度七
菊人形テープ音楽聴き飽きる

茨木市　藤井正雄

幸求め南南西へひつじの子
バトンした馬から羊　走馬灯
中之島公会堂また芸の会
ベッカムがさわった金の写真撮る（淡路島）

交野市　山川日出子

病名を隠さず名医のストレート
酒飲める夢を見ながら手術台
ドクターに腹叩かれた太鼓判
寒いけど心温もる狸そば

河内長野市　井上喜酔

ヘソクった本を忘れて曝書する
ボテボテのヒットに命拾いする
感情の無いロボットを雇います
白星はライバルのした勇み足

岸和田市　木村正剛

岸和田市　藪野　けい子

おしゃべりに調子合わせて飛ぶ流言
飲むほどにグラスの小指立ててくる
まごついて布団のはしで転んでる
字を忘れワープロ検索頼ってる

堺市　神原　文

あみだくじなら一番を引く不運
せめて百万賭けてくじ運試したし
トンネルを出ずにとにかく初笑い
思い出に賞味期限はないとみえ

堺市　源田　八千代

響き合い繋げて行こう次世代へ
ひと言の辻褄あわす饒舌家
非常時をつい忘れてる常備薬
一人旅　津々浦々の時刻表

堺市　村上　玄也

まだ席を譲られたことありません
物差しを変えたら黒も白く見え
底辺に生きてて打たれ強くなる
肩書きを外して囲む温い鍋

吹田市　早川　棲世

カナダ周遊先々巨泉の店が待つ
脅す騙す強がる憎む国と国
関空のうどんがうまい旅の果て
歴訪の結論膿んでいる地球

吹田市　瀬戸　まさよ

湯たんぽの温さうれしい友と居る
息災と引き換え高い大根炊き
特養の母の無心はあんただれ
美人には酌する人の絶え間なし

吹田市　岩屋　美明

メイドインチャイナばかりのくじの福
付き合いでお参りに来たえべっさん
くいだおれのロイド眼鏡もお正月
冬の虹僕を詩人にしてくれる

吹田市　穴吹　尚士

年金で遊んで暮らす罪悪感
家までの関所が続く駅の裏
老妻に家事の割り勘迫られる
湯の街が化粧落した昼下がり

大東市　南原　正和

運掴む気運が読めず底にいる
甘党の彼も部長の酒は呑む
肝臓を刻む思いでそっと呑む
発車ベル　ダッシュで乗った若さ消え

大東市　児玉　蛙

客帰り淋しい部屋で猫と居る
大きな夢老いて段々痩せて消え
胸襟を開けば皆寄って来る
野仏に愚痴を聞かせて手を合わす

高槻市　乙倉武史

酒煙草値上げ庶民を敵にして
黙否して無気味な笑みの被告席
脳に活入れる積りの辞書を繰る
恩返しする気で亡妻の墓洗う

高槻市　傍島克治

よくもまあ可愛い口から出るいけず
妻そっぽこれで味方は誰もいず
如月の月に凍える影法師
宴席の隣も下戸でほっとする

高槻市　生田義一

大相撲チャンピオンみな外人さん
遊園地不思議の国で孫はしゃぎ
紅葉愛で美術展へとおしゃれ旅
七五三ベルトゆるめてバイキング

高槻市　西谷治三郎

倹約も我慢もできぬ孫育つ
飲み放題あしたの検査心配に
本書籍整理の書斎パラダイス
喜寿迎え番号付きの人となる

高槻市　井上照子

もめごとの悔しいことを月に言う
奪うまで演技重ねる処世術
泥舟のピンチ自力で泳がねば
妥協した弱さつくづく自己嫌悪

高槻市　江原秀夫

丸い地球角つき合わす国のエゴ
世論調査そんなものかと日向ぼこ
いい夫婦気どって並ぶバスツアー
グラス手に楽しい嘘がもてている

豊中市　吉田あずき

病院をふらふらで出る検査漬け
生きる鼓動師走の渦の中でくく
二次会になったら声が大きなる
踏み出せば新しい風吹いて来る

豊中市　樫谷郁子

わかったと肩叩き合う熱い友
まかしとき心丈夫な友の声
十二月枯葉のように喪のはがき
友人といい間柄今日を生き

豊中市　岸田知香子

逆境を糧に今あるつつがなさ
好きなこと肩も凝らさず時忘れ
指定席温める暇なし貧乏性
リビングのハミング今日のバロメーター

寝屋川市　坂上高栄

日めくりのやせゆく命削る日日
乱世の音が聞える虎落笛
中近東査察のマグマ鳴動す
聞き違いだった誤解で大笑い

大小の蜜柑の値段見比べて
同窓会ブランド品の展示めく
時雨道素通り出来ぬ古書の店
晩学の窓に見飽きぬ雲の四季

寝屋川市　堀江光子

握手した手からライバルまた一人
火の想いあしたにメイクする蕾
お正月お宮で鈴を振っただけ
よく会うなずいぶん暇な人らしい

寝屋川市　太田とし子

コマーシャルつい乗せられた無駄遣い
北風の誘いに挑む万歩計
留守番の犬が淋しい顔をする
小春日に惚けたらしい桜咲く

羽曳野市　安芸田泰子

お隣の前を半分掃いている
温度差が少しあります両隣
ロゼワイン少し乱れてみようかな
北風が吹くと闘志が湧いてくる

羽曳野市　徳山みつこ

木枯しが喪中のハガキ連れてくる
ウエストに嫌がられてる好きな服
優しさを込めて爛する寒い夜
敢闘賞　汗と涙のシャツ洗う

東大阪市　笠井欣子

顔見世に毎年嫁は和服買い
拉致しては招待所に住まわすとは
日光も長野の猿も女好き
病院も女性の患者は女医が看る

枚方市　鈴木政子

趣味多忙定年なんかこわくない
定年を無事に迎えて風邪をひき
退職を迎え書斎を整理する
退職は第二の人生花が咲く

枚方市　二宮山久

カラシ菜の咲くころ土堤に行けるだろ
お土産は残りの紅葉と鄙のもち
親と裂かれいま子と裂かれいる悲運
気のつかぬことの多かれ亡姑にわび

枚方市　森本節子

店じまい妻も子も去り借りもなし
貯めた奴いやな奴だが借りにゆく
ワンルーム借りて自由か不自由か
日向ぼこ寿命がちょっとのびたよう

枚方市　安達忠央

我が儘を聞いてくれそな恵比須顔
燃えている二人寒風苦にならず
会議室出ると無口がよく喋り
もう無理と鏡が嗤う養毛剤

藤井寺市　中島志洋

藤井寺市　鴨谷瑠美子

神さまのこころのままに湯気昇る
役に立ちたくて真横に座ります
気の抜けた炭酸水にすべもなく
だんだんと寒さに慣れてゆくからだ

藤井寺市　楠昭子

突き放す強い言葉に愛がある
七転び八起きしたけどまたこける
老いの日日落葉掃くのもボケ防止
淋しいがやっと自由という天下

守口市　井上桂作

折角のメールを送る人もなし
老人と呼ばれて返事せぬことに
地下鉄は出口多くて迷うもと
みんなよい顔して並ぶ塔まつり

八尾市　長谷川春蘭

事始めおきばりやすと妓へ扇
神殿の木の香床しき天澄みて
絵馬堂の絵馬の馬あせ暮れの秋
青柿の地を打つ音や今朝の庭

八尾市　宮西弥生

歩かねば答が出ない地獄道
赤を着て自分探しの旅に出る
雰囲気にあわせて馬鹿になれる知恵
フィーリング合いそう男とルミナリエ

大阪府　澤田和重

納得はせぬが賛成派にまわる
義理と人情はかりに掛けたのし袋
値引きまで少しうろうろしていよう
気持だけ貰いましたと欲がない

神戸市　木村貴代子

娘をさらう訪問客をおそれ待つ
これからをたずねて迷う一人旅
節約をすると政府が困りそう
笑っても泣いても一人笑わなきゃ

神戸市　山口美穂

日曜は天気予報も休む国（ニュージランドを旅して）
北風が暖かい南緯四十五度（　〃　）
大自然人を素直にしてくれる（ブカキ湖）
ダイヤより星の輝き降るように（　〃　）

相生市　中塚礎石

ブランコが揺れても風の子はいない
ライバルの差はゴールまでそのまんま
焼香の順になかなか出ぬ名前
太陽と生き真っ直ぐな畝を切る

芦屋市　黒田能子

急用に化粧くずれのままで会う
回覧板噂話も回される
仏前に庭の小菊が咲き揃う
借りたのを忘れ大事にしまわれる

今も昔も変らぬ鉄橋渡る音
空しさを連れて谺の返る音
野次馬は音の大きい方を向く
節増えて竹はさらなるしなやかさ

尼崎市　松下比ろ志

握力が落ちて寿司屋の茶が重い
図書館に寝息の漏れる昼下り
自治会が子供に残すお餅搗き
一礼で外す師走のカレンダー

尼崎市　軸丸勝巳

歌う気でいたか最後にマイク持ち
こぼれたる酒吸う父を見ていたり
寝間を出る冬装束をひとかかえ
鴉舞いあの世を思う雪の墓

尼崎市　山田耕治

勇気出せ生涯忘れぬ亡母の声
旅帰り我が家の灯安堵する
帰り道夕焼雲にせかされる
本心はいざと言うまで隠しとく

伊丹市　小熊江美

睡眠薬代わりに本の一頁
隠してる本音よそよそしい電話
いい事があって素直に出るお礼
雑魚なりに生きて気楽な日日があり

三田市　久保田千代

秋風の誘い素直に受けて旅
プレゼント両方にくるときめきよ
祝いの座機智ユーモアも馳走なり
誕生日祝い届かず一人酒

西宮市　刈田泰司

喜寿と古希ともかくも生き恙なし
フランスパンの固さへ笑い合っている
おまかせメニュージングルベルで入れ替る
みとめ印も新調をして春迎え

西宮市　亀岡哲子

登山帽長いつき合いありがとう
電話だとつい軽口が出てしまう
お褒めしてお手製煮豆三回目
冬の森はや萌えている命あり

西宮市　山本義子

さっぱりと脱ぎ捨て銀杏陽は西に
言訳は受話器にのせた風邪の声
白マスクとても美人に見えました
風化仏　国東の旅亡友も居た

西宮市　秋元てる

社務所の棚運命の籤出番待つ
ファイトと声を掛けてよ万歩計
それぞれの家でいろんな肉焼ける
ハート型あの弁当は遠い空

西宮市　坪井孝一

西宮市　菊池　トミヱ

万年筆兄の形見が淋しそう
キムチ漬赤い色して辛過ぎる
老人に鰻一疋多過ぎる
水仙の花咲く島を尋ね行く

西宮市　緒方　美津子

うらやまし白髪抜いてという若さ
一日中キャベツを刻むパートです
掃除機に追いやられての日向ぼこ
寒がりの母の柩にぽたん雪

西宮市　牧渕　富喜子

紅葉へ誰しも同じ詩人の目
ナツメロの一番くらい歌えそう
着古した背広脱皮の跡がある
肩並べ時々ずれる五感かな

兵庫県　大谷　幸次郎

食うだけの年金に無理させられぬ
痛み止めの薬ばかりをためている
抜け道は知らぬ同士の子で育つ
増やしてはならぬ体重ままならぬ

奈良市　天正　千梢

八十路坂羅針盤はまだたしか
あしたを楽しく寝る時は合掌し
定年の船より降りてから孤独
落し穴あんなに腕のある人が

奈良市　米田　恭昌

初夢はパッと開いただるまの目
鶴を折るリハビリの節くれた指
女性専用車逆差別ではないやろか
女人高野　室生寺に見る均等法

生駒市　飛永　ふりこ

コスチューム纏う女が蝶になる
横顔に昔の恋をダブらせる
幸せをつかみそこねる愚痴の数
フラフープ姉と競った里遠く

香芝市　大内　朝子

信念と頑固この頃間違える
御馳走を食べるつもりがオムライス
腹割って話せる友と見る夕日
ひと押しの欲しい逢瀬がもどかしい

大和郡山市　坊農　柳弘

初孫が立った這うたと大騒ぎ
流氷の叫び国後遠く聞く
掘炬燵酒は上手に妻と酌む
日めくりは第一章の雪だより

和歌山市　西山　幸

まるくならない円を描いては歳をとり
数え唄とぎれとぎれのここのつ十
性懲りもなく何を買う宝籤
毎日の出会いに碗と箸がある

和歌山市　福井桂香

木枯らしの置き忘れたか冬薔薇
喪のはがき枯葉舞い込むようにくる
達筆の誤字にときどき騙される
自画像の色はピンクからグレイ

和歌山市　青枝鉄治

代理来て去年と同じ祝辞読み
仏彫る手で生活の猪を撃つ
そら豆の茹だる頃には酔うている
あれこれとメニュー見た上素うどんに

和歌山市　松原寿子

介護の手に試練ばかりが追ってくる
嵌まってゆく予感コースを変えて見る
ときめきのパワーを溜めて突っ走る
乾杯へ希望を盛って出直そう

和歌山市　牛尾緑良

柿熟れて村は眠りに入らんとす
自叙伝を綴れば妻も子も覗く
年齢のせいにはしたくない涙
まだ魔女を抜け出せないでいる娘

和歌山市　武本碧

明日を読む力足りずにから回り
ちっぽけなプライド美しく包む
こまねいている間に雲は流れ行く
後ろ髪引かれて揺れる拉致家族

和歌山市　宮本三喜夫

合祀され雪の高野に眠る友
同人の承認証を拝受する
嬉しいよ誌友がやっと同人に
寒くなりケツネうどんがよい季節

和歌山市　松尾和香

二人三脚渡る浮き世に虹の橋
不器用な人生風を友に生き
柵を断った女の強かさ
断ち切れぬ思い明日へ信じよう

海南市　堂上泰子

万病は自ら生むと説く法話
誉められて寿司食いねえの心意気
ごろ寝しつつ金の算段する師走
いつでも夢を歌う同窓バスツアー

海南市　谷口義男

助成金だけを目当にした事業
長い物に巻かれる道を選ぶ人
決断が遅れて船は難破する
初日の出今年こそはの繰返し

平成15年本誌発送日

1月27日（月）・2月27日（木）・3月27日（木）
4月26日（土）・5月27日（火）・6月27日（金）
7月26日（土）・8月27日（水）・9月27日（土）
10月27日（月）・11月27日（木）・12月27日（土）

自選集

明けまして大惚け小惚け恙無し
われおもうゆえにわれあり年賀状
三ヶ日カウチポテトもキムチ風
裏切りやユダの銀貨に美の女神
森羅万象腐る早さに人もあり

橘　高　薫　風

天と地を結んで架かる虹の橋
宿敵の辞書に手垢がついている
北風に笑顔崩さぬ六地蔵
茜雲明日はきっと晴だろう
熨斗袋下心まで包み込む

木　村　あきら

車椅子青空信じ生きてゆく
遮断機が上がると青い空がある
白銀の世界へ挑む山男
悲しみが重なり女強くなる
色即是空　女生き甲斐紅を引く

工　藤　吟　笑

年を無事越せた私を自賛する
九十も中程に来た皺撫でる
ガヤガヤと列を作って出番待つ
船足がゆるんで見えた白い灯台
順番に曽孫机に何か書く

黒　川　紫　香

自分史へ噤んでおれぬバラの蔓
干拓中止　海が嬉しい顔をする
コンビニに介錯されて店閉じる
屋根修理せよと雫の音がする
年輪を刻んだ顔でクラス会

小　西　雄　々

国文祭終えた安堵の屠蘇うまい
正直に猪口一杯が顔へ出る
すし握る指にも修業積んである
合鍵を作りますとは物騒な
人生はこれからやっと喜寿の春

小　林　由多香

種袋振っていのちの音を恋う
ひたすらにいのちを刻んでいる版画
赤ワインほろりほろほろ喪が明ける
寄り道をして海の蒼さを確かめる
古本屋ばかりあさっている真冬

斉　藤　劦

靴下に力つめ込むクリスマス　田口虹汀

靴下が寺の廊下で泣いている
傘寿過ぎても子供と同じお正月
すすはいて硝子磨いて〆飾る
名刀は鞴に命賭けている　竹内紫錆

登山電車（フニクラ）を歌い明治の女学生（イタリー民謡）
老いて知る文語唱歌の末節を
当番宅　明治歌人の濃い煙
シルバーコーラス器用なわらべ芸を添え
縁起よい文字現れる詰め将棋（〇三、七七等が盤上に）　田中正坊

ニュージーランド人より羊多い国（羊の国紀行）
ラムのようみんな優しい人ばかり
清すぎてプランクトンも棲まぬ川
林間にひっそりと鳴くベルバード
エニシダの花　全山が黄に染まる　玉置重人

戦場を駈けた足とは知らぬ杖
定年の辞令尻尾はもう振らぬ
明日こそ明日こそとB面が叫ぶ
B級のグルメが丈に合うてます
待合室隣の咳が気にかかる

ど忘れもどうにか似合ってくる八十路　恒松町紅

草も木も手に負えなくて歳を知る
女見る目はまだ呆けてない八十路
挑発に弱い男の無精髭
詫び言葉あってはならぬことでした　遠山可住

三毛ちゃんの馬鹿野良猫に恋をして
七十で死んで若いと惜しまれる
松茸を一本もらう誕生日
暇人が京都の秋に満ち溢れ
肉じゃががいいと財布にささやかれ　土橋螢

道に雪コントの答出てこない
旅びとに盃を差す初春（はる）の宴
雪燦々冬から春の万華鏡
人肌が恋しくなった牡丹雪
端渓の硯を洗う筆始め　西田柳宏子

雑魚相手強い強いと褒められる
三度目はもう通らない出来心
お別れの合図読経でしめくくる
無一物無一文では絵も描けず
顔見ればせんどくさした口で褒め

言うことはちょっとおさえて早寝する
平凡という幸せをつい忘れ
また会える気がして街をゆっくりと
風邪ひくなことば短くして別れ
震源地はどこくしゃみがまたついた

西村早苗

買いにこぬ一票もちろん棄てはせぬ
投票所とうとう妻は来なくなり
ポスターを見て結局は白い票
十八へやろうじゃないか選挙権
お天気で票が動くという神話

仁部四郎

正論を徹す依怙地は頑固かも
信号は何回変わる日向ぼこ
道草の花一輪に癒される
下克上どう想うても赦せない
モチーフは日誌の裏に秘めてある

野村太茂津

木枯らしやたった二人の冬籠り
未完成の夢が寂しい北の町
街を出て氷雨の刑に遭いました
追憶に追われては泣く津軽三味
野良猫が一匹同居する二月

波多野五楽庵

未年笑顔のほしいボランティア
曽孫と暮したい夢未年
いのち大切ひとりでは生きられず
長寿しあわせ貧乏閑なしへ感謝
やさしい一言ほろりと笑顔の出る老い

藤井明朗

福寿草咲いてはじまる花暦
精一杯生きた命をあたためる
誇るもの無いが健康ありがたい
匿名のままで続いて来た善意
初釜の床に一輪紅椿

藤村〆女

八十の坂だじっくり四股を踏む
歳一つ貰う今年の武者ぶるい
ふるさとの匂いを消さぬ年賀状
肩の凝る話はしない羅漢寺
ボケぬようういろいろ予定組んでおく

舟木与根一

伝統の匠生きてる春慶塗（飛騨高山）
朝市が名物になる陣屋前（高山陣屋）
一〇〇〇年の凄い樹齢の大銀杏（国分寺）
ちょうちんに昔が香る団子文字
造酒屋の名残りとどめる酒ばやし

芳地狸村

一年でいちばんうまい新春の酒
正月や八十路の坂にさしかかり
あと十年生きられぬだろ寂しいね
好きな酒好きだけのんで八十路坂
円満な家庭待ってた孫生まれ

宮口笛生

幻想が崩れる暗い雨の部屋
思考する私の影も痩せてゆく
白い雪白い孤独が突っ走る
運命論嫌な言葉と突き当たる
カタカナが続く会話の味気なし

森下愛論

困ったなあー橋の向こうは見えぬ川
千匹のひつじを先ずは渡らせて
不必要な強気は傷になりやすい
癒す力欲しいと枕つぶやいた
弾き語りなど試みようか蕎麦枕

八木千代

ノーベル賞祝宴続くいい疲れ
情熱がもう消えました古い書架
手づくりの人形だった母子家庭
雑兵の顔も社の明日気にしてる
熱燗を手にここだけの事こぼれ

八十田洞庵

おっちょこちょいだけど嫌味のない男
仮面はずした顔を鏡に笑われる
世話好きの僕だが忘れるのも早い
他人の目気にして動き小さくなる
苦労性まだ来年の絵がかけぬ

阿萬萬的

デュエットがうま過ぎ仲を疑われ
杯でチビチビ飲んでる暇がない
洋傘没落百円ショップの棚に住み
福祉募金の筆頭にいたけちん坊
噛みつくように北のテレビが吠えている

石川侃流洞

欲望の真ん中辺にいる羊
さみしさよ羊生れで虎を飼う
赤ちゃんも羊も好きな紙の舟
銃口を向ければ羊プロポーズ
火を抱いた羊に逢える昼下がり

板尾岳人

春立つ日　運勢の本買っている
自画像の中心線がずれてくる
人の心つかめず今日も風の中
明日は明日　分からぬこともまた楽し
何も彼も許し明日という暦

奥田みつ子

生き延びたいのち東へ向いて立ち　(故)越智一水

竹林の雀初日へさわがしい

減反を先祖に詫びて詫び切れず

まるまると重ね着転げまいとする

投げキッス歳を忘れて踊り抜き　河井庸佑

義理ひとつ果たして肩の荷を下ろす

原点に戻って策を練り直す

長い橋途中でふっと気が変わる

ここ一番痛いところを突く寡黙

梅だよりまだかと祖母は落ち着かず　川島諷云児

反省の暇なし明日が速すぎて

空回りばかりしている自尊心

振り向けば後悔ばかり老いの坂

体調を崩し集中力を欠く

また一人輪からこぼれた影法師　河内天笑

目を奪うとてもきれいな歩き方

難問はたのしみながら解くことに

女房に夢で叩かれても痛い

大胆でかつ周到な手口だな

口いっぱい言うて自打球に当たり

寒中お見舞申し上げます

倉吉川柳会一同

事務局

〒689-2221

鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072－17

電話（0858）37－4735

酒抄

奥田　みつ子　選

京都市　清水　英旺

夢あまた食いそこなったバクの僕
紅葉を天蓋に座す野の仏
もみじ映え水琴窟は音が冴え
線香が立ち消える間の走馬灯
亡き母の本のページに葉の栞
剃り残した髭もてあそぶ所在なさ

唐津市　坂本　兵八郎

口ずさむ恋せよ乙女母卒寿
美容院までとニコニコ母卒寿
母卒寿計画表を埋めている
崩し字を問えば輝く母卒寿
母卒寿般若心経間違わず
煙幕のような笑顔の遠い耳

高知県　桑名　孝雄

嗚呼酒よ君と仲良いばっかりに
茶道にも負けぬ酒道という掟
本格派の飲み手だ酒が生きている
直会という酒盛りを神達と
酒だけが人生でない道も説く
酒聖にはなれずフツーの飲み助で

鳥取県　澤　裕子

人生の旅路シナリオなどは無い
不器用も時には武器にして生きる
終点を忘れていない千鳥足
欲の無い人にチャンスは転げこむ
やさしさに触れて涙腺ゆるみだす
いさり火と地酒が旅情かきたてる

綾部市　藤田　芳郎

ふと漏らす本音へ鍋が煮え詰まる
冬型やまたそれもよし煮転がし
人肌に酔うて覆水盆を言う
飲んでそろ呑まれて候祝い唄
見ン事に斬られて腹も立ってこぬ

来る年へやる気溢れるひつじ達
眠れない夜は枕と話し込む
手枕に安心をして児が眠る
受け継いだ技法でかすり織っている
生きている幸せくれる青い空

米子市　足立　由美子

長生きがしてほしかった寒い風
雪んぼを両手にうけて老いゆくか
黄泉のみち　師走を夫どのあたり
心経をゆっくりあげて灯のゆらぎ
一人では解けぬ宿題亡夫を恋う

篠山市　谷田　多美子

二つ影もう回想の中にだけ
男やもめ今更ながら知る内助
老いの坂メトロノームが喘いでる
ボロボロのプライドだけをもつ浪士
赤信号縦の流れが横になる

泉佐野市　稲葉　洋

永遠の愛誓う仮面がずれてくる
絵も詩も踊る志功の版画展
疑わぬ笑顔にボクは負けました
一からの出発怖いものがない
わがままになってお互い歳を知る

横浜市　川島　良子

老母がいて私の胸も灯がともる
人間の弱さ時々爪をかむ
正論をすんなり切った多数決
以心伝心恋の予感を抱いている
爽やかにプラス思考の車椅子

高知市　小川　てるみ

橋のない川も渡ってきたふたり
夢つめて詰めて破れていた袋
軍歌唄って出る涙何だろう
噛み砕くように酒呑む失意の日
戦友のこころになれば平和です

大阪市　尾崎　黄紅

恋文を焼く庭がない兎小屋
平成の絵文字でかわす相聞歌
異文化の風がちょっぴり吹く神戸
誕生日ちょっと高めの本を買う
田中さん賞に負けないお人柄

岡山市　大森　純子

どなた様にもお礼を言うて今日も暮れ
年寄の知ったか振りはみっともない
歳とればかわいく呆けてにこにこと
年寄の孫の自慢はほどほどに
年寄だって言わせて欲しい三分の理

武蔵野市　亀井　円女

履物がきちんと家の顔が見え
したたかに生きて悔いなどないと言う
人格に幅が備わる苦労人
おはようのその一言で雲が晴れ
久々に過疎へ花嫁くるニュース

松山市　山之内　八重美

絶景に赤いスカーフ足して描く
感情の発露を狙うカメラアイ
楽しさをいつも秘めてる涼しい目
一期一会一語一笑と読みかえる
エロスこそ愛と結合さす女神

今治市　渡　邊　伊津志

最初から妥協する気はない若さ
ありったけの嘘で口下手汗を拭く
答えから逆算中味見えてくる
年の瀬を走り続けている駄馬で
無駄口の多さを軽く見られそう

愛媛県　花　岡　順　子

脇役が家では大きな顔をする
横車押した世間を狭く住む
自分史の余白を埋める墨を擦る
底辺でもしもの話ばかりする
妥協せぬ煙草の灰がぽとり落つ

香川県　原　賢

遠く棲み声の便りが生きる糧
押す人も何時か押される車椅子
優しくて心底強い人が好き
一日のドラマ始まる朝の駅
強い母演じて裏はまだ見せぬ

香川県　伊　勢　八重子

早起きをすれば一日温い風
菊日和うれしい出合いくれました
春日和きらきらしてる老眼鏡
飴だけで躾にならぬ鞭もいる
心配をかけて来ました母の皺

松江市　山　根　邦　代

なあチロリお前も先が短いか
度忘れに笑顔の挨拶深々と
灯を消して冬の星座に風が鳴る
切符にも別れがあって終電車
一合の酒に命をたしかめる

島根県　福　間　博　利

いつも見る顔がまぶしい年明けて
走馬灯夢を追う娘は年女
寒がりの財布で外へ出たがらぬ
賛成も否定もせずに冬炬燵
タイミングはずしお名前聞きそびれ

島根県　武　島　ちよえ

鳥取市　大坪天涯

旅ひとり夢にまだまだ追いつける
ああ青春他人の目まで気にしない
温度差を感じはじめた二人きり
生きること考える日はいつも雨
ふる里を離れてからは嘘の旅

鳥取市　永原昌鼓

老骨へまだまだ当てる鞭を買う
皮算用だけはしてみる宝くじ
天国へ母の隣席予約する
雑魚なりに誇りも夢もあり達者
戦争も飢えも知らない子が拗ねる

鳥取市　山口千代子

母君を真似て手を振る愛子さま
寄添って陽を受け歩く老夫婦
曽孫が障子破って覗いてる
どんな陽が昇って来るか二〇〇三
独身者増えて出雲の神も暇

鳥取県　西垣美知子

ボランティア大きな愛の包装紙
節々が注意の音を出してくる
何時だって子等が集まる樹になろう
輝いておりたい今日もいい笑顔
豊作を招く青田に老いの汗

鳥取県　前坂なお美

気が合うかキャッチボールをしてみよう
名水が湧きでる故郷もっている
老いの坂まさかまさかの恋の花
生きること計画通りにはいかぬ
鳴き砂もたまに笑ってみたくなる

鳥取県　奥田保子

おかしさをじっとこらえるのも辛い
隠しても鏡はみんな知っている
子に期待しても所詮は蛙の子
やる事はやった後悔などはせぬ
大役を開き直りで切り抜けた

奈良市　乾春雄

グラスの底ゆっくり回すさぐり合い
ブランコが風だけ乗せて冬の朝
褒められて天狗になる子はにかむ子
やさしさが欲しくて迷う曲り角
真珠婚妻が背中で返事する

橿原市　安土理恵

託された祈り重たい千羽鶴
自己主張強い女で二重あご
自由の女神ときどき涙するそうな
妖精か魔女か息子に嫁がくる
もつ煮込み両手でいただくワンカップ

奈良県　江波正純

いいお湯だ今日一日の疲れ吐く
庭のバラ摘んで絵筆が描く詩
せせらぎでパレットに降る深い秋
マスコット自動しゃべり機ボクの妻
アルコール抜けた身体で天仰ぐ

神戸市　両川無限

愛してるなどと時々嘘をつく
時々は恥をさらして生きている
恥をかく度に器がでかくなる
不器用な指十本がたくましい
仮の世の罪は冥土で裁かれる

神戸市　山口光久

たてまえと本音が出合う交差点
幸せを築く二人の力こぶ
一回り大きくさせた他人の飯
満腹になると足もと見え難い
乱気流も妻は上手に飛んでいる

川西市　井本清山

初詣神様仏様梯子
元旦に望みいっぱい書く日記
ささやかに十日戎で熊手買う
鶏口も牛後もなれぬ只の老い
美学かな六十路男のボランティア

兵庫県　安達厚

待たされそうだから柳誌を持っていく
ひらがなのような人生送りたい
無位無冠立派に生きたつもりです
金婚式までは言うの欲ですか
まだしたいことがあるから呆けられぬ

和泉市　横山捷也

メモ通りゆかぬ料理にコツがある
目覚しが定年後でも鳴っている
核心をつかれ多弁がうなだれる
意地はって一人生きてるわけじゃない
メルヘンに誘う静かにボタン雪

泉佐野市　備後三代子

ねんねこで曽孫おんぶの子守唄
もうよりはまだまだだよと言い聞かす
忽然と田圃の化けた高いビル
叱りすぎ夜におでこへチュウをする
原発もダムも嫌だが冷暖房

柏原市　永浜加津子

踏み出した一歩来る年また一歩
一年のしわ寄せが来る年の暮れ
来る孫へ和洋折衷おせちする
小康の夫にやさしく日向ぼこ
わだかまり御破算にしてみそかそば

孫二人来て戦場となる我が家
この幸せ私の分に過ぎている
賑わいがこんな所に道の駅
サンパツでまずは今年のきりをつけ
気がかりを背中にのせて晦日そば

交野市　田岡九好

あらたなる夢抱く初春を祝いあい
三ヶ日妻の叱言もやわらかし
地に落ちる紅葉の音のあるかなし
暮れいそぐ紅葉あかりと瀬戸の海
下津井の海さむざむと師に会えず（故恵二朗先生旧宅を訪う）

堺市　藤井一二三

堺市　梶本哲平

十二月八日六十年も経ち
挫折積み重ね戦後をもがき抜く
自叙伝はわれにもあらずつい飾る
食べるだけあればとさりげなく富豪
一夜の贅顔見世を観て京泊まり

吹田市　木下敏子

胸に手を当てて一年振り返る
おはようと児童に元気貰う朝
薬より効き目があった万歩計
五十回忌亡父の歳はみんな越え
楽しみがいっぱい増えた友の数

停年を無事に迎えて祝う膳
息子から労をねぎらう蘭の花
ストレスのない生活がストレスに
結婚を決めた息子にエールする
我が庭もイルミネーション孫を待つ

枚方市　二宮紫鳳

自分への褒美ばらの絵十二月
発車ベル大事な言葉聞き漏らし（五日後訃報）
粟餅を頂き戦後思い出し
電話なく今日は詩人の顔でいる
寒行の足を噛んでる京の雪

藤井寺市　吉田喜代子

根をおろす決心させた温い土
言いすぎてあとで気がつく寒あやめ
鐘の音に仏心が目を覚ます
しんみりと単身泣かす子の手紙
隠された過去を知ってるルイヴィトン

八尾市　松葉君江

お正月生きたあかしの皺増える
消しゴムに惚けて来たかと笑われる
冬くれば冬が楽しい鍋料理
炎の女と知らずにふれて火傷する
薬より生きる野心に血が燃える

八尾市　與田明

割り切れぬこと一つあり茶が苦い
息切れの素振りは見せぬ父の貨車
ど忘れの記憶の糸が手繰れない
輪の中に一人浮いてる顔がある
友情の絆をつなぐ車間距離

京都府　前上英一

たまちゃんとノーベル賞で和まされ
お返事をしながら向かう電話口
非常べる触れるとみんな壊れそう
寄せ書きのエールにファイト湧いてくる
精進を重ね追い風待っている

横浜市　芦田鈴美

里山の焚火を囲むにぎり飯
鍋に火が入り車座語り出す
餅つきに集い今年をしめくくる
隠しても隠し切れない妻の勘
聞き上手皆をマイクで喋らせる

川崎市　浦野昭志

拉致された人にも届け除夜の鐘
悲しみが露を結んだ北の窓
初雪が紅葉に化粧する師走
ふくよかに和服姿が似合い出し
窓毎に安らぎ配る月明り

東京都　井上つよし

心電図心の波もうつりそう
失った時間がおしいカレンダー
散ることも自由にならぬ水中花
セピア色の写真が過去を美化させる
ぬけがらをつくろい直して歩き出す

野田市　那賀島雅子

故郷の山河はなにもかも許す
負け犬の疵を労る道祖神
電飾の一過よ虚飾すぎないか
嗚呼平和グルメよおごりすぎないか
大空に今年こそはと描く大書

日立市　加藤権悟

よう肥えた羊ハガキに乗ってくる
絵に添えて佳句ありシャレた迷句あり
馬齢九十二どえらいこっちゃと思うてます
ヘマすればすぐに呆けたとけなされる
野党連自民をなじる暇もない

秋田県　湊修水

ビフテキは厚く人情薄くなる
椅子取りのゲームに弱いかたつむり
運命を変えた短気を悔いている
一歩ずつ譲ると平和きっと来る
胃カメラに照れ笑いする肚の虫

札幌市　三浦強一

尼崎市　河津正治

天下国家大志抱いたまま老いる
貧困と豊かさを抱き病む地球
落丁の悔い抱いたまま古稀を食む
親友の素顔に何時もほだされる

東京都　やまぐち珠美

遠く投げた過去を啣えて帰る犬
わくら葉へ攻めず落とした風の問い
無になれぬ旅情を見抜く鹿おどし
軽やかに羽が生えてる子供靴

東大阪市　田中美弥子

やせ蛙流れのままに流されて
笑い転げてごまかしている軽い脳
定退の時計合わせるのに困る
母として亡母から学ぶことばかり

吹田市　須磨活恵

老いたかな夫婦互いにまるくなり
前向きに今日の茶柱信じよう
日だまりに笑い袋を干して春
我を捨てて無になることの難かしさ

大阪狭山市　羽田野洋介

松並木歴史の中へ一歩ずつ（法隆寺にて　2句）
古寺静か太子の影もすぐそこに
携帯へ独りで笑う夜の道
こちらから心開けばすぐ和む

今治市　塩路よしみ

郷愁よ風のぬくさに抱かれたし
うるおいの心が欲しい本を積む
試行錯誤平常心を忘れかけ
真実は一つ心をこめて切手貼る

松江市　松浦登志子

ありがとう何度も言って丸くなる
柚子風呂をひとり占めして十二月
親のある重さ応える歳になり
辞書をひく待合室の受験生

和泉市　千葉武

道楽を知らぬ父の背さびしそう
輝いた瞳がいつも僕を見る
窓叩く貧乏神は男だな
傷心へ妻優しくも鋭い目

南国市　小原圭二

先生にクンと呼ばれるクラス会
捕物帖一冊終える雨の午後
黄昏れて人が恋しくなる師走
お供えにお寺がくれた領収書

横浜市　平達也

空しさは小春日和に何もせず
もう少しゆっくり歩けと自己暗示
ストレスがどっと出てくる十二月
良く生きた妻に感謝の初日の出

アルゼンチン　松井美稚子

着膨れて苦労を脱ぎたいアルゼンチン
御贔屓の二国の神へ夜五分
時々の優雅なる嘘これも友
朝の御茶しぶさに日課急ぎ出す

唐津市　岩崎實

めしどきになればお膳に坐ってる
剃れ剃れと折角伸びた髭にいう
先へ先こなし余裕を少しもち
向い風足をきたえる良きチャンス

北九州市　岡田幸生

雰囲気の好きな酒席のウーロン茶
聞えない振りも一つの意思表示
主婦業に音沙汰のない五日制
沈む日を背にセールスにあるノルマ

高知市　伊野部和江

パソコンに触れると子等に近くなり
歌う軍歌急に血潮が湧く世代
高速道債務が止めるゴーサイン
来る年も楽しみにする良い出合い

高知県　百田幸

二階からハイハイハイと降りてくる
良い話こっそり裏を覗きこみ
曽孫がばあちゃん好きと御世辞言う
直線にもの言う友を信じよう

高知県　貞岡佐紀子

握手して別れる母の手のぬくみ
歳のせいとドクター軽く言うけれど
かりんジャム夕焼け色に出来上がり
太陽と渋柿の恋甘くなる

高知県　近森功

へそくりのかくれ家さがす妻の留守
孫のようなナースに甘え駄々をこね
木枯しへ歩調を合わす妻の爛
やせた脛曽孫にまでもかじらせる

今治市　野村清美

ひたすらに流れる川はうつくしい
親切を拒んで悔いる老いの坂
折り紙へ指から惚けを追い払う
茶柱へ弾んだ靴を履いて出る

愛媛県　黒田茂代

窓を打つ秋風あなたかと思い
乾杯のグラスに媚薬入れてある
酔止めをしっかり飲んで旅に出る
濡れないで済んだ善意の傘返す

愛媛県　安野案山子

激論を抜け出た空に冬の月
懺悔聞く月に笑われそうな罪
しょうがない人ねと妻が叱らない
霜焼けの妻に代って皿洗う

愛媛県　宮本末子

見て聞いて学ぶ未の年女
竹林のそば透明な風に逢う
砂糖塩だけは期限が書いてない
有りのまま化粧のすべも知らず老い

宇部市　高山清子

かけがえが無くて空気のような夫
健康で余生計画練りなおす
接続詞ひとつで風の向き変り
失言と言いつつ本音見えかくれ

府中市　馬場利子

面飾る部屋のひとつを春にする
青い鳥さがす翼があるといい
枯野から種の乾きを嘆く風
もえ上る火種が欲しい六十路坂

岡山市　藤原一平

煩悩の狭間で聞いた鬼の鈴
この道はいつか来た道忘られぬ
杖なしで歩く姿を夢に見る
退院が近づきナース困らせる

倉敷市　撰喜子

同い年の有名人の訃報欄
クリスマスソングがあおる客の足
マイホームパパがサンタのクリスマス
言い訳をしない人生詩と生きる

松江市　松本知恵子

ふるさとは優し枯野の冬いちご
遠来の客椰子の実もタマちゃんも
積んでいた本を読みだす外は雪
南国の空を詰めたい旅鞄

島根県　菅田かつ子

会えぬままいつしか賀状だけとなり
絵になっているとうれしい事を言う
寄り添って傘の雫が嬉しそう
美しいままでぽとりと落椿

鳥取市　森美智代

まっ白い羊になって年新た
良く笑う友の電話が長くなる
図書館も風邪のウイルス好きらしい
涙腺を切って明日の夢を見る

鳥取市　谷岡清子

大根の菜にほほえむ風邪もにげ
手作りの菊匂いたつ部屋中に
老いるほど生きる命に感謝する
無理をせず日々一日の時を織る

倉吉市　青砥菊枝

雨の日もわたしを急かす万歩計
赤ちゃんが笑って夫婦仲直り
ほろ酔いで歌うは愛の讃歌なり
寝付けない胸に子の事母の事

痛そうで痛くないのが他人の怪我
何もかも自分で背負い肩が凝る
デコレーションしても齢は隠せない
あの世ならはっきり好きと言えそうだ

倉吉市　酒井芙美子

内緒よと声を落として念を押す
子供部屋寄せては返す笑い声
イロハから学んでそして母となる
じいちゃんも孫には弱いサンタさん

米子市　猪森スミヱ

跳ねすぎて少し辛口ほしくなる
辛口の妻がご意見番をする
癪の虫鎮め一人で組む座禅
借りばかり溜めて人生折り返す

鳥取県　福西茶子

さあやるぞ門に背中を叩かれる
残り火を燃やし寒さを静めてる
柵が解けると不思議風邪をひく
ウンウンといつも変らぬ夫婦愛

鳥取県　平尾菜美

旅に出る薬財布を確かめて
正直に生きても運が向いてこず
来年の飛躍のバネに油さす
除夜の鐘聞く幸せな年が暮れ

鳥取県　山岡久枝

貯めようとしてもどこかで底がぬけ
限りない家事へ少しは手抜きする
うれしさへ涙の雫こぼすまい
二次会へいつもの顔がすぐ揃う

鳥取県　橋谷静江

三代を生きて老母は童女です
不器用な父の背中は嘘つかぬ
子の顔におやおや判が押してある
何もかも晒し合わぬも思いやり

鳥取県　平木公子

急ぐまい追い越されてもいい年齢だ
ふところが寒くともよい子は元気
竹箒日差し集めて落ち葉焚く
句碑指して爺の墓かと孫は問う

鳥取県　鈴木一弘

冥土への切符は医者に預けてる
冥土への土産孝行まだ足りぬ
幸福を孕み新妻レモン噛む
生きがいへ趣味の講座をハシゴする

鳥取県　細田裕子

ゆっくりとさせて貰えぬ潮の花
ひらめきが邪魔して呑気にはなれぬ
木枯しに舞う言の葉がぎこちない
風のなか葉っぱの旅に似るくらし

鳥取県　竹森富久江

ふるさとの味を荷にして子に送る
過疎の村ネオンないけど星光る
おでん鍋けんかのわけも忘れさせ
不意な客おでん囲みて座が弾む

鳥取県　大下智子

襟立てて足早に行く年の暮れ
喜びを分けて下さい春の海
会釈してマスクの人と目で笑う
茶柱にふくみ笑いの妻の顔

和歌山市　北村光男

口ほどに老眼鏡は物言えず
シャルウイダンス背筋伸ばして薔薇が咲く
金利頼れず粗衣粗食して戦後なみ
身辺整理行きつ戻りつ鈍行車

和歌山市　今一歩

ひと声の重み背を押す肩を突く
古傷に触れられそうで中座する
丁重な言葉で徐々に距離を置き
隙も見せ油断もあるが攻め切れぬ

和歌山市　喜田准一

継続は力ゆっくり腰据えて
ゲーム中孫は返事もしてくれぬ
人生はゲーム明日の運はどうころぶ
理想には遠いくらしのゴミ袋

和歌山県　森下順子

イチョウの葉一枚だけの青い空
食欲があるので欝でなさそうだ
スタートが楽しい目標までの距離
要る時になければ困るゴムバンド

和歌山県　辻内次根

主治医から考え込むなと諭される
幸せは隣の家で止まってる
身の程を知れば賢者でいたものを
老い二人水炊き囲む外は雪

和歌山県　村中悦男

小遣いの追加へチェック厳しすぎ
跡継ぎが絶える過去帳との対話
願い事多くて神もひと思案
青春の想い出詰まる姫鏡

和歌山県　中村君枝

傷あとはそっとしておく思い出に
軽はずみ吐いた言葉の傷重い
背くらべの柱の傷がなつかしい
温泉の湯けむり楽し夫婦旅

生駒市　小西稔

寒くなり家族の距離が近くなる
似てほしくないところだけ子らの似て
同窓会流れる日々にアクセント
アルバムにむかしのわたし教えられ

神戸市　田中章子

神戸市　伊勢田　毅

コメントが欲しいパソコン年賀状
酒かりて妻に言いたい時もある
傷口をみんな晒すと怖くない
花粉症一足先に春を呼ぶ

尼崎市　林　昭三

遠まわし孫と一緒に叱られる
喘息の発作も父の形見とか
出来不出来我が農園に孫二人
故郷からの新米届くまだ次男

尼崎市　桑原東園

歳末の客呼ぶ声に不況風
追伸に吾が家の菊も見頃です
すべり台鴉が一羽連れを待つ
まねぶとも読むこと学び辞書閉じる

三田市　石原歳子

嫁持たぬ息子案じる古希の母
ゴミの日に見張りの烏仲間呼ぶ
続編を買って安心積んで置く
口が過ぎその一言がいのち取り

兵庫県　黒崎美紗子

墓まいりすんでくつろぐ茸めし
似た顔を石仏のなか探し当て
旅準備出番まだかと空カバン
御歳暮の贈る心も届きます

大阪市　中村忠敬

この地球銃声やむのいつだろう
同窓会お国訛りがとびちがう
気に食わぬ食べ物ばかり医者すすめ
ナツメロのかかる茶房で落ち着ける

大阪市　伴　洋子

深層心理女は怖いものと知る
不協和音意識ないのが恐ろしい
医者嫌い薬嫌いが仇となり
皺ひとつひとつに刻み込む苦労

大阪市　岩崎公誠

あわてると真実見る目誤差を出す
ロボットに負けて悲しい町工場
丸餅がふくれるように妻の愚痴
総理だけ改革の旗振る喜劇

大阪市　池上清治

子や孫と囲む幸せおでん鍋
外人も目を凝らし見る菊花展
運動会秋風切って孫走る
秋の風ノーベル賞を二個運び

大阪市　三浦千津子

母思うこころ高まる夜寒かな
迷わずに明日の種を蒔きに行く
晩学に生きる励みを戴いて
生き延びた命へ一喜一憂し（心臓手術後6年経る）

癌癒えて医者から貰う太鼓判
パッチワークいよいよ冴えて妻は古希
生活に温もりくれる趣味の友
人生の節節にいた良き仲間

河内長野市　木太久　正一

里帰り後は疲労と空財布
余生ではないぞ子がいる孫がいる
新所帯百円ショップ梯子する
他ならぬあなたと言えど金は別

河内長野市　大西文次

軍手と言う言葉疑念も無く使う
きれいきれいと自惚れ鏡けしかける
良妻のつもり無理矢理耳そうじ
自適かな遅寝早起き大昼寝

河内長野市　石堂潤子

旅行するつもりで入院して来ます
手術してホテルのような一人部屋
雲だけを眺めて今日もベッド上
友情が砕けて拾うすべもなく

河内長野市　印籐智子

歩で生きた男第二のあるこう会
顔見知り名前記憶の外にある
ど忘れで大抵のこと済ます歳
今あって明日が見えない歳となる

岸和田市　亀井皎月

夕御飯呼ぶ母さんは今はなし
不祥事で頭の下げ方うまくなり
川柳をやってみないかブッシュさん
とんぼりでみんなタコ焼おいしそう

岸和田市　坂口英雄

熱さでは晶子に負けぬ子は嫁ぐ
母医者の鍋焼きうどん風邪治す
肩肘を張らずに生きるうどん好き
祭日は家族でつつく鍋料理

堺市　河盛龍三

譲られた席へ素直に老いの腰
夕焼けを土産に貰う散歩道
幻の女へさすらう去年の街
妻痩せて愛しさ募る二人風呂

吹田市　木村無禄

冬空が老母の思い募らせる
言い訳の嘘をにこにこ聞いてやり
満月を親子で掬う露天風呂
我が心の勲章褒める定退日

富田林市　稲川恵勇

誤解とくつもりの酒で誤解され
大事にと重ね着しすぎ風邪を引き
ほめるより御託の多い老いのエゴ
自分史に残しておきたい自己主張

寝屋川市　岡本勲

この町に寺があったか除夜の鐘　羽曳野市　吉村久仁雄

酒を手に書を読むときの僕が僕
この町の飛び地に訊いた歴史秘話
旅にでて夫婦げんかのネタがない　羽曳野市　永田章司

満天の星と会話の露天風呂
ペーパーレス何か不安な中高年
片思い青春の傷今甘く
歓楽街昼と夜とで違う顔　羽曳野市　森下一知

突っ込まぬ賢い首が隅に居る
恩返し形に出来ぬまま過ぎる
二代目の腰の高さが気にかかる
駆け足の旅に欲張るスケジュール　枚方市　小川良吉

老いの道一期一会の時流れ
後悔も時が癒して懐かしい
後悔の一つ一つに育てられ
老優と共に呼吸のシネマ館　枚方市　荘司弘之

北風が心地良い時つらい時
元旦は皆平等のカレンダー
表には見えない妻の思い遣り
借りた恩汗して返すボランティア

忙中閑妻が見に来る長い風呂
身の小ささ知れば星空無上の美
手詰まりの身へ素直にと夜の月
指先が情で温もり受話器置く　枚方市　大昇隆広

老いてまだ現場で赤く咲いている
ITにめらめら燃える好奇心
手の皺に語りかけてる年の暮れ
しみじみと振り返りつつ除夜の鐘　藤井寺市　伊藤アヤ子

よく歩くそのあとすぐによく食べる
生れつき陽気なたちでよく笑う
生きてますよく飲みました恋もした
てのひらに乗る幸せでガマンする　藤井寺市　西村栄一

銀世界都会の朝は動かない
消えかける絆に灯すルミナリエ
不況風効かぬ注射を打ちつづけ
店を継ぐ親は安心子は不安　箕面市　寺井柳童

シャボン玉明日へ弾けて飛んでいく
感知器の薄薄気付く夫婦仲
献血へ少しお役に立てました
老いらくのときめき煽る薬用酒　箕面市　北川ヤギエ

八尾市　寺川　肇

隅に居て我が家の歩み知るバケツ
土の香を花と一緒に嗅ぐ休暇
農機具の把手に亡父の思い見る
そこそこに妥協が支え共白髪

八尾市　平川幸枝

古タオル風邪の孫にはマスコット
行く秋の古稀の祝いを生きました
忘れ草記憶は逃げる夢ばかり
車内化粧デフォルメされていく視線

八尾市　中島春江

ブランドの財布の中を風がふく
おおさむ小寒おふくろの味居酒屋に
喜寿になり知恵の袋もほころびて
ドッコイショ九官鳥に先こされ

八尾市　田中トシエ

一人ごと言って夜なべの糸通す
ばあちゃんはお金持ちだと孫信じ
諭吉さんすぐ飛んで行く十二月
辞めてから若くなる人老ける人

大阪府　野田栄呼

小春日にタンポポも咲く万歩計
母よりも仏のような姑想う
晴の日も曇りも生きている証
辛くてもきっと良い日も待っている

大阪府　畑中節子

絵手紙の温みが老いのキューピッド
昼しずか我に読書の秋時雨
流行語使って老いも若返り
古稀も過ぎ悠々墨汁と遊ぶ日々

京都市　三宅満子

忘年会帰って茶漬ああうまい
人生の天気予報は当らない
ジャンボな夢買うやり繰りをする師走
どの部屋も灯りを点し独り居る

草津市　久保和友

国鉄OB会で水客さんの話など
贅沢だった路郎水府が来た句会
路郎師と一緒に飲んだのはアベノ
紫香さんのハワイ旅行は知っている

静岡市　中西雅

眼薬の心に浸みる友の愛
味のある話上手にのめりこむ
京の舞腰のすわりに歳がない
久しぶりニックネームが夢を呼ぶ

富山市　松見たえ

急ぐ日にかぎり道混む待ち合せ
ゆずれない親子喧嘩に意地を張り
人の手を借りず立派に咲いた花
女ひとりゆったり生きてふと寂し

いつの日か手をつなぎたい敵がいる　横浜市　近藤道子

生きている泣いて笑ってうそもつく
ラッピング寒い心を包みます
赤い月変な予感に身構える　横浜市　巌田かず枝

査察など無しで銀婚迎えてる
へそくりも不況の風におとなしい
定年後自分の世話が上手くなり
親知らず抜いて静かな妻と居る　横浜市　長島亜希子

番組が今日の予定を決めさせる
掃かないでしばらく眺めたい落葉
モニュメント鳩に占領されている
退職で賞与のニュース遠く聞く　横浜市　金森徳三

一陣のウイルス力奪ってく（流感始末記　4句）
血液も脳もがたがた揺れ動く
点滴のリズムに腸がのり始め
まだはるか先のようです飲めるのは　横浜市　布山嘉信

逆さ富士つるべ落しが惜しまれる
小春日に縁の居眠り故郷の夢
紅葉山対話がはずむ露天風呂
シュプールに誓いも新たハネムーン　横浜市　秋元和可

いい出会い期待して買う日記帳
儚さと無念を秘めて喪の葉書
好きな事している刻の静けさよ
いい言葉栞の裏に書き写す　藤沢市　妹尾安子

立つ人に用をあびせるコタツ族
布団から耳だけで追う救急車
ダイエットしたままもどらない利率
口実をつけては孫に会いに行く　東京都　清原悦子

人はみな優しい仲で傷つける
梅の香に誘われ旅の途中下車
無我夢中きらりと光る目が綺麗
出来る時やっておきたい多彩趣味　日高市　根岸方子

来る年は友が何人できるかな
私にも自我があります年の暮れ
ノーと言い友との距離を確かめる
亡母恋し心温める故郷野菜　青森県　福士トキ

風だけがわたしを信じて寄って来る
振りかかる我が身を思う級友の訃報
肥える秋食べても肥えぬ老馬あり
泣くも笑うも後ひと月のカレンダー

来年は紅い糸待つ孫娘
ミニダルマテレビの上で何おもう
晩秋は静かすぎます人恋し

尼崎市　古川正子

今年の無事感謝しながら窓を拭く
身の丈のホコホコ顔で生きている
一言が株価動かす時の人

鳥取県　吉田弘子

ライバルがあるから伸びる趣味の会
愛用の帽子十歳若くする
ジャンボ籤欲と夢追う人の列

和歌山市　橋爪佐一

不器用でいつも泡ふく松葉蟹
人生の旅路笑顔はたやさない
ちらほらと雪も不況の顔で降る

鳥取県　蔵本悦子

師の影を踏むほど技を認められ
自分史に咲かせた花を記しおく
平凡な暮らしが出来て良しとする

鳥取県　岡村孝明

地球上に旬という字が消えそうだ
ハヒフヘホ笑い方にもくせがある
しゃべるなと言われ重荷になってくる

鳥取県　山下節子

輝やいた日には日記の饒舌で
レントゲン恋の傷跡写らない
冗談の中の一語が光ってる

岡山県　国米きくゑ

立冬の光に映える銀杏の葉
また一つ歳を重ねるお正月
雪が舞う猫の手ほしい年の暮れ

出雲市　荒木英子

DNAもっと良い面あったはず
星一ツないが旅籠の意地光る
定年後会社の噂よくつかめ

八尾市　笹倉ひろし

石ばかり気にする足が縛れてた
句会後の茶店はみんな評論家
嫁と娘へ同じようにはいかぬ愛

堺市　荻野像山

子に着せるセーターを編む寒い夜
大根のうまみ引出す塩加減
大根の雑炊食べた昭和の日

出雲市　川島和歌子

地中には春を信じた活気あり
老いてこそ二人三脚旅をする
子と孫が幸せ積んでやって来た

鳥取市　横田春名

宜野湾市　杉谷一栄

真似しても出来ぬひねり手お国柄
夢さめてわが家に寝てること嬉し
羊かんに待ったをかける血糖値

香川県　松村輝夫

寿を担いだ餅で厄払う
福を呼ぶ姿勢が福になり澄ます
十指みな使ってボケぬ草を引く

香川県　向山治延

雪化粧湖水に映し富士の山
やす請合いしたのが怖い保証人
佐渡のトキおけさを聞いて育ってる

府中市　岩本雅代

手作りの亡母の甘酒欲しくなる
物忘れ思わぬところに財布あり
雨上り笑顔鼻唄出る干し場

出雲市　加藤スズコ

歳重ね知った大根真の味
囲む鍋絆深める笑い声
変る世も歌いつがれる童歌

出雲市　栂ミツヱ

朝の雨子供の傘で花が咲く
散歩道指折り数え五七五
姑の座孫と遊んで世代替え

安来市　原煩悩児

未だ生きる生きねばならぬ夢芝居
生かされて医者を梯子の余命表
百万の満期にタクシー代がない

島根県　持田多輝子

もう一人の私と語る泣きぼくろ
気がねなく大の字に寝る里の家
残り福予想して買う宝くじ

島根県　毛利幸

一杯の酒が命を通わせる
我ながら此の地が好きで離れない
霜柱踏んで明日を確かめる

鳥取市　岡田信恵

レントゲン胸の痛みは写らない
孫の声重い腰などわすれさる
目標はまだまだゴールあきらめず

鳥取市　河田のり代

不況でも狸ばやしの年の暮れ
自立する子へ控え目の苦言する
グッドバイ言ってまた聞く友の愚痴

鳥取市　近藤秋星

わが前にテレビで見てる雅子さま（奉迎）
痴ほうにもならずに屠蘇の膳につき
紅葉狩り君住む村を見て通り

幼子の握手ミルクの匂いして
心にも時雨降る夜は早寝する
脳細胞喝を入れたい十二月

倉吉市　前田　喜美子

赤ちゃんの笑顔こころを軽くする
嫌になるほどのお金がたまらない
人間味あふれる人の輪にいよう

倉吉市　森川　あらた

宮さまの急逝一人涙する
愛子さま手を振る様が身について
食卓が味気無い朝妻無口

米子市　小塩　智加恵

負けそうになると曾孫助太刀を
嫁えらび外見だけで決めないで
義理同士立派に介護しています

米子市　池尾　保子

ギックリ腰しばし時間を止めてみる
倒産の激震田舎まで襲う
冬空を見上げ山陰だと思う

鳥取県　竹信　照彦

不器用な仕上り褒める人がいる
不器用なくせに何でも手造りし
不器用で林檎の皮むき苦手です

鳥取県　池澤　大鯰

不況風七福神が風邪ひいた
仏さま見ているだけのお供えだ
月末は妻の目を見て酒を飲む

鳥取県　松川　行男

母の味越せず味噌屋でみそを買う
古希にして胸ときめいたクラス会
愚かさを振返るまい峠越す

和歌山市　土屋　起世子

産声を聞いた途端に血が騒ぐ
のんびりと個性を伸ばせ保育園
還暦だでっかい夢を持ちたいな

和歌山市　根田　美子

自動ドア開けゴマとは言ってみる
こげ飯のおむすび恋しかまど飯
戦争展見れば悪夢が蘇る

和歌山市　前岡　健三郎

温泉の効能よりも山に惚れ
老夫婦湯当り忘れ湯の梯子
傷口へ塩も擦り込む週刊誌

奈良市　田中　賢治

この笑顔こころの花が咲いたよう
横で咳大事なところ聞きのがす
食べるより話が弾むクラス会

神戸市　木村　忠義

形見分け姉のセーター日々一緒　三田市　辻　開子
菊作り誇れる花を根気よく
青い空亡姉と話し元気くれ

大河ドラマ各地へ名所掘り興す　姫路市　服部一典
早起きへ妻の代りをする時計
世の中鮮明術後白内障

お年玉老いのふところ開かせる　兵庫県　岩本美緒子
地味かいな赤い帽子がウインクす
午の年春夏秋冬走り抜け

会社では出来ぬ反論する飲み屋　大阪市　寺井弘子
ゆとり教育親はゆとりを奪われる
白寿まで生きる積りのウォーキング

母帰る指折り数え待っている　大阪市　大向ナツ子
散りながら我を磨いてなお生きる
ポンと突く父の背中は軽かった

空気にまで金をかけます清浄器　大阪市　平井露芳
大金をつんでも松井振り向かず
親鸞の側でゆっくり眠る母

伝統と構えもみせず糸を繰る　池田市　多田契子
人人人孤独の顔も駅は見せ
遠回りポプラの並ぶ道が好き

愛国心教えるようなものでない　和泉市　小坂凡英
年頭訓辞十年前と変らない
頭では減りゆく余命分ってる

手足ふるえても口だけ達者なり　泉佐野市　大工静子
九十歳いつも押し車押して歩行する
電話来る百々枝と言う可愛い子

寒さ散る熱い論義で外に出る　門真市　矢阪英雄
爪をたて大地をたたき酒呷る
酒呷り大地の熱を我が熱に

背中流し母の老化を感じた日　岸和田市　土橋房枝
あなた逝き私無口になりました
春を待つただそれだけで幸せに

待ち惚け夕暮れ迫るカフェテラス　岸和田市　雪本珠子
学ぶより趣味で楽しむ英会話
愚痴るまい愚痴れば皺が増えそうな

年を経て友はそれぞれ角がとれ
聞く役はあなた私しゃべり役
止まらない笑顔ほしくて宝くじ
岸和田市　堤　楢代

ボーナスと縁が切れても越えた年
国の付け返す戦士となる二十歳
母の背を流して今日も癒される
堺市　柿花和夫

干し大根煮て古里を近くする
過去形の苦労話はよく笑う
人生の味をつめ込み古希の坂
吹田市　二宮栄子

主婦の味まだまだいける歳の功
声改めて歌う大きな古時計
ポケットに旅のふれあい詰めて秋
高槻市　執行稲子

借りた傘雨に会わねば邪魔なもの
冬のバス日向側から席埋まり
木枯らしへガラス戸閉めて日向ぼこ
高槻市　大崎侑子

伯耆富士くっきり浮ぶ同期会
うらはらに老母叱った我憎む
足広げパン携帯は情けない
高槻市　安田忠子

かすみ食う長生きよりも今日の河豚
さりげなく寡黙装う医者の風邪
終着へ自分でレール敷いて行く
高槻市　田中初恵（千枝子改め）

プレゼントされたネクタイ締め忘れ
初夢はノーベル賞にむせぶ妻
丁寧に二枚もくれた年賀状
豊中市　藤井則彦

夏名残り軒に忘れた南部鉄
ポイズンと変換毒も粋な味
枕抱き泣いた夜もある女子です
寝屋川市　中川恵香

一山がミカン色して笑っている
フラダンス趣味の踊りで元気が出
こたつ入り気持ゆったりミカン食べ
羽曳野市　濱口フジ

二ん月の雪の下には春の芽が
キャンプインメイクドラマの夢がある
老いらくの恋にもあったバレンタイン
羽曳野市　福田悦子

残り火に恋のかけらを一つ抱く
無視という罰は鞭よりまだ怖い
それからは言わぬが勝ちと決めている
東大阪市　今岡貞人

風化してどの思い出もなつかしい
自分史に愛の告白入れておく
風向きを変えて焦点ぼかしとく

藤井寺市　若松雅枝

片耳が他所のいざこざ聞きたがる
明日笑うための試練と言い聞かす
投げ出した五年日記の再始動

藤井寺市　俣野登志子

失って大事な人と身にしみる
クラス会親の姿を背に映し
老母の愚痴姉は聞き役次女叱る

藤井寺市　増井ヨシ枝

夏やせと答えて姑を傷つけず
散る花に老いゆく母と重ね見る
太陽も手伝いしてる雪下ろし

藤井寺市　喜島芳江

朝刊を大きく拡げマンガ読む
ズボン脱ぐ足のもつれる六十五
孫の手を添えて楽しいミカン狩り

八尾市　西川義明

老いの知恵まいておきたい種をもち
ボランティアしているつもりがされている
晩学に小さな明かり一つずつ

大阪府　小栢こずえ

思いやる心の深さ学びたし
川柳や心のゆとり老いの坂
しきりなおし出来る仕合せお正月

大阪府　大屋敷婦美子

大阪弁どぎついけれど根は優し
グルメ旅体重計の針走る
長電話愚痴がポロリとこぼれ落ち

大阪府　森元ふみよ

生涯を農業だけに終る妻
吹雪く日も温もりくれる孫二人
水仙に強くなれよと励まされ

大阪府　藤井郁代

段々に夢を広げて買うジャンボ
次々と重ねる嘘の舌しびれ
ヘソクリの隠し所を忘れ果て

大阪府　桑田ゆきの

老人会頑固な靴が横ならび
拉致偽装せめてタマちゃん癒されて
娘に告げる愚痴を愛犬じっと聴く

大阪府　高木道子

親に愛もらった分を子や孫に
平成になってもう早や十五年
鏡餅孫つくキネの音はずみ

大阪府　東文江

短日をもてあましてる休肝日　三重県　南　忠道

まじめさを買われリストラ免がれる
年の暮れ孤独のそばに猫がおり　新潟県　高野不二

出し入れもしない金庫が光ってる
空きびんがほしくてせっせと呑むお酒
必着と消印の差をなまけてる　横浜市　石原留三郎

好不況一汁一菜変わらない
手鏡に人の心が映せたら
争った妻の行先晴願う　横浜市　山梨雅子

バーゲンの日にお目当ての服が売れ
お使いを作り夫を散歩させ
多かった我が家のニュース書き並べ　町田市　土田今日子

片思い打ち明けぬまま閉ざす冬
糸先を舐めても針先が見えぬ
この財布居心地悪い札ばかり　摂津市　望月遊美

元号国ニホン羊教育恐ろしい
大正生まれ昭和に命徒に

第７回 井笠川柳会笠岡誌上大会

蘖 ひこばえ

課　題（各題２句・３名共選）

「偽（にせ）」　今川　乱魚／前川千津子／西原　艶子　共選

「忘れる」　奥田みつ子／塩谷　幸子／森井　菁居　共選

応募料　1000円（定額小為替）発表誌送付

応募要領　B5大用紙１枚に各題２句（計４句）列記
郵便番号・住所・氏名・電話番号・所属柳社

締　切　15年２月20日（木）

投句先　〒714-0081　笠岡市笠岡507―68
井笠川柳会　宛
TEL0865-63-5858・FAX0865-63-6131
お問い合わせは　戸田さだお迄

賞　品　１位に石碑贈呈（２名）
（本人希望句・１年以内建立）
３才に粗品呈（句碑建立者を除く）

会員募集　新会員募集しています
年会費2000円(年４回あすなろ発行)

岸本水府句碑建立50周年記念並びに第54回三原市神明祭協賛川柳会

と　き　２月８日（土）10時開場

ところ　三原市市民福祉会館
（TEL 0848-63-4077）JR三原駅から南へ徒歩３分

挨　拶　備後番傘万松川柳会　八島　白龍

祝　辞　三原市長・議長・教育長
㈳全日本川柳協会会長　吉岡　龍城
番傘川柳本社主幹　磯野いさむ
川柳塔社名誉主幹　橘高　薫風

記念句会　事前投句は締切りました
当日投句（各題２句・締切12時）
「続　く」　早川　双鳥　選
「開　く」　土井　哲秋　選

会　費　2000円（昼食・発表誌呈）

懇親宴　3000円（大会終了後同所で。～７時）
当日午前11時から句碑建立50周年式典あり。
参加自由。於三原市松寿寺

主　催　備後番傘三原万松川柳会

後　援　㈳全日本川柳協会・番傘川柳本社
広島県川柳協会

麻生路郎物語

―躍進と試練の川雑―

(14)

東野大八

大正十二年二月菊判34頁で意欲満々スタートした『川柳雑誌』は、地元関西はもとより全国的な川柳関係者の間に、さまざまの反響と注目を浴びたことは、路郎自身が事あるごとに記述している通りである。(前稿参照)

この川雑創刊号のへき頭四頁を飾った「誤れる川柳観を排す」という堂々の論旨が、いわば路郎がかねてから抱懐した〝川柳社会化運動〟の実践要綱を意味してもいた。

「川柳というものは、決して世間が考えているような、つまらない謎かけのようなものでなく、俗悪でお座敷にのぼせぬようなものではない。私達が川柳雑誌を発刊することになったのは、世間の人達に真実の川柳を知っていただきたいためにほかならない」

この路郎の川柳本願の素地には、当然、世間に親しまれ、愛されて売れる大衆川柳誌の夢が伏在していたことは当然である。経営の成り立つ発行部数を誇る広告の効く雑誌…それはもはや趣味一筋のいい加減な豆本式柳誌では話にならない、川雑発行の夢を路郎にかわって代弁すればこのように要約できよう。

『川柳雑誌』№239(昭和十八年十二月号)の〝雑誌奉還〟号で〝苦斗四十年〟と題する路郎の回顧録には、つぎのように記されている。

私は川柳雑誌社の草創時代に三十年計画を発表した。ところが誇大妄想狂だと笑った連中もあったが、第一期の川柳社会化運動も、十年目に東京で社の句会を開いて社会化完遂の声明をした。この時には大阪から多数の同人を引き連れて上京、東京で空前だといわれた各派網羅の大会を開催した。

第二期は量的発展並びに質的完成を目指したのであったが、これまた、最早何人が継承しても継承し得るだけの社礎をきずき得たので、後継者を物色中たまたま大東亜戦争の勃発、戦局の緊迫に鑑み本年末をもって、雑誌奉還の挙に出ることになったのである。

第三期は私を自由な立場に於て川柳の研究に没頭さして貰いたいというのであったが、雑誌を放れることの自由はここに得られたが国難に背を向けての自由さはない筈であるから、私自身の研究がこれからの十年間にどの程度の進展をみせるかは疑問である。(中略)

話を再び前に戻すが、東京句会以前のことである。川柳の社会化運動を徹底せしめるために『川柳雑誌』の百号記念の大会を朝日会館で開催した。この催しは俳人月斗を一驚させ物に動じない朝日新聞の計画部の人さえも唸らせたのであった。未だかって短詩型文学で朝日会館の席を埋めたことがないからである。しかも講演と講演との間に音楽すら入れず三人ぶっつづけに講演をやったことも会館はじまって以来のレコード破りだといわれた。しかも入場料一円で千人以上の人々を集めたのである。

この時にも面白いエピソードがある。第一は社会事業としての興行税を支払ったことであり、第二は入場料を一円、五十銭の二種類にして欲しいという一部同人の声を蹴とばし

て一円で押切ったことであった。第三は余興に

—恋の罠あの眼だらうか眼だらうか

を喜劇に脚色上演したことであった。俳優はアマチュアの各派のスターばかり引抜いてきて「川柳座」という名称としただけに、二度と見られぬ劇団であった。しかし、この劇は、その後、朝日会館と新町演舞場で上演されたそうである。その一つは犬養木堂翁の追善会に興行されたらしいが、二回とも筆者は見る機会を失った。つまり原作者に無断興行が行われた訳である。

その四は今は亡き東京の杵屋弥七師が長唄「新浦島」、その五が現在東宝で活躍している山根寿子嬢が我々仲間で、あー坊と呼ばれていた頃に新舞踊を踊ってくれたことである。楽屋にガン張って総指揮をふるっていた私が、タッタ一夜のこの大会のため、前後三十日間一滴の酒も口にしなかったことも特筆大書すべきものであったのである。

この大会以外、朝日新聞社社会事業団後援の下に、同社三階大広間で、歴年同情週間拠金のための師走大会を挙行、常に三百余名の川柳人を集めて、川柳界のために大いに気を吐いたものであった。

その他三越八階における川柳大講演会では講演以外に照明を使用して川柳句会を実演した。おそらく句会の実演は、これをもって嚆矢（こうし）とするであらう。

『雪』『土団子』『後の葉柳』の高踏な短詩型の世界を経て、いうなれば川柳詩を大衆性への開放によってわが真実の「川柳」のジャンルを打ち樹てようとした路郎は、創生期の川柳雑誌を足がかりとして、戦前のある時期には時の社会環境の特殊ムードも幸いして彼が夢想する川柳社会化の成果は、ある程度実現化されたともいえよう。終生『川柳雑誌』にわが川柳人生を賭け、それに燃焼しつくして生涯を終った路郎—だが、その川柳人生はもとより平坦なものではなかったのである。

『川柳雑誌』は路郎三十七歳の発刊で、発行所は兵庫県兵庫郡鳴尾村字寺の後四四。柳の大樹を前栽に、裏庭は広い畑に恵まれ〝遅日荘〟と名づけたこの路郎居には、四季の草花や当季毎の野菜類が食膳を賑わせていた。壮年期の路郎は張り切っていた。路郎の代表的名句の一つとして挙げられている。

—君見たまえ菠薐草が伸びている

は川雑第一巻十一月号を飾った一句で、初冬の陽ざしの土をおしわけた力強いみどりの結晶のようなほうれん草の葉と根元の紅い色どりは、朝日の陽ざしに若さそのものを象徴していた。健康で今日の自信と明日への期待を存分にはらんだ生命の、それは路郎の人生への賛歌でもあろうか。君見給え—その叫びは愛妻へか、わがこころにか。

路郎篇大正傑作一万句（俳句）＝四六判四百八十二頁藤谷崇文館刊がこの年に世に出ている。執筆者は花菱、東魚、久良伎、紋太、松郎、柳雨、省二、五呂八、美々作、路郎らで往年の柳界の一翼を担う人々だった。つづいて新撰傑作一万句集（俳句）も編集準備に入っていた。また、庶民俳句集のこうした依頼編集もののほか、『川柳ふところ手』＝柴舟画、四六判二百頁田村書店出版＝の改訂版も世に出ている。

「大分以前のことである。ある古書展で路郎著〝川柳漫談〟を手に入れた。昭和四年八月一日刊。大阪の弘文社発行の菊版本で四百頁。定価一円五十銭とあり「路郎」の奥付もある。この本の序文はつぎの通りであった。

〝私の半生は川柳の生活であった。私は私の好きな川柳がいつまでもいわれなく、社会から誤解され、文壇では下積にされているのを慨し、ここ六年間はその縄縛から開放されることと、ひろく社会に川柳を浸潤せしめてほんとの川柳がどんなものであるかを知って貰うため、川柳の社会化運動に没頭してきた。そのためには雑誌『川柳雑誌』の刊行を続け、機会を捉えては東西南北に足を運んで、体験が生む力強い川柳に就いて説いた。近頃ようやくその曙光がみえてきた。しかし前途はまだまだ遠い。たゆまずその道に精通したいと

思っている。この小著がその運動の一助ともなれば幸いである〃

とある。読んでみて面白いのは「川柳染ちがい」鳥平画と「一昔前の大阪見物」柴舟画でした。いつか先生にご自分の本は全部おもちですかとおききしたら、いやなかなか、持てないんだよ、と答えられたことがある」（本田柳志書簡）

川雑が創刊された時点で、大阪の柳会は先行の『番傘』と、川雑発刊に刺激されてか、二月遅れて『大大阪』（本田渓花坊主幹・大阪市北区老松町三・大大阪川柳社発行・菊半載六十頁）が出た。川雑第二号にその一頁広告が出ている。「由来、浪速の地は平民文学の発祥地であり享楽地である。拙斎や山陽のような学者が大幅帳を繰り、算盤玉を弾いていた時代もあった。西鶴にしても巣林子の戯曲にしろ不朽のものとなっている。私等は大正聖代の佳吟を後世に伝うべき尊き使命の下に生れたのである」

渓花坊は、さきに『絵日傘』を単独発刊したこともある路郎の川柳仲間であり、友好吟社でもある。いわば大阪の久良伎流の風流人で新人獲得に乗り出したものの、こうして大阪は『番傘』『川柳雑誌』『大大阪』の三誌でい立期がしばらくつづくことになる。

こうした大阪柳会のムードを反映したのかどうか。川雑発刊に程なく一つの試練が路郎を見舞った。川柳以交吟社の柳誌『みをつくし』を刊行し、路郎に助力を依頼してきた、いわば川雑発行のきっかけを作った吉川唖人、竹田芦穂らの同人辞退であった。創刊年余もまたず各支部を形成していた唖人一派の大量脱退はよくよくの理由によるものと思われるが、詳しい内容はわからない。

創刊間もなく唖人氏などの脱退で非力になった『川柳雑誌』を応援すべく、翌十三年塚崎松郎、井上刀三、林田馬行の『灰』同人三人が、『灰』を廃刊して川雑に馳せ参じ同人に加った。この加盟は河野春三の推薦である。春三は明治三十五年堺市に生れた。大正十二年に路郎選の日日柳壇（大阪日日新聞）水府選の「今日柳壇」（大阪日日新聞）の投句から川柳への接触がはじまり、水府選の特選が奇縁で『番傘』の投句の常連となり、水府の世話で堺市の福助足袋株式会社に入社―同社広告部（大阪市）の岸本広告課長の下で文案係にもなった。時に彼二十三歳。

春三は大正十五年堺川柳会を結成。『番傘』編集に携ったが、翌年ごろから日車・半文銭・路郎の作品に共鳴。川柳の革新をめざし『番傘』を脱会、路郎に私淑する形となる。松郎・馬行・刀三の川雑加盟も、春三の働きかけであったことは明らかだ。（彼自身の参加遠慮は、対『番傘』の気兼ねからか）もっともこの三人は、川雑同人正味三年ののち脱退して、黒木鵜足（もと〃みおつくし〃派で英豆を改号）に春三の五人で「川柳使命会」（松郎命名）を結成、革新川柳運動の実践活動に入るのである。

「人は彼（路郎のこと―筆者註）を狷介で人を容れない頑固で偏狭な性格の持主であるという。それゆえ有為の青年が彼に近づいても、すぐ反撥して背いてゆくことを繰り返しているという。そういえば塚崎松郎、井上刀三、林田馬行、黒木鵜足、松丘町二、岩井たけし、川合舟々、岩本素人、松盛琴久、水谷鮎美ら優秀な作家たちも路郎の『川柳雑誌』にはいって日常をともにすると、すぐまた路郎を離れていくという事実は事実として否定できない。

しかし、まことに片意地でいい出したら損得を考えずに、青筋を立てる彼ではあるが、心の底は常に孤独であり、常に友情に飢えていた人間であったとボクには思える」（川柳平安二百号記念特集号・麻生路郎作品〃詩性と大衆性の中で〃河野春三）

しかし、こうした川柳雑誌創世期の人材異動の中に、ただ一人の異材がいた。〃みをつくし〃派の一人である橋本二柳子（川雑第一支部長）である。この人物こそ、創世期の川雑をほぼ中期までの川雑の土台骨をささえ、路郎のかけがえのないアシスタントとして活躍した二柳子改め橋本緑雨その人である。

愛染帖

波多野五楽庵選

やせ我慢の限界あたり吹く風だ　吹田市　山本希久子
厳冬へ味方の数をよんでおく　和歌山県　村中　悦男
徒花にどこか似かよう店じまい　和歌山市　福井　桂香
晩秋の夕日早めに幕を引く　和歌山市　木本　朱夏
受胎する予感ふるえて花粉の黄　和歌山市　鍛原　千里
私小説に咲きつづけている落椿　大和高田市　東京都　やまぐち珠美
山茶花の白ほどの哀なかりけり　弘前市　斉藤　劦
ホチキスで止める程度の絆なら　
冬の絵に男心をあそばせる　
聞き耳を立てても春はまだ遠い　
レクイエム奏でて月は満ちながら　
身の冬を誇ってみせよ寒椿　
割り切れぬ雲を抱いている 今日も雪　

ハローワークの窓に群がる冬蛍　和歌山市　桜井　千秀
あとがきに素顔が覗く花詩集　弘前市　高橋　岳水
尻尾の名残り引きずり助走ばかりする　鳥取県　西沖　彰雄
騙されてあげる気付かれないように　尼崎市　春城　年代
何ごともなかった今日の満足度　弘前市　高瀬　霜石
去る人を追わねば味方減るばかり　和歌山市　川上　大輪
人生はドラマ空しさなどはない　愛媛県　中居　善信
あんぱんの餡は駅前一番地　香芝市　大内　朝子
玄米パンをぱくぱく祖父も祖母もいて　和歌山市　吉村さち子
お宝はないが楽しい僕の蔵　高槻市　田中　初恵
生きている証拠わたしに角がある　和歌山市　福本　英子
鍵穴を覗くと雨が降っていた　
生憎の天気私の所為じゃない　
甘い甘いトカゲの尻尾切ったとて　
へのへのを書いて寂しい一日だ　
老いるってこんなに寒い坂なんだ　
美しい嘘です耳を貸してやる　
忘れたい過去落丁にしておこう　
差し上げる人も無いけど銀杏の葉　

悲しみが浮いて来ぬようそっと蓋　八尾市　生嶋ますみ
返し縫い布巾がふっと涙ぐむ　松江市　川本　畔
雪女のくれた真っ赤な風邪ぐすり　枚方市　海老池　洋
辻褄が合わなくなった古時計　横浜市　近藤　道子
天寿まっとう　ぽつりぽつりと通夜の酒　弘前市　相馬　銀波
膝に置く少し疵あるさみしい手　堺　市　山本　半銭
起承転ワイン二本を空にする　東京都　播本　充子
人の字の形が崩れそうになる　鳥取市　岸本　宏章
気にかかる釘一本を抜いて朝　弘前市　宮崎ヒサ子
私にも自信をくれたピカソの絵　海南市　三宅　保州
運命線辿り独りの長い夜　出雲市　園山多賀子
限りある命いとしむ雪女　青森県　西谷　大吾
流れながれて和音の海にたどりつく　西宮市　門谷たず子
肩の力抜いてファイトを掻き立てる　尼崎市　春城武庫坊
青白い夜だ叛いてみたくなる　藤井寺市　髙田美代子

弘前市　中山　雅城
ハーモニカ吹けば二月は雪大地

富田林市　大橋　鐘造
も一人の私を探す冬の街

出雲市　石倉美佐子
人形のしっぺ返しが恐い月

愛媛県　黒田　茂代
チェックした男と沈む水中花

大阪市　前　たもつ
鶏に卵のねだん知らすまい

米子市　白根　ふみ
柚子しぼるわたしをしぼりきる余白

弘前市　一戸　ツネ
わたしを引き取る相談亡父と亡母

八尾市　井尻　民
里へ向く雲ゆるやかに父や母

美祢市　安平次弘道
雪こんこもう距離感がつかめない

八尾市　村上ミツ子
海に出たさびしさ海に吸いこまれ

西宮市　牧渕富喜子
石畳　無名の恩を踏みしめる

和歌山市　青枝　鉄治
酒豪の血　子子孫孫に受け継がれ

鳥取県　上田　俊路
余生とは何と淋しい文字だろう

尼崎市　田辺　鹿太
悔しさに耐えるおんなの糸切歯

大阪市　三浦千津子
逝く時に残す台詞はまた　明日

鳥取市　徳田ひろこ
アドリブの受けすぎ椅子に戻れない

松江市　津川　紫晃
電線の口笛だろう冬の風

奈良県　渡辺　富子
言い合って溝は埋まらぬままの冬

藤井寺市　太田扶美代
シャッターの外で待たせてある明日

大阪市　神夏磯典子
昔そんな夢を見ました柿の種

羽曳野市　吉川　寿美
誤解まだ解けない傘の半開き

岡山県　大石あすなろ
新しい風に折り目がついている

四条畷市　吉岡　修
愉快犯ていどのしたいことがある

和歌山市　西山　幸
許し難きを許し渋柿甘くなる

今治市　越智（故）一水
来客のように落葉が音を立て

唐津市　久保　正剣
文化には遠いが肺には良い空気

唐津市　宗　水笑
盲導犬　犬の幸せ捨てた顔

岡山県　山本　玉恵
風ばかり食べてきたのかうすい影

鳥取県　土橋　螢
奥の細道これから先は教えない

倉敷市　小野　克枝
こんな時男も泣いて見せるもの

岡山県　福原　悦子
深追いはすまい曇り日崩れそう

和歌山市　楠見　章子
ドライフラワーになっても匂いたいわたし

大阪狭山市　羽田野洋介
この前と違う仮病を考える

黒石市　相馬　一花
どの酒を飲んでも旨い芽出度い日

松原市　玉置　重人
無遠慮に歳を聞かれる歳になり

鳥取市　田村　邦昭
いい風に晒し人間らしくなる

大阪市　板東　倫子
足し算も引き算もなく年暮れる

池田市　栗田　久子
強がってみても子鬼に牙が無い

鳥取市　録沢　風花
星の数だんだん減って来た視力

今治市　野村　清美
行間へ悔し涙が埋めてある

京都市　都倉　求芽
隠れ家を心にひとつ持ち歩く

米子市　光井　玲子
何事も弱腰進歩ゼロですね

和歌山市　古久保和子
鋭角な言葉を吐いた罪を負う

弘前市　福士　慕情
雪を掻くそばから雪の降り積もる

弘前市　櫻庭　順風
四角張る祝辞を置いて語りかけ

唐津市　井上　勝視
立志伝喜寿過ぎてから読み始め

唐津市　仁部　四郎
計算を狂わす票を蟻が持つ

和歌山市　武本　碧
反省の証　修正液光る

日立市　加藤　権悟
しばらくは男をだます蜃気楼

大和郡山市　坊農　柳弘
ときどきは天女の面を被る夜叉

愛媛県　花岡　順子
足音へのんきな仮面つけて待つ

横浜市　保田　絹子
優しくてめげないとこが気に入らぬ

八尾市　吉村　一風
自分にも言いきかすよう背なを押す

大阪市　浦田　綏子
無始無終無辺無量で泣き笑い

寝屋川市　太田とし子
肉親の骨まで刺さる棺の釘

八尾市　宮崎シマ子
口出したばかりに苦労背負いこむ

富田林市　片岡智恵子
どんぐりの仲間同士で馬が合い

大阪府　澤田　和重
華やかな過去捨て切れぬふしあわせ

羽曳野市　吉村久仁雄
本当の小便小僧の名は知らず

京都府　丹後屋　肇
自分史のチャートグラフが乱高下

鳥取市　岸本　孝子
いよいよになると尻込みする男

弘前市　蒔苗　果林
ねんころり小春日の愛暖かい

今治市　塩路よしみ
明日の風どうあれ夫婦サンマ焼く

寝屋川市　坂上　高栄
折り折りの便りを風が持って来る

交野市　田岡　九好
こんなんで居らせてもらうこの世です

高知市　小川てるみ
正夢になればと眠ることがある

八尾市　高杉　千歩
大人にはなりたくないを叱れない

倉吉市　野口　節子
残り火が吃水線で揺れている

西宮市　西口いわゑ
乱れ髪恋はいつでも崖っぷち

寝屋川市　平松かすみ
アンケート金釘流で書きました

和歌山市　田中　みね
来年も生きていたらの話です

羽曳野市　酒井　一壺
何の因果か夫婦で同じ薬飲み

松江市　三島　淞丘
名案が出ず溜息が出るばかり

宇部市　平田　実男
有名税だろう無い事まで言われ

富田林市　中井　アキ
ひょっとこの仮面で火の粉振り払う

鳥取県　西原　艶子
友情の証ファイルに詰めてある

竹原市　正畑　半覚
迷う度道を尋ねてみる父だ

米子市　足立由美子
迷路から抜けるきっかけ待っている

三田市　石原　歳子
読書中いつも睡魔に誘われる

和歌山市　玉置　当代
平和主義よけいなことは言わんとこ

寝屋川市　森　茜
さかさまに見ると納得する話

鳥取市　福田　登美
冬の陽が落ちて鉛筆丸くなる

岡山市　藤原　一平
薬にも毒にもならぬ釘を打つ

河内長野市　植村　喜代
生きるのに難しいこと言わないで

鳥取県　鳥羽　直市
観覧車遠い昔をみて降りる

鳥取市　夏目　一粋
ポケットの本心いつも出たがらぬ

吹田市　岩屋　美明
トランポリンの上で見つけた小宇宙

羽曳野市　濱口　フジ
携帯の受信記録がもめるもと

唐津市　市丸　晴翠
ご先祖をバトンタッチの子がいない

藤井寺市　中島　志洋
ご自慢の英語外人首かしげ

誹風柳多留二四篇研究 51

橋本秀信・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
清　博美・佐藤要人

394 **さアばあさま御出たとたいこのき**

橋本　会話句。婆様は、吉原の嫌われ者遣り手のこと。「さあそろそろ遣り手様がお出ましの頃だ」、「剣呑、剣呑」と、それまで陽気に座を取り持っていた太鼓持ちも引き上げたという句。川柳では、太鼓持ちは遣り手と対等するものとして詠まれているが、口八丁手八丁の太鼓持ちも、遣り手には一歩譲るとされる。「御出」は、オイデと読まれているが、オンデの方がいいように思う。

よくのかわ張りさけそふなばゞァ出る　二四13

とん組て遣り手にまけるたいこ持ナ　明二桜6

遣り手とんまけまい口てたいことん　天五桜1

山田　賛。見世では遣手が総支配人。

小栗　賛。「御出」（おいで）は、「出る」の尊敬語。

清・佐藤　同。

395 **大御無沙汰とゑ樽の跡へ来る**

橋本　柄樽は、一対の長い柄のついた小型の樽。胴が朱または黒で塗られており、祝儀などで、酒を贈るときに用いる（『日国』）。家樽、角樽、柳樽とも。

祝い事があって、柄樽を持って挨拶に来た人がいる。相手は旧知の間柄だが、しばらく疎遠になっていた。「長い間ご無沙汰しておりますが、お元気ですか」などと挨拶を交わして、お互いに久闊を叙している情景。祝い事は特定できないが、おそらく、近親者の結婚のための、結納の儀が想像される。

俄雨大御無沙汰に振り込まれ　一四五31

遠方の土産近所のゑだる也　四〇21

目をあける礼にゑ樽とかなかしら　八八15

伊吹　賛。「ゑ樽の跡」であるから、正確には「柄樽を持って」ではなく、小物に持たせて、その跡から来たのであろう。

清・佐藤　賛。

396 **肩で風ハ切るが刀でハいかず**

橋本　肩で風を切るは、威勢がよくて得意な態度を見せる。（『広辞苑』）

いつも大口をたたき、小粋ななりで気取った行動をしているエエ格好しい。通り者か、遊び人であろう。たまたまトラブルが起こって刃傷沙汰になった。ところがイザとなったらこの男、ヤットウのほうはまるで駄目。日頃の言動はどこへやら、全くの役立たずという情景。「切る」は縁語として、刀にも懸かっている。

かたで風切リなわつきを供につれ　安九梅3

肩で風のきりくらを妾する　筥四14
広ィこと訴訟が済ンて肩で風　若翁明二9 11

清・佐藤　賛。

397　**わづうかなぞり〳〵をする恥しさ**

橋本　結婚した女性が眉毛を剃る情景の句。お歯黒をつけ、眉毛を剃る動作に新妻の初々しさが感じられる。「ぞり〳〵」は擬音語。

『守貞漫稿』に「江戸は未レ嫁既に嫁する女も、歯を染る者は専ら髪を丸曲（髷）に更め眉を剃る也。江戸も武家の新婦は、歯を黒め髪を丸曲（髷）に結べども眉は剃らず。二十三四歳に及で初て眉を剃る。（中略）歯を染め眉を剃るを、江戸にては元服すると云。又江戸にて歯を黒めて眉を剃らざる者を、半元服と云」とある。

目のうへをそり〳〵〳〵とおしい事　一五3
ひそめるものをそり落すおしい事　一五13
いさゝかなぞり〳〵するとふけるなり　天三信1

清・佐藤　賛。

398　**腹斗かしてりや妾いゝ女**

橋本　男子相続の原則があった当時は、世嗣を得るための妾は公認されていた。妾が、子供を産むだけに徹していれば、何ということもないのだが、類句3にあるように、主人の寵愛をいいことに、いろいろ表向きにも口を差し挟むから、お家騒動が起こる、という句である。これは古今東西の歴史が物語る至言。

はらかりた跡トてハしやまな女なり　天五桜1
かりもの、部へハはいれど手がら也　四11
腹をかす替りおもいれだゝを言い　玉6

清・佐藤　賛。

399　**行クもんだなといやすけんうさァねへ**

橋本　会話体で構成されている句だか、意味がよく判らない。一応素見初体験の仲間二人の会話とする。張見世を覗きながら「行く（器量のよい者が先に揚がる）もんだな」と、一人が言えば、相棒が「嘘はない（まったく、聞いてきたとおりだ）」と答える。以上こじつけの駄労解。

粕谷　賛。『川柳風俗志』は、「ウサァネエ」＝「ウソはない」＝「違いない」としている。

い、春といへハおやふんうさあねへ　安四礼6

山田　「行くもんだナ」は「来てみるもんだナ」の意で、現在でもよく使う用法。本句は、吉原の盛況に驚くおのぼりさんの会話であろう。

小栗　礎稿のようないみだと思う。粕谷兄の例句のようなニュアンスか。

清・佐藤　同。

400　**くらへそばへてみかどさんみかどさん**

橋本　くらへそばえるは、食戯、喰らいそばえる。酒を飲んでふざける。転じて調子に乗っていい気になる。（『日国』）

後鳥羽上皇の寵姫、亀菊の句。彼女は四条の白拍子上がりという。寵愛をいいことに、時には酒を飲んで、天皇（正しくは上皇）のことを「帝さん、みかどさん」などと、気安く呼んだろうという想像句である。「承久の乱」は、亀菊が賜った所領のトラブルが発端という。

お妾は四条あたりのてんばもの　明三満1

小栗　他に帝の寵愛を受けた女性はいるのに、何故、亀菊の句と決められるか、よくわからず。

清・佐藤　礎稿賛。

女性コーナー

尚香の忠

政岡日枝子選

合流点過ぎて和音になる流れ　西宮市　牧渕富喜子
昨日まで見た絵が今日は影もない　米子市　野坂　なみ
だぶだぶになった未来を持て余す　藤井寺市　太田扶美代
鋭角に切ったケーキの自立心　東京都　播本　充子
わたくしといっしょに生きている鏡　鳥取県　西原　艶子
春そこに半解凍になる金魚　鳥取市　徳田ひろこ
素っ裸になりたい場所を探してる　八尾市　宮崎シマ子
コスモスはそんなに弱い花でない　米子市　中井　ゆき
風ならばあなたの頬に触れられる　西宮市　西口いわゑ
まだ振れば鳴るやも知れぬ鈴を抱く　香芝市　大内　朝子
巻き戻ることない時間の冷酷さ　箕面市　出口セツ子
鍵穴を塞いで奥は覗かせぬ　和歌山市　西山　幸
蟋蟀のいのちを思う掘炬燵　藤井寺市　高田美代子
幸せ色をうすめてはいませんか　八尾市　村上ミツ子
自画自賛　葉脈てかてかして椿　和歌山市　福井　桂香
美しい女入れたがる傘の癖　松江市　川本　畔
滑らせた口から水が漏れて来た　倉吉市　野口　節子
これからの風が吹いてる始発駅　富田林市　中井　アキ
お茶の花えくぼのように咲いている　和歌山市　古久保和子

病葉の一つは私かも知れぬ　和歌山市　武本　碧
三枚におろしわたしを曝け出す　羽曳野市　吉川　寿美
人間に賞味期限は無いものを　富田林市　片岡智恵子
伏せるから別れの素振りするのだよ　松江市　安食　友子
万感をととのえ何れ散る紅葉　米子市　白根　ふみ
レール逸れ胸の荒野で踏み迷い　和歌山市　松原　寿子
ふるさとの匂いを探る象の鼻　弘前市　一戸　ツネ
疑問符がいっぱいそれも運命か　米子市　林　瑞枝
お目当ての服はセールから外れ　八尾市　高杉　千歩
葉隠れの蕾楽しい待ち時間　和歌山市　楠見　章子
水仙の香　突然過去が甦る　吹田市　山本希久子
糖衣錠の中でめらめらする妬心　東大阪市　田中美弥子
広告がわれもわれもと目にせまる　神戸市　田中　章子
欲得でないのに喉の渇きよう　尼崎市　春城　年代
朝の鏡凛といのちを映しだす　和歌山市　吉村さち子
クイズ解く一人ではないありがたさ　横浜市　山梨　雅子
風の私語聞かなくなった掘炬燵　出雲市　園山多賀子
同病だから温度差も解り合う　尼崎市　長浜　澄子
逆らって絆を脆くしてしまう　鳥取市　西川　和子
大波を承知で意見出してみる　弘前市　宮崎ヒサ子
本棚の風も時には入れ替える　米子市　澤田　千春
生きる音を確かに残す枯野原　東京都　やまぐち珠美
二年目もあけずのままの常備薬　鳥取県　さえきやえ
さらさらと内に流れる水の音　高知市　小川てるみ
残り火が風の誘いを真に受ける　愛媛県　黒田　茂代

さえずりに今朝の一歩をほぐされる　三田市　久保田千代
ハイハイと言えば機嫌はよいけれど　米子市　青戸　田鶴
相槌を打てば味方にされている　鳥取市　福田　登美
国会を叱ってテレビ切ってやる　米子市　鷲見　正子
付けかえたボタンやっぱりずれていた　大和高田市　鍛原　千里
茹で卵素直に剥ける今日の賭け　大阪市　三浦千津子
まぐれだと思っていないのは妻だ　大阪市　神夏磯典子
いい話　重い空気が澄んで来る　岡山県　富坂　志重
捨て水へ月の光がやわらかい　寝屋川市　森　茜
やさしさが一本立ちの邪魔をする　倉吉市　山中　康子
辞書見ても脳の扉が開かない　今治市　野村　清美
長かったもつれを解いた南風　米子市　木村富美子
糟糠の妻を日なたへ出してやる　堺　市　志田　千代
ハイネックわたしの顎が隠れそう　横浜市　保田　絹子
こがらしが身にしむ木から落ちた猿　岡山県　山本　玉恵
ルンルンの気分つるりと茹で玉子　芦屋市　黒田　能子
人様より自分を騙す白髪染め　八尾市　生嶋ますみ
思春期がきたかこの頃黙り込む　横浜市　田中　笑子
返り花ここにも迷う羊居て　和歌山市　榎原　公子
セールスと喋っただけの夜なべする　和歌山市　桜井　千秀
雪降って隣の声も遠くなり　鳥取県(故)　権代　康女
引退はしたが過去形では呼ぶな　鳥取県　吉田孔美子
罵倒されて発火しましたど根性　倉敷市　井上　富子
人間の坂野仏のよだれかけ　八尾市　井尻　民
だんだんと早くなります老いの歳　河内長野市　植村　喜代

残り火を絶やさぬように生きている　大阪市　板東　倫子
思い切り生きたね紅葉愛おしむ　東京都　後藤　早智
毒のある女がなぜかようもてる　東大阪市　北村　賢子
邪魔物にされたわたしの古箪笥　大阪市　津村志華子
ぐず返上しなきゃ時計があきれてる　生駒市　飛永ふりこ
よい花器は花が一番知っている　米子市　池尾　保子
失恋の缶コーヒーの一気飲み　橿原市　居谷真理子
もう一人の私が脱線したくなる　倉敷市　小野　克枝
続いてる三日坊主の日記帳　三田市　石原　歳子
嘘をつくまあるく丸く生きるため　岸和田市　土橋　房枝
遠回りしても欠かせぬ義理がある　倉吉市　米田　幸子
リハビリの杖に辛苦の血がにじむ　香川県　川崎ひかり
家事よりも楽しいことがうんとある　横浜市　長島亜希子
雑学にたけた女は跳びまわり　豊中市　樫谷　郁子
煮え切らん男や夢の中でまで　大阪市　大川　桃花
愛嬌よいバイトが仕切りはやる店　大阪市　鈴木トヨ子

富喜子さんの句―素直に詠みとって「川の流れのように」を思うのですが、和音になりたくても、諸情勢が許さず、情けないものだけがどんどん露出して、平行線ということもある事実。和音になる流れの中に住みたいものだと思います。**なみさんの句**―句の仕立てが昨日までの姿と今日の姿とに二分され、それが見事に人の世のはかなさ、無常さにつながり、結界のあたりに見送った人への挽歌となりました。**扶美代さんの句**―夢や希望が萎むとはこういう事かと改めて川柳の深さに出逢いました。「ありがとう」の花の種などまいて、来るべき未来を待ちましょう。**充子さんの句**―何故鋭角になったのか定かではないが、真っ直ぐでないものが多い昨今、その切り口の真摯な姿と、その刺激的な説得力に魅かれました。だがケーキは甘くて美味しい方がいいなと現実とロマンが交差します。

短

石尾かつ乃選

短いが父の便りは温かい　俊子
羽田離婚こんなはずではない指輪　慕情
短冊へ熱い思いの一行詩　碧
短篇で終りたくないこの出会い　正剣
ここで短気起せば敵の思う壺　春雄
酒旨しと短く書いて日記閉ず　(稲)洋
丸い背の老母の短い影ぼうし　志華子
短冊に書いた拙句がてれている　恭昌
のんびりに見えて短気なへそ曲り　俶子
一行のメモでやんわり釘をさす　さち子
兄弟で父母の短所を分かち合い　水笑
温もりは短いことばのその中に　玉恵
短気だが涙に脆い父だった　善信
付き合いは短いけれど真の友　智加恵
短い台詞どんなに待った今日の日を　一風
短冊の一句で恋が成就する　半覚
好きだからウンと短いプロポーズ　扶美代
どうしても届いて欲しいこの短波　孔美子
自画自賛の短詩を添えて出す賀状　清山
短くていい一言が欲しかった　あずき
他人の眼が光る逢瀬の短さよ　一知
逢いたくて最短距離を雨の中　登美
才女にも短所があって付き合える　みね
本心は追伸にある頼みごと　愁女
短日の陽を使い切る農仕事　ゆきの
長短をかばいあってる子等の夢　天涯
短文の心に残るプロポーズ　邦昭
七癖の短所が邪魔をしています　妻子
長短を言わずコンビを組んでいる　大鯰
短針と長針ちょうどいい夫婦　霜石
絵手紙に祈りをこめて一行詩　活恵
短命な夫に託びて翔んでいる　弘子
自画像をリフレッシュするヘアカット　岳水
花時計短い恋と知っていた　千里
手短な話も裏があるらしい　(奥)五月
履歴書へ当り障りのない短所　政勝
短足の歩幅が稼ぐ万歩計　徳三

佳

命短し飲んで騒いで古希迎え　淞丘
自分史を書く鉛筆が短すぎ　俊路
少年の短い夢の甲子園　雅城
短日の再診予約して帰る　螢
妻の乱メモに短くさようなら　たず子

人

短足の遺伝子しかと子らが継ぐ　鉄治

地

明日手術すると短い友の電　彰雄

天

年の功長所短所も丸くなる　羽田野洋介

軸

今だから書ける短い私小説

段

北川　竹萌選

結願へ一段ごとの南無大師　巳代一
階段の一つひとつにあるドラマ　千里
階段の手すり私の生命綱　(堂)泰子
日没の値段に走るパートママ　柳弘
いくつもの段落を経て今がある　英旺
車椅子茶髪段差を押してくれ　権悟
石段の途中で貰う思いやり　雅城
階段で情けがしみる乳母車　セツ子
石段に湯の香が残る湯治宿　公誠
ご先祖の苦労棚田に掌を合わす　勝視
碁石の音どこか冴えてる有段者　水笑
段々と出世コースに乗っている　注湖
しばらくの沈黙さすが有段者　四郎
ほがらかになって段々する話　天涯
後継者欲しいと棚田待っている　東吉
段段畑すてず老母が住む故郷　清山
習い事段をとっても猛稽古　フジ
黒帯へ気迫の籠る背負い投げ　慕情
鈴の音に石段軽く遍路笠　勝巳
さすが段上がって空手技が冴え　照子
ちょっとした段差に油断してしまう　ミツ子
物言わぬ匠の技は段ちがい　(奥)五月

ちょっとした段差困らす車椅子　像山
段段に夫の背なと似る息子　一風
一段ごと邪念を捨てる奥の院　あずき
段階を踏んで手習いする余命　松煙
段々と妻が無口になる怖さ　圭一郎
階段をやっと上がった課長椅子　(花)順子
階段の手摺り転ばぬ先の杖　旋風
段取りが出来て北鮮拉致支援　螢
父母の部屋段差なくして悦ばれ　(石)三郎
段々に親を見おろす子の背丈　愁女
格段に違う性格でも夫婦　照彦
段階を踏まえ説得する親父　たえ
段階をふんで誤解を解きほぐす　倫子
環境破壊段々地球やせてくる　恭昌
おめでたで段取り狂う娘の挙式　遠野

佳

段々と骨を抜かれてゆく出世　保州
若嫁の味に段々馴らされる　高明
正確に段差導く盲導犬　俶子
故郷が段々拉致のシミを抜く　徳三
人の道頂点のない段登る　紫晃

人

段々と誉め下げ温い友祝辞　三代子

地

段々と少女の胸も自己主張　一花

天

自分史の段落あとはどう書こう　樋口輝夫

軸

九十越え一段高く祖神美化

次

吉村さち子選

いつからか家事は二の次五七五　(田)章子
次回予告思わせ振りな締めくくり　玄也
がり勉でやっとエースの次にいる　(花)順子
仕事二の次　鉦や太鼓のトラファン　たもつ
次の世は蝶で舞いたい葱ぼうず　志華子
次々に夢をまとって試着室　敏子
困らせた次男の嫁に助けられ　俶子
次世代へマンツーマンの愛繋ぐ　(堂)泰子
次の世は他人と妻にいなされる　和重
喜寿控え訃報次々開く同期　義男
次々に臑を齧って子等巣立つ　活恵
話す順　次だと思う早い脈　照子
次期社長めざす男の目が光る　庸佑
失敗を次の自信へ持ってゆく　南花
真実を次代へ継ごう終戦忌　正雄
次々と相手の好さがみえてくる　次根
次々と技を繰り出す晴舞台　慕情
惜敗に次回を誓う涙声　一知
次の次狙うポストの距離を読む　俊子
次のページ読めば世間が広くなる　シマ子
諦めず次期に挑んでいる大志　ヒサ子
助走して次のジャンプを考える　一風

アメリカ村で次元の違う風に会う　隆盛
次世代へ譲る地球にある不安　昌鼓
次々と神も仏もない事件　像山
次点は気楽トップはきっと寒かろう　碧
欲望の列車とぎれることがない　セツ子
まどろんで気付けば席次入れ替わる　岳水
紀伊の旅次の駅弁めはりずし　雅城
次男でも親の介護は免れぬ　倫子
酔い醒めて次第に萎む向う意気　清史
次の時頑張りゃいいと他人事　みね
次号書く構え鉛筆とがらせる　鉄治
次善策選んだ道でまた転ぶ　公誠
納豆グルグル次のプランを組み立てる　霜石
宿題も出来次の日はスキー履く　螢
童謡をもう唄わない次女の靴　度

佳

次の方と言わず名前を呼んでほし　保州
次からは約束しない雪ダルマ　典子
入念にさがそう次の世の相手　重人
次世代へ葉っぱのフレディー舞い落ちる　朝子
とっときの次は見せない紙芝居　たず子

人

次の世は自分に勝てる人になる　美代子

地

同居して次元の違い胃に溜る　寿美

天

次々と咲いては散っていく輪廻　三島淞丘

軸

次の世も添う約束で酌むお屠蘇

初歩教室

題 ― 漬ける

三宅保州

「題」を決められているいわゆる題詠では、同じような発想、同じような表現の句が何句も出句されることがあります。題が同じで、しかも僅か十七音字の川柳ですから、人の考えることは同じ発想になることが多いものです。このように同じような発想の句を「同想句」とか「類句」とか言われています。

今回の「漬ける」という題も比較的作句の範囲が狭いことからも、同想句をたくさんいただきました。特に「薬漬け」や「一夜漬け」を句想にして作られた句を多くいただきました。同想句は「相討ち」といってどちらも没（不採用）になることが多く、句としても当たり前のことを当たり前に詠んだ説明調や報告調の句になり勝ちです。例えば、太陽は明るい、海は広い、孫は可愛い、老いが心配などと作句しても、いわゆる「そうですね」川柳になってしまい、読者に感銘を与える佳句にはなり難いものです。

それでは同想句になりやすい句を作らない方法はと言いますと、「最初に浮かんだ発想や句は捨てる」ということに尽きます。また、その題を真正面からのみ見ないで、斜めからも裏からも観て深く考えてみて下さい。そのうえ、投句数の何倍もの多作をすることです。

そうすればきっと佳い句が生まれてきます。ご健吟をお待ちしています。

【同想句】

「一夜漬け」を詠んだ句

一夜漬け山のはずれた夢を見る　喜子
期末テスト山がはずれた一夜漬け　満子
一夜漬け覚えた事も上すべり　稔
丁半どちら試験の一夜漬け　宏子
一夜漬けしていた僕の学生帽　美弥子
世に出ても役に立たない一夜漬け　忠子
リタイアの今もやっぱり一夜漬け　千枝子
一夜漬けでも百点採った大昔　円女
一夜漬けちょっぴり自慢免許取り　はじむ
一夜漬け袋に入れてぐじゅぐじゅぐ　像山
ヤマかけて逆転願う一夜漬け　英旺
一夜漬け赤トウガラシが効いている　英旺

「薬漬け」を詠んだ句

おばあちゃん重たいほどの薬漬け　益子
薬漬けこれだけ飲んで治らねば　秋星
くすり漬け素直な顔で貰うけど　美恵子
寝たきりで薬漬けされ命延び　芳江
薬漬け医療のミスは補えぬ　侑子
薬漬け国保は痩せる医者太る　裕子

次の佳句を参考にして下さい。

よき母でありたし茄子の一夜漬け　辻文平
薬漬けらしいが飲まずにもおれず　小久保林三
にんげんのいのちは延びて薬づけ　岩井三窓

【添削句】

原 漬物も物菜おにぎり皆スーパー　勝久
中八、下六音字　いろいろ詠み込みすぎ
添 スーパーの漬物母の味がない
原 漬け物の塩分気になる年になり　真一
中八音字は避けましょう
添 漬物も薄塩にする歳になり
原 漬物はばあちゃん出番と腕まくり　節子
推こうすれば中八を防げます
添 漬物へ腕まくりするおばあちゃん
原 お仕舞いは茶漬けで括るグルメ旅　惠勇
原 旅帰り茶漬サラサラ荷も解かず　登志子
両句とも詠み古されたきらいがあります
グルメ旅家の茶漬けが締めくくる　いつふみ
お漬物だけでもよいと旅にあき　文亭
などの句が既に詠まれています
原 漬物は特にキムチは大好きだ　秋星

原 漬物と言えばキムチを孫は買い　雅　子

視点を変えると句が広がります

添 日韓親善に一役買っているキムチ

添 キムチ好きになったワールドカップから

原 家にある漬物石は何代目　文　江

家にあるが言わずもがなの感がします

添 漬物石に刻まれている女の譜

原 一切れの奈良漬けに酔う父と子と　侑　子

父と子では作者の位置があいまい

添 一切れの奈良漬けに酔う父譲り

原 気楽でいい亭主の酒はお漬けもの　美恵子

気楽でいいは詠みすぎ

添 漬物さえあれば機嫌のよい夫

添 肴には漬物あればよい夫

原 大根漬け白くつめたい雪のよう　喜　子

大根―雪―白く―冷たい　表現が重複的

添 手を赤く染めて大根漬け終わる

原 漬け物石母の形見に腰ぬかす　輝　夫

形見に腰を抜かすという文法になっている

添 母の形見の漬け物石にある温み

原 食べる人思って白菜漬ける味　栄　呼

食べる人は誰か詠む方が良い

添 巣立った子に送る白菜漬けている

原 嫁に行く分まで漬けて一休み　清

嫁に行くとはお裾分けのことですか　読者にはわかりにくいのでは

添 お裾分け分もたっぷり漬けました

原 マンモスの遺伝子眠る氷漬け　つよし

そうですねという説明句に終わらず、それを作者はどう思うか詠みましょう。

添 氷漬けの怪獣起こす温暖化

原 外は寒風大根漬けるあたたかさ　大　鯰

温かさを読む必要のある句かどうか

添 木枯らしに大根漬ける風物詩

原 まだまだよ漬物の世話嫁に無理　章　司

比較的簡単な推こうの方法として、上、中、下を入れ替えるだけで、句が整ってよくなることがあります。リズムも良くしました。

添 漬物の世話はまだまだ嫁に無理

原 味噌漬けて満足顔の手前みそ　千　華

味噌漬けての味噌と手前みそのみそとが、語呂合わせの感がします。川柳には語呂合わせや駄洒落は御法度です。これらを使った狂句的な川柳から脱皮して現代的な川柳になって百年を経た今、良質なユーモア句を目指したいものです。

味噌漬けを詠む一例を示しますと

添 味噌漬けの秘伝覚えてくれた嫁

原 酒はずむ沢庵野沢菜露天風呂　弘　之

気持ちも句意もよくわかり、御満悦の情景まで彷彿としますが、如何せん何もかも詠み込みすぎて、ごてごてと並んでかえって焦点がぼけてしまっています。川柳は省略の文芸とか、作句とは省略することなりとか言われるほどです。しかし、言葉を省略しすぎると中味がわからなくなります。言葉は省略して中味は略さなければよいのですが、言うは易く行うは難しです。やはり多作、多読あるのみですね。

添 野沢菜を肴に宿の酒はずむ

【佳　句】

漬物は母の仕事に残しとく　宏　子

飽食の世にも漬もの自己主張　千枝子

漬物でつい一杯を食べすぎる　満　子

朝漬けにもう一本を誘われる　洋　介

ニンニクを漬けて家風に叱られる　和　友

大根を漬けて今年も母達者　敏　子

嫁入りの荷を糠床が追いかける　鈴　美

姑の手はいい塩梅に漬けてゆく　アヤ子

メモどおり漬けても出ない祖母の味　嘉　彦

シロップに漬かったような一人っ子　安　子

浅漬けをさらりとほめる夫婦箸　賢　治

【今月の推せん句】

しば漬にはんなりと聞く京訛り　桑田ゆきの

（温かい情景を彷彿とさせてくれます）

【私の句】

たくあんがないと承知をしない父

糠床に涙落とした跡がある

秀句鑑賞

同人吟　西口いわを

―1月号から

川柳をはじめて二十余年、これと言う一句のないのはまだまだ勉強しなければと、自分自身を戒めています。

さて、秀句鑑賞、私には重い仕事ですが皆様の一心に作られた句、丁寧に読ませて頂きました。どの一句も素晴らしくて困りました。最初の二句は時事吟として頂きました。

喝采に照れるノーベル化学賞

田辺鹿太

日毎テレビに写らない日はないノーベル化学賞の田中さん。いままでの受賞者よりも人気を博している理由など、今更申し上げる事もないようです。雲の上の人ですのになぜか身近に感じています。

望郷の涙隠して生きた葦

徳山みつこ

望郷の二十四年間、あの日の光景は目に焼きついています。この頃はすこし明るくなられたようにお見うけする方々、早くお幸せになって頂きたいと願うのは、全国民の思いだと思います。

欠点もあるが笑った顔がいい

大橋政良

奥様のことでしょうか、欠点があってこそ人間です。笑った顔がいいとは愛の表現にぴったりです。羨ましい限りです。

聖書からハラリと落ちて来た諭吉

舟渡杏花

聖書からはらりとお札が降って来た、きっとイエスキリスト様のお恵みかもしれません。とてもおかしみを感じました。

酒とろり秋の次には冬が来る

岩本笑子

酒は寒くなるほどに味が深くなると言われます。秋の次には熱燗とくるとまた格別、仲間とのコミュニケーションにも楽しさを倍増してくれます。

いつの日か真実にする嘘をつく

居谷真理子

嘘もたまにはいいものです。大きな夢のような嘘に向って走り続けやがて真実にしてしまう。楽しくなって来ます。

銀婚を離婚の勇気なく迎え

加藤茶人

世界の誰よりも憎い奴、そしてある日はこの人でよかったと幸福感にひたる。夫婦ってこの繰り返しのような気がします。勇気がないのではなくて、生きてゆく宿命とでも申しましょうか、どうかおしあわせに。

この世とは椿の花に雪が降る

谷口義

紅のしたたるような椿に雪、すこし酷なようですが、此のため花を一層輝かせ人間の目を引き寄せてくれます。そして堪える美しさを充分に見せてくれます。

夢ばかり語るふたりの観覧車

鶴田遠野

ふたりの観覧車その夢がいつか壊れるかもしれない等、毛頭感じない。夢に向って天に昇っている心地、たのしい一句です。

寸劇があって味噌汁冷めている

宮崎ヒサ子

ちょっとした言葉の行き違いでしょうか、どこの家庭でもよくある場面ですが、寸劇があってとはうまく表現されました。きっとほがらかな奥さまと想像いたします。仲直りにビールで乾杯するとたのしい食卓になることうけあいです。

本日晴天心配ごとは後まわし

門谷　たず子

心配ごとがどうしても胸から去らない日、ふと見上げた空は真っ青。洗濯、お買物と忙しくしている間に、心配ごともなんとなく薄らいで悩んだことが嘘のようになります。

言い訳は止そうよリンゴ丸齧り

小寺　花峯

言い訳も時に必要な時もありますが、でも余りみっともいいものではないようです。リンゴ丸齧り、ぴったりの言葉を見つけられました。

矢印のちょっと意地悪したくなる

平田　実男

矢印の右を左に変えてみる、ちょっとおもしろそう。大事な事態をまねくことを想像しながら。でもあくまで想像だけ……

仁王さんのように黙っていることだ

小島　蘭幸

賛成です、黙していれば火の粉も槍も飛んできません。「キジも鳴かずばうたれまい」そんな諺もあります。

でも事なかれ主義を通すには、自分自身を納得させるのもむずかしい時があります。作者の今の立場ではなおのことと思われます。でも蘭幸さんらしい佳句だと思います。

九九習う子とおさらいのみかん風呂

亀岡　哲子

ご自分の子育て時代を思い出しながら、今は可愛いお孫さんとのほのぼのとしたコミュニケーション。場面が浮かんで来ます。

シュレッダーにかけ羊にも食べさせぬ

都倉　求芽

切りきざんだ書類を羊に食べさせて、最終的にばれる事態が生ずると困る会社、官庁の機密、中には不正に通ずる書類があるかも知れません。

ひとさまのために顔あり髭を剃る

山本　蛙城

じっくりと読ませて頂き、なるほどとうなずけました。顔は自分のものであっても見てもらうのは他人様、美しく装い自分にも他人さまにも、不快感をあたえないよう心がけたいものです。

善人の群れの中では落ち着けぬ

西出　楓楽

「水清ければ魚すまず」など申しますが、善人ばかりでは息切れします。多少の虚偽企み等があってこそ面白いような気がします。

真実を当用漢字では書けぬ

江口　度

えも言われぬユーモアを感じ拍手です。

不況とは別に夜景の豪華版

久保田　千代

そう思います、でも不況だからこそ広告塔を派手にするということもあるかも知れません。大阪梅田の観覧車にたそがれ時に乗ったことがありますが、見事なものでした。

君からの便りのごとく小菊咲く

木村　貴代子

ご主人様が近年お亡くなりになられた作者。生前、丹精を込めて作られていた四季の花、秋には可愛い色とりどりの菊、中でも白い小菊が微笑んで、そして話しかけるように揺れ、花の前で在りし日を彷彿とさせてくれています。

棚ぼたの夢を今年は見ぬように

矢倉　五月

生きていれば人間誰しも棚ぼたの夢は見ます。この不況時、せめて宝くじでもと庶民の夢は広がります。束の間の夢、またたのしからずやです。

先入観捨てると道が広くなる

松下　比ろ志

先入観があると決断力も鈍り、どうどう巡りばかりしてしまいます。改めてゼロから出発してみると自由自在、こんな生き方もあったのかと驚くばかりです。

—水煙抄

秀句鑑賞

—1月号から

松本文子

お見舞いに真心こめて嘘を言う

井本清山

「必ず治りますとも。桜の花を一緒に見ましょうよ」真心こめて言うのである。嘘をつくしかないのだ。そして帰り道にはひとりで泣く。

親切に出会い一礼したくなる

亀井皎月

一寸した親切が身にこたえる。歳なのだろうか。否、あまりに殺伐とした世の中だから人情がこんなにも嬉しいのである。

落葉はらはらまた逢える日のありやなし

黒田茂代

人は別れに始まるとか。それゆえ逢うもの全て愛おしい。浮世はそれなりに味がある。

どうせならみんなに好きと言わせよう

森川あらた

そうなのだ。どうせなら私らしく輝いて凛と生きよう。一度きりの華の命だから。

どんな明日あるかこの眼で見るとする

近藤道子

私を不幸にした奴はどんな目に遭うのか。輪廻の世界をこの眼で見届けたい。

疑問符を持った孤独を飼い馴らす

辻内次根

まず疑ってかかる。へそ曲がりと言われようと妥協はしない。それを正当化するゆえに孤独な我が道を辿るのだ。ひとりは潔い。

反省があんまり過ぎてノイローゼ

田岡九好

これぞ川柳だ。あっけらかんと我が身を曝す。律儀で真面目な者が罹りやすい、と言われるノイローゼなんかそくらえ。

電磁波が全部見えたら恐ろしい

秋元和可

とても恐ろしい。目が眩み傷だらけになるだろう。ニュートリノぐらいな美しさならいい。

戦争に経済学が通じない

湊修水

平和に勝る福祉はない。いけないいけないと叫びながら知らぬ間にレールに乗せられてしまう。インフレもデフレもこりごりだ。

解雇から始まる鬱の雨つづき

森下一知

まこと世の中真っ暗闇。二十一世紀のこの雨が止むのは何時だろう。善人を苦しめるな。

理不尽に首曲げられて生花展

安土理恵

何流か知らぬが花いじめもいい加減にして。

出る幕でないから聞かぬふりをする

前坂なお美

こういう人生観がないとこの世は渡れない。お節介症候群が多いから。

死ぬという大事なことがまだ残り

宮本末子

何という重い句。はっと姿勢を正す。死ぬことを忘れてはならぬ。恐れてもならぬ。

落ち込めば友が一杯提げてくる

若松雅枝

幾つになっても友はいい。いい友を持つ倖せを感ずるのはこんな時だ。落ち込んでいると飲む気にもならないが一緒だと美味しい。

人生はすったもんだの綱渡り

大西文次

好きになった嫌いになった、病気だの別れだの、子供が孫がと忙しい。その度に綱渡りをしているような…これが人生だ。

心から笑える今日は元気です

細田裕子

人間が地球の機嫌悪くする

毛利幸

エッセー

長かった一日

桜井千秀

喧嘩の糸口はほん些細なこと、姉の足の先がちょっと触れた程度。それを「痛いなあー」大袈裟にいちゃもんつける弟。それを待ってましたとばかり遣り返す姉。孫二人のいつものこのパターンへ知らん顔を決め込んでいる私。一人っ子育ちで姉弟喧嘩が面白くもあり、遠慮会釈なくやり合えるのが羨ましい。

所が今朝は始めたばかりで急に肩を寄せ合いテレビの前に釘付け。「あっこれ社長さんだー」「そうだ、そうだ。これお父さんだー お祖母ちゃんお父さんがテレビに」けたたましい声にテレビの画面「戦後最大の大型倒産」。それは正しく娘婿の勤めている会社名。そして見覚えのある大柄な社長を取り囲む報道のカメラ。その脇をくぐり抜けるように、駆け回っているのは紛れもなく小柄な娘婿。転げるように表に飛び出した私は、近所の奥さん方と世間話の娘に「帰っておいでー」と手招き「なんなのよ、忙しい人だわ」と不承気味。だが、指差すテレビに目をやった途端に「ええ、どう言うわけ、どうなったのこれ」しきりに意味不明なことを連発。「そんなことはこっちが聞きたいわよ。何の前触れもないと思えないし」突然で私も無情な返事である。

職場の話は一切家ではしないと予てから聞かされては居たものの、事ここに至ってはそれでは済まされぬ。香港駐在四年家族ぐるみで無事勤めて来たのが一年前、内地勤務になれば課長さんの椅子が待っていると楽しんでいた娘から、一向にそんな話もなくこちらから聞くのも憚っていた矢先の事である。

一瞬泣き出しそうな母に孫達も「お父さんの会社どうなるの、なくなっちゃうの」口々に不安そう。テレビは容赦なく同じようなシーンを繰り返すばかり。やがて頭痛がすると娘は二階へ。私はテレビを切って「さあさあ、先ず腹ごしらえ、腹ごしらえ」と半ばおどけつつ、この子等を促して近くの中華料理店へ。今はこうするより他になす術がないと思えた。

午後には入院中の夫からも気遣いの電話があったが返事のしようもなく、夕方まだ続いているはずの大型倒産へスイッチ。だがそこに繰り広げられていたのは火の海、いいえ火の山。日航機墜落の生々しいシーンばかりで驚きの連続。その時突然孫娘が、お父さんがこの日航で帰る約束だったと言う。「何を馬鹿な。お父さん朝からテレビに出っ放しじゃない」と私。「そうよ、これに乗る約束だったね」仁王立ちになった娘は狂ったように電話器。私はそれを取り上げようと揉み合う、「あんた冷静になりなさい。こんな時電話するなんて非常識よ」だが時既に遅し。電話は繋がった「声聞いた、聞こえた」と涙声である。娘婿は「馬鹿もの」と怒鳴ったとのこと。それは当然。盆の帰省に先に来ている妻子と約束は守る父親でも、時と場合によりけり。それが分からないほどいろんな事があり過ぎた娘一家。非常識と叱った私にどれだけの平常心が保てていたのだろうか。

あれからもう十七年経った。その後娘婿は逆境にもめげず「最も尊敬出来る父親」と孫達は言う。日航機の御巣鷹の尾根へ今も続く遺族の方々の嘆き。「上を向いて歩こう」の坂本九ちゃんの歌声を聞く度、あの夜の電話を否定する娘を私は許せる。「夫の会社のあんな大切な時に、電話するほど私は馬鹿じゃない」…と。でも人間は往々にして馬鹿になるのだ。私はそんな馬鹿な娘を育てたことを恥ずかしいとは思ってはいない。

野田素身郎氏を偲ぶ

田中正坊

野田素身郎（本名・純男）さんは、旧冬十二月二十四日未明、肝臓癌のため、七十三歳で死去された。法名は素覚智純居士。

私は素身郎さんとは、一度だけお会いしたことがある。平成の初めごろだったと思うが、山陰で開かれる川柳大会に参加するための列車に乗り合わせて名刺を交換したが、私と同じ戦中派とお見受けしたので、雑談の中で軍歴をおたずねした。旧制商業学校に在学中、七つ釦の予科練（海軍飛行予科練習生）を志願して最年少の飛行兵となったが、もう少し戦争が長引けば出撃していたという。

訃報を聞いて直ちに追悼文の執筆を手配したが、年末という時節柄、地元に人を得られなかったので、文字どおり「一期一会」の縁から編集部が取材した事実にもとづいて、私がペンをとった次第である。

さて復員した素身郎さんは、岡山県庁に勤めて平成元年に退職されたが、その間、結婚して二人の子女に恵まれ、長男は呉市に在住し、長女は管理栄養士として近くに住み、双方に孫がある。在職中に肺と脳に腫瘍が発見されて完治したということだが、退職後、右半身が不自由となり、リハビリを続けていたところ、最近、排尿が悪くなり、黄疸も出ていることに気付いて入った病院で、末期の肝臓癌と告知されたという。

しかし、本誌一月号の「自選集」に、

老いの兆しか体がだるい

などが掲載されており、右手が利かなくなってから、奥様が代筆しようと言っても、自筆で句箋を書いており、川柳だけを楽しみとし、最後の最後まで作句を続けた。

柳歴は古く、麻生路郎に師事し、不朽洞会員にも名をつらねており、『川柳塔』になってからも同人・理事として活動し、昭和四十五年・同五十五年・同五十六年と三回にわたって路郎賞の準優秀賞を受賞している。

冷戦中なのに仲人頼まれる
秋の蚊よお前これからどうする気
上役と打ち出してから棋力落ち

実直温厚な人柄は、一見しただけでもうなずけるが、詳しい経歴・近況は知らぬまま、投句を欠かさなかった「自選集」の近詠を抜粋して、ありし日の故人を偲びたい。

〈酒の句〉

検診の結果分かって酒にする
長男のペースにのって酔いつぶれ
これ以上飲めば毒よとママは注ぎ

〈妻の句〉

忙しさ妻楽しんでいるみたい
妻よ眠れすっかり疲れとれるまで
大晦日今年も苦しかったなあ妻よ
梅の咲く頃に妻から腕組みに

〈病の句〉

薬飲むための食事を三度とる
少しだけ心配がありレントゲン
あのことがあるから怖い血の検査
身障者にも等級があり僕四級
スミローの機能衰えまた転び

権代康女さん　さようなら

小西雄々

権代康女さん、貴女は何故こんなことになってしまったのですか。「天は情けも加護も無いのか」と、叫びたい気持ちです。

十二月二十六日午後四時過ぎ、ご家族から「今日の午前十時五十二分、母が死亡しました」と、訃報を聞いた時には、驚きで一瞬胸の詰る思いのため、返す言葉もしばらく出ない状態でした。

康女さんと私がはじめて知り合ったのは、約四十数年前の昭和三十年一月で、米子市に松露川柳会が発足した時でした。まだ十代後半の乙女で川柳会のアイドル的存在でした。

毎月の例会は皆勤で、柳誌『川柳松露』の投句も欠かさず熱心に作句され、柳誌も暇を見つけては読み、勉強熱心でした。

三十年四月、麻生路郎先生をお迎えして、松露川柳会創立記念大会を開催したときには、路郎先生に、康女さんをご紹介しました。

二十五歳で結婚され、二人の子供さんに恵まれて暫く川柳は中断されていました。当時農業と共に葉たばこの栽培に専念されていましたが、子供さんに一時も目を離せず、たばこ作りには苦労したと述懐されていました。しかし、子供さんが成長されると、また川柳が蘇り再開されました。

平成三年八月には、鳥取県川柳界で最高の栄誉である、茗人賞準賞を獲得されました。

赤ばかりちぴたクレヨン花が好き

の句で、子供さんが赤い花を書いているのを見て、直感的にできた句だと聞いています。

良妻賢母型の康女さんの句には、幸福な家庭生活の中から、家族を詠んだ句が多い。

まず、ご両親には

亡父の顔思い出させる帽子あり

苦労した母の背中が丸くなり

ご主人には

残業の夫へねぎらう言葉よる

そして、子供さんには

子供等の澄んだ瞳に嘘はない

親が見た夢を子供にたくしてる

さらに、農業を題材にした句では

大根を洗い心のしみが抜け

平成十年二月川柳塔社の同人となられ、作品は光りを増し輝いていました。

そして、二ヶ月後には待望の川柳句集『あゆみ』を発刊されました。日本海新聞に句集発刊について紹介が出ると、これを求める人が殺到し、手もとには康女さんの持つ一冊しか残らなかったそうです。その内容の素晴らしさが、人から人へと伝わった結果だったようです。

今年から、たばこ作りから葱作りに仕事を変えたとのことでしたが、毎朝五時にはJAの市場に出荷するので忙しく「寝る時間が無いほどです」と言われていました。

平成15年の「みぞくち川柳会」の新年句会は、創立十五周年の節目をクリアした記念に、盛大に開催する予定でしたので、康女さんは大変楽しみに喜んでおられたのに、突然浄土へ旅立たれ残念で、後ろ髪を引かれる思いです。

慈保恵康大姉　享年六十七歳

康女さんの残された句は永遠に光り輝くことでしょう。安らかにお眠り下さい。合掌

本社　一月句会

一月七日（火）午後一時
アウィーナ大阪

今年初の句会は、寒気の中113名の出席により開催された。

年頭の句会にふさわしくお話は名誉主幹の橘高薫風氏。「川柳は人間陶冶の詩である」と言われた路郎先生の精神について語る。

自分の見てきた路郎先生の後姿を話すことによって、後輩諸氏にその精神を受け継いで頂きたいと話す。

宮本武蔵の遺した「独行道」の中に「身を浅く思い世を深く思う」という言葉があり、路郎の川柳観と相通ずるものがある。

自分の感動を一句に込めて創作、明鏡止水の心境で対象を見、言葉を選び、表現技術を研究した路郎師から学んでほしいと例句をあげながら、熱っぽく語った30分であった。

昨年度月間賞杯永久保持者の谷口義さんにカップが贈呈された。

初出席に高槻市の田中初恵さんを迎える。

月間賞は田中章子さん（神戸市）に輝く。

（司会―朝子）（記名―月子・玄也）
（受付―朋月・舞夢）（清記―尚士）

席題「夢」　太田扶美代選

宝船こぼれた夢を拾おうか　房子
大見得で最後の夢を締めくくる　民
夢心地にさせて支払い目をむかす　甚一
我が子かてノーベル賞がとれるかも　舞夢
フセインとブッシュ握手の夢を見る　利昭
春の旅夢いっぱいの時刻表　泰子
夢の中何故かいつでも追われてる　玄也
すばらしい夢を見てたと知る別れ　鐘造
七日粥そろそろ夢のさめるころ　修
亡妻が夢に来ぬのが不思議なり　耕治
いい夢を見てるか顔が笑ってる　紫香
夢のある町だいろんな店がある　紫香
夢のあるキミよモリモリ食べ給え　(志)千代
子煩悩形にならぬ夢を追う　澄子
フリーターながら店持つ夢を持ち　伽羅
去年から引きずっている暗い夢　たつお
正夢であればと思う歯を磨く　雅文
埴輪の目遠い昔の夢を見る　義
どうせなら夢はでっかい方がいい　鹿太
月旅行特急券で並ぶ夢　正雄
アフガンに羊の群れる夢を見る　たもつ
老いの坂夢一つ捨て一つ捨て　楓楽
悪夢まださめないままの拉致家族　正坊
群羊の一頭ずつが夢を抱く　正坊
ティーカップ二つ未来に続く夢　柳伸
六十路坂も一度夢を確かめる　賢子
年取れば取るほどデカイ夢をもつ　深雪
初夢の中でもウソをついている　天笑
万華鏡のぞいてごらん夢がある　千枝子
定年後夢工房のバクになる　恵勇
咲きそうな蕾にわたしの夢がある　理恵
ひとりになった父にピエロの夢がある　元紀
佳
夢語る酒は三人ほどがよい　薫風
世界中平和でバラが咲きました　英子
夢に見たとこに小銭が落ちている　小雪
とんかちをとんとん夢を建てている　茜
僕の夢箇条書して羊年　かすみ
人
夢は今視野を真っ赤に染めて発つ　森子
地
二十年夢見つづけた子が還る　倫子
天
羊雲新たな夢を託します　ふりこ
軸
二〇〇三年さあ始めよう夢芝居

兼題「テロ」　平松かすみ選

テロ対テロそんな理屈は通らない　あやめ
テロの魂は大和魂かも知れぬ　螢
テロや核悩みたくない羊年　舞夢
あれ以来保険を増やすパスポート　楓楽
テロと言う始末に負えぬごんたくれ　初恵
二人ならテロも地震も怖くない　英子
テロ地震以後宝石を抱いて寝る　柳伸
人間に山荒らされたサルのテロ　昭

女房のテロに毎日うろたえる　天笑
テロ恐怖やがて地球を灰にする　鐘造
テロあかん戦争やったらかまへんか　弘風
ゴミの日のカラスはこわいテロ集団　俶子
テロリスト怖い哲学持っている　重人
大国に隠密送るアルカイダ　柳弘
すぐテロと結んでしまう不審物　茜
洞窟にゴキブリ団子入れようか
毒矢吹く仮面のテロが忍ぶ都市　泰子
ロボットにされてしまったテロリスト　耕治
信仰がバックアップのテロ組織　公誠
絨毯の下は地雷と思し召せ　三男
潜んでるテロは何処ぞ世界地図　薫風
神よりも親は許さぬ自爆テロ　憲太郎
血の海を賛美しているテロ自爆　哲男
テロに拉致春が遠退く世界地図　千枝子
テロリストまだ捕まらず冬深む　正雄
安全なとこで操るテロのボス　扶美代
先頭を走るとテロの的になる　千枝子
人類に癌もエイズもテロリスト　諷云児
テロリストどこかで釦かけ違い　楓楽
テロのようにひそんでいます癌細胞　澄子
テロニュース父は黙って雪をかく　希久子
安全なところで笑うテロリスト　一風
　　佳　諷云児
あれはもう地球のテロだ震災忌　(志)千代
テロ等を起す教育していない　舞夢
アルカイダくぐり抜けての旅がらす　文
風のテロものともせずにばら開く　いわゑ

テロリスト生んで地球が病みはじめ　扶美代
　　人　美代子
神様の死角が好きなテロの牙
　　地
ブレーキを踏んでもテロは止まらない　東雲
　　天
ハリーポッター　テロを魔法で消しとくれ　朝子
　　軸
神妙に閻魔の前でテロリスト

兼題「鍵」　志田　千代選

わたしの鍵夫浄土へ持ったまま　きらり
献身の笑顔に鍵があるらしい　ダン吉
生き方の鍵父の背に母の背に　洋
頑なな心やんわり母の鍵　俶子
お隣も同じところに鍵隠し　義
家族中の癖を知ってる鍵の穴　りつえ
妥協点下げるとすっと開いた鍵　楓楽
鍵握る男の顔にあるゆとり　玄也
碁敵がキーポイントを衝いてくる　倫子
カギは要らぬ金庫は丸ごと盗む　美代子
独身で鍵は一つで足りる僕　紫香
良人にも見せない鍵を持っている　泰子
あの人の前では鍵はしめません　深雪
頼んだら三秒で開く鍵を掛け　桃花
青テントやっぱり鍵を持って出る　昭子
別々の鍵持って出る冷戦中　英子
同居離婚わたしの部屋に鍵かける　朋月
鍵開けて関白亭主お出迎え　かすみ

戸締まりを忘れアララで済ます仲　(矢)五月
鍵かけたドアの向こうの賑やかさ　篤子
鍵かけてだあれも来るな来てほしい　たもつ
鍵ひとつ頼りに女大の字に　房子
ゼニやない女心を解く鍵は　弘風
好きな人に合鍵持たされたウフフ　賢子
鍵握る女がどうも気が弱い　達子
合鍵に赤いリボンをつけておく　義子
スペアのない鍵だから失くせない　泰子
合鍵を返してからの太りよう　房子
門を外す合鍵孫と言う　哲男
合鍵をあげたい人が一人いる　初恵
夢ならばたんと見ましたスペアキー　正坊
こっそりとスペアキーが舞い戻る　ふりこ
幸せになるはずでしたスペアキー　扶美代
　　佳
合鍵を誰にあげたかわからない　諷云児
妻が持つ金庫の鍵を壊したい　弘風
おとなりの鍵っ子今日も無事帰還　章子
鍵かけるのをじっと見ている人がある　シマ子
封印の部屋を激しく恋う鍵よ　森子
　　人
キーマンと判ってからの車間距離　恵勇
　　地
鍵あける音が渇いている独り　重人
　　天
どの鍵も合わなくなって放浪記　正雄
　　軸
あんな子こんな子育ったキーは母にある

兼題「大　切」　西口いわゑ選

大切な自分時々抱きしめる　たもつ
大切にしてと路傍の一円貨　俶子
大切な人よローンが済むまでは　耕治
大切な人だお酒は取り上げる　(矢)五月
夫より大切な猫飼ってます　利昭
大切な君と訣れた冬木立ち　憲太郎
大切にされて病人不安がる　初恵
私だけ大切にする言うたのに　修
大切な物夫の留守に運び出す　賢子
大切なお方に粗食すすめてる　義子
夫婦にも大事にしたいルールあり　俶子
大切なことは目を見て話します　セツ子
大切な所が消えた古日記　欣子
大切だから銀行に預けない　泰子
大切な極楽浄土へ行く法話　はじめ
大切にしようスペアーない命　諷云児
大切なハリーポッター借りて読む　順子
大切にし過ぎて娘バラサイト　初恵
大切に保存あなたの誓約書　雅文
大切なハートを盗む憎い人　正坊
一つしかない命です大切に　森子
情熱の限りを生きた日を飾る　鹿太
大切なものは近くて見えにくい　みつ子
大切な人の涙は真珠色　篤子
ときめきを大切にして生きている　アキ
大切な人に意地悪してしまう　三郎
大切にされて野生が消えていき　元紀
木守柿を支える枝は祖母思い　瑠美子
大切な結び目力では解けぬ　昭
ラップして大事な心しまい込む　雅文
大切な大和言葉が乱される　薫風
笑うべし酸素ボンベといいコンビ　佳
年金があり大切なおばあちゃん　楓楽
へその緒がDNAの役に立ち　たつお
大切な今日冷凍保存しておこう　希久子
その時のためにトカゲにある尻尾　(志)千代
ストーリーのない日々だから大切に　きらり
美しいままに折りたたんだあの日　森子
命残照大切に生く今日あした　義子
大切なことはとにかく生きること　賢子
大切な人を遠くで見ています　軸

兼題「思　う」　前　たもつ選

思うこと叶いすぎても恐いねえ　あやめ
投句してから中八だったなと思う　螢
作業服思いがけないノーベル賞　日出子
親子の思い通じる時がきっとくる　英子
母思うこころ拉致後のひとみさん　笛生
しかしながら年々昭和遠くなる　比ろ志
亡き母に良く似た足の爪を切る　小雪
銀行の利息を思うばからしさ　英子
日記滞留思い出せない三日前　正雄
税金を払わんとこか思ってる　泰子
わたくしをどうお思いと迫られる　惠勇
ふと思う独りになった時のこと　千里
思いなおして大きい声で笑ろてみる　シマ子
茜雲強行軍をふと思う　扶美代
矢が尽きて思わぬ道が見えてくる　楓楽
こんな時亡夫居たらと思う時　紫香
夫大事にせねばと思う通夜帰り　俶子
思うことあってこの場は黙ってる　いわゑ
思う人あって天気が気にかかる　真理子
思い切りの悪さ一歩が踏み出せぬ　能子
大切と思うあなたがそばにいる　誠
言い訳はやめろと思う崖っぷち　誠
ささやかな善意嬉しく思う歳　甚一
ウインクで思いが届く人がいる　りつえ
思う存分生きて迷惑かけました　義
思うてる証に口づけして欲しい　奮水
ふる里を思うハートは丸くなる　朝子
思うだけで実行できぬ情けなさ　深雪
よいことを思えば良い方へ転ぶ　希久子
嫌いだと思う相手もそう思う　楓楽
淋しいと思うと土鈴側にある　章久
いたずらはすぐ思いつく生まれつき　天笑
佳
遊ぼうと思っているが金がない　舞夢
思い切りジャンプのできた日の若さ　隆盛
百の思いとどまる人も行く人も　真理子
気休めの嘘と思うとありがとう　正雄

思うことずけずけ言える友が居る　三男
人
思いやり込めて涙の平手打ち　一風
地
鶴彬に思うことありペンを取る　ダン吉
天
片言の思いの丈を聞いてやる　小雪
軸
もの思い顎がだんだん長くなる

兼題「三が日」　河内　天笑選

三が日あけてわたしのお正月　篤子
新しい顔も増えてた三が日　昭子
大小の靴が乱れて三が日　いわゑ
肉親の絆はぬくし三が日　泰子
潮引いて大皿小皿天こ盛り　小雪
帰省して雪に埋もれた三が日　美代子
三が日猫も私も食うて寝る　一風
三が日金魚の餌は忘れられ　たず子
三が日娘に戻る里の家　りつえ
三が日心の煤を払ってる　東雲
寝正月させてはくれぬ人が来る　菜月
三姉妹揃うた旅の三が日　なぎさ
三が日ほぼ放電をして終わる　哲男
だらだらと賀状の追加三が日　達子
家中がトドと化してた三が日　倫子
初詣で迷惑そうに鳩が舞う　奮水
民宿のおばちゃんとなる三が日　かりん
胃と肝臓へとへとになる三が日　楓楽
ばらばらの家族が揃う三が日　諷云児
釣り馬鹿は舟で宴の三が日　一風
湯の花を入れて温泉三が日　春
三が日がっぽり稼ぐ神ほとけ　公誠
神域に酒の匂いの三が日　誠
神ほとけどちらも拝む三が日　朋月
体重とボケが気になる三が日　鹿太
三が日後戻りしたダイエット　たつお
Lサイズきつくなってる三が日　ふりこ
三が日だけはと甘くなるカルテ　たつお
戒名を考えていた三が日　義
遺言状書き上げました三が日　たもつ
三が日規則正しく飲むくすり　隆盛
けんたいにお酒が呑めた三が日　正坊
佳
久し振り妻と一緒の三が日　鐘造
三三五五身内が襲う三が日　理恵
三が日過ぎてカレーに辿りつく　ダン吉
三が日夜と昼とがずれてくる　桃花
三が日ふだん通りの老夫婦　希久子
人
一匹と一人に寒い三が日　森子
地
極楽へ三歩近づく三が日　公誠
天
まばたきをしているうちに三が日　田中章子
軸
ピーポーを毎日聞いた三が日

柳壇

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

サークル檸檬（前月分）西出　楓案報

十一桁いっそ刺青しましょうか　楓　楽
菊を着た武者人形に惚れ申す　いわゑ
数は増えたが獅子身中の虫もいる　房　子
滞在日数のびても心癒やされぬ　たもつ
不器用な剪定　松は大慌て　哲　夫
ゼロひとつ　ずっと間違え翔んでいる　義　子
人数の足りぬ時だけ誘われる　希久子
言い訳の度に仮面が増えてくる　あずき
甥の数しずしず柩すすみます　保　子
伴走の月日を偲ぶ万灯会　澄　子
住み慣れてきたんだ風も暖かい　千　代
品数を揃えて嫁の味自慢　光　久
定年後　引き算ばかりして生きる　正　坊
一＋一が五になることもある出合い　みつ子
プライドを捨てた数だけ丸くなる　智恵子

岸和田川柳会　長谷川呂万報

調子者立場忘れて喋り過ぎ　珠　子
その調子孫の歩みに手をたたく　盛　之
胃の調子狂う二の膳三の膳　蛙　城
口下手がマイク握ると調子づく　狸　村
まだ続きありそう妻の愚痴を聞く　武
いい笑顔貰って続くボランティア　う　べ
なん代も続く老舗にある家訓　照　女
平社員俺に続けと田中さん　穣　一
長電話続きは明日とまたかける　甚　一
頑に水にこだわる手打そば　俶　子
肥後守孫と作った竹トンボ　守
手作りに自ら出るお人柄　一　脩
手作りのパンの証拠に黴が生え　東　吉
変人を通し頑固に生きて古稀　洋
生涯を通し性善説信じ　呂　万
我を通し今日も手酌の席にいる　ダン吉
俳優の名前忘れてぼけはじめ　昭　二
初孫の名前カク数やかましい　東　雲
親戚が寄ると母さん名が増える　英　雄
珍名さんそこの島ではそればかり　笑　司
命名へ全霊尽くす親心　仁　緑
夫婦別姓妻に肩書つく名刺　洞　庵
豪邸の表札見入る貧乏性　弘　子
画数で幸不幸だという名前　苑　子
新婚のチャンからオイに名前変え　路　子
挨拶にあなたどなたと名が出ない　さよ子

かわはら川柳会（前月分）上田　俊路報

駅の中出あい別れの夢ドラマ　登　生
汽車好きの孫にせがまれ駅めぐり　聰
駅弁で旅の思い出よみがえる　一　薫
孫送りさみしさだけが残る駅　かず恵
小旗波駅は涙を覚えてる　寿　子
雨となり午後は楽しい農休み　道　子
午後五時のチャイムと紛う焼芋屋　悦　子
午後の陽もやわらぎはずむ立ち話　泰　良
明日の午後帰る息子に思いはせ　余吏子
義理果たし見上げる午後の空の蒼　俊　路

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

難問へ飛車はひとまず思案する　かつ子
アピールにここでひとまず咳ばらい　恵美子
ひとまずはおいて作戦練り直す　聖　子
出口なくひとまず酒でも飲んでから　好　栄
亡兄の雄姿がよぎる返り咲き　民　子
客が来て喧嘩ひとまずお預けに　ちよえ
背番号徴兵制へヤジロベエ　はるみ
定位置にひとまずさがって風の向き　博　利
終章は独りで歩く道を選る　清　泉
驚かぬこころになってきた怖さ　白　汀

ローズ川柳会　山崎　君子報

老いていまおだてに乗って日々楽してる　ミサヲ
朝露でいちごも真っ赤人待ち顔　キク子
精神年齢子供のままで八十歳　藍
やんごとなき御方も無情露と消ゆ　哲　子
からだによいあれやこれやが食べきれず　トミエ
七五三可愛い孫の手を引いて　貴代子
露の世のしばしの縁いとおしむ　まさお
モンゴルの空までつづけ日本晴れ

ご無沙汰を埋めて互いの肩を抱く　澄子
雑草のプライド手入れなどいらぬ　いわゑ
蝉合掌露に飾られ弥陀のもと　武庫坊
晩秋や炭火の恋し掌　年代
球根植えて春の匂いを待っている　君子
気分一新黄色のケトル買うとする　義子
愛の軌跡たずねる勇気とてもない　孝一
ねぎ坊主露光らせて気負い立つ　雅子

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

ポケットの底に不義理が残ってた　求芽
ポケットに昨日の余韻まだ残る　紫香
エアポケットふとこれまでを振り返る　澄子
目頭をおさえ友への弔辞読む　義一
目頭をアキレス腱が衝いてくる　重人
悔しさをその目頭にみなぎらす　砂輝守
人形の目頭にある筆の冴え　スミ子
目頭で男は涙塞き止める　千枝子
目頭を押さえて過去は振り向かず　稲子
ぬくぬくと親の遺産で暮らしてる　泰雄
七光りぬくぬく座る椅子がある　庸佑
ぬくぬくのたこ焼さげて父の靴　孝一
風雪に鉄の威厳を見せる橋　茂
鉄分の不足膝から苦情来る　武史
鉄と紙どっちも大事な資源だぞ　柳宏子
鉄の爪研いで嫉妬の夜を明かす　晴美
鉄の日も綿の日もあり朝の靴　満寿蔵
悪女ほど魅力を醸し出す不思議　活恵
五十年好きでもないが続いてる　治三郎
単純に丸い地球に居る不思議　無禄
政治家ばかり勲一等を貰う不思議　光穂
チチンプイ痛みがとれるから不思議　萬的
表彰の真っ赤なバラが面はゆい　高栄
老いらくも夕陽も燃えて美しい　比ろ志
煮崩れのせぬようきつくする絆　百合子
子等巣立ちゆうゆうたたむ母の傘　〆女
塞翁が馬を暫く飼っておく　しげお
通り過ぎました風もあなたもあの人も　礫
うつし世のルールが重い女坂　きよえ
つまずいて節目の風が身にしみる　諷云児

川柳塔みぞぐち　小西　雄々報

いい笑顔パチパチ撮って七五三　千代美
丸い顔親に貰った宝物　公美枝
合せ鏡の中に見たのは亡母の顔　鈴枝
拉致地獄耐えて年月語る顔　豊枝
花回廊ドーム輝く県の顔　久子
個性ある顔だ不足を言うでない　故康女
美しく老いたい笑顔絶やさない　智恵子
いい友で心許せる顔馴染み　正光
義理たてる顔へ本音が出てこない　静江
青鬼の顔も紅葉に染まる町　和代
遺伝子にどうにもならぬ顔をもつ　雄々

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

ストレスをぶつける人が傍に居る　ひかり
遠く住み声の便りが生きる糧　八重子
甘口の家には苦い罠がある　賢
捨て切れぬ欲が迷いを多くする　勝
生きるとは難儀な事の繰返し　かおり
疑わぬ自販機すぐに騙される　あきら
生き残る嬉しさ壊す後遺症　輝夫
ローカル線お遍路だけが乗っている　吟笑
新雪に過去を消し去る母の愛　いさむ
急速の寒さ熱燗舌鼓　放任
赤ちゃんの澄んだ瞳は美しい　治延
空白が今年も続く日記帳　貞月
おめかしのカラオケ大会興に乗る　寿々女
神様の死角で悪の芽が育ち　坊太郎
留守番で仏の水も替えて置く　文仙
人生の旅路山坂まだ続く　よしみ
人情が溢れる島の遍路道　くに子
信号機ついて村中大さわぎ　はつ恵

佳句地十選（1月号から）

上田　俊路

留守番の食事と酒のうまいこと　孝一
決断を男に迫る曲がり角　とみを
耕せば土の匂いの風が好き　登美代
借金があるから明日も頑張れる　史子
人間の数だけ生きる道がある　大輪
千秋の思いで耐える拉致家族　順子
筋金が取れて渋柿甘くなる　知恵子
鉛筆になっても冴える木の匂い　一壺
人間が住めば畳が息をする　芳光
鉛筆が持てる間は句である　完司

東大阪市川柳同好会　森下　愛論報

道草の好きな雀が屋根にいる　章久
雪国の屋根から知恵がこぼれてる　太郎
揺れ惑うこころを抱いて女なり　朝子
世代交代揺れて枯れ葉が地に還る　雅文
木登りの下手なあんたに惚れました　度
あんただけにと教えた噂走りだす　とみを
大切な人の記憶だけは消えぬ　弥生
青春の記憶に紙ヒコーキが舞う　しげお
なるほどと感心しては騙される　柳宏子
種明かしなるほどうまく出来ている　萬的
なるほどと素直に言えぬ天邪鬼　柳弘
指圧師の右手は磁気になっている　元紀
少年の両手確かに翼だな　湖風
生きてゆくために時々嘘をつく　信治
相槍を打って身を引くことにする　三重子
翔ぶチャンス炊事しながら待つ私　美弥子
孫出来て嫁と仲良くなるチャンス　シマ子
口火切るチャンス逃さぬ瞳の動き　愛論

竹原川柳会　時広　一路報

蔵書印父の背筋のごとくあり　蘭幸
本離れご時世などと淋しいね　房子
おもしろいこと言う絵本のような人　千代美
ヒロインのつもりになって本を読む　一枝
本人の口から言えぬのが男　蝸牛
秋夜長本よりゲームソフトなり　笹舟
買った本全部読んだら凄かろう　節夫
菊日和布団を干して柿をむく　敬子
管理され電照菊になりました　民恵
エゴの眼を菊の香りに洗われる　淑子
大輪の菊を咲かせた父の自負　栄恵
二人で歩く土堤まで歩く菊日和　力
寒菊の赤は血の色母の彩　厚子
墓参り僕の咲かせた菊を活け　夏喜
紅葉も恋の色香をほろほろと　孝枝
祭太鼓セピア色なる思い出よ　笑子
温かいシチュー恋しくなる家路　史子
三秒で眠る特技をもっている　千枝
同窓会の世話役受けて弾む秋　汎美
ちょっと呆けてかわいさのある姑よ　比呂子
故郷へ翼が欲しい拉致家族　万年
少年の翼を抱いた七つの海　幸子
あれほどの羽もすべなし檻の鷲　不朽
母に逢う翼がほしいお月さま　半覚
翼たたんでからの生きかた考える　静風
飛び魚の翼に乗ってみたくなり　菁居
チャンスには強い翼が一つある　正宏
飛べぬ翼を神に貰っていた駝鳥　一路

川柳塔唐津支部　久保　正剣報

胃袋のリハビリ用の猪口求め　兵八郎
半額の売場に立っているわたし　實
臍出しの胸が眩しいチアガール　輝夫
寒気より冷たい顔の拉致の国　勝視
フリーエージェント金が目当でない素振り　水笑
仕事より疲れますのよ孫の守り　高明
三食を済ませ暦に引く斜線　晴翠
此処まで来れば駄句も名句も同じもの　虹汀
週刊誌世間をなめたわけじゃない　四郎
作業衣に希望持たせたノーベル賞　正剣

川柳大阪　高木　信酔報

幸せを計る物差し見つからぬ　潔
塗らん方が素顔美人で好かれる娘　章久
大大阪を見下ろして飲む大ジョッキ　春蘭
あかんものあかんと言える子に育ち　笑風
高齢化のびた命を使い分け　楽子
まとまらぬ話うどんが伸びている　秋雄
道しるべ背中で教えた父の愛　喜楽
もうあかんあかんと腰はすえたまま　柳宏子
新しいいのちが満ちて来る神秘　國治
道徳がにらみを利かし世を守り　兵庫
伸びる毛もあり人並みに理髪店　利昭
湯気拭けば外は神秘な渓谷美　宏
神秘性構わず進むサイエンス　智子
道草の道を知らない塾通い　鉄心
豊作の米は日本の宝です　美花
クローン体の神秘に錠をかけ　川童
伸びたら結んで使うパンツ紐　照月
ただ酒は飲むなのびのび生きられる　一歩
先輩に一すじの道教えられ　敏
背伸びして生きるの止そう肩が凝る　金太
三叉路で男はいつも迷ってる　青道
地獄でも行く道連れがいてくれる　重人
送別会ありがとうがでる影の人　功

正直の心を伸ばす日を重ね　洛酔
グラタンと味噌汁仲よし嫁姑　柳弘
凛としてコスモス揺れる百万本　ひろゑ
八起き目の祝杯妻の目に涙　民子
車椅子やさしい道がいいのにね　芳香
人情をいっぱいもらった回り道　まつお
褌が伸びてるような事を言い　信酔

打吹川柳会　大森孝恵報

うっかりと婚期逃がして追っかける　季芳
戦闘の騎士になろうか雪が降る　和歌子
うっかりと名前間違え冷やかされ　芙美子
御仏前うっかりお金入れ忘れ　禎元
途中下車うっかり鞄置いてきた　一夫
うっかりと褒めたら続く長談義　順子
政界は○派×派とややこしい　和子
グループに船頭多く唾が飛ぶ　しろう
鶴の群落穂を拾いおじぎする　貴恵
田中さん庶民が産んだ英雄だ　紀美恵
グループを抜けて孤独な向い風　節子
グループの内と外との顔二つ　三津子
グループなら露天風呂でもへっちゃらだ　玲子
点取虫だけでグループ組んでいる　勝見
歓声の余韻残したホームラン　晴光
忘年会酒の余韻に踊る下戸　善江
褒められた余韻にやる気湧いてきた　和枝
余韻のように傷口が痒くなる　螢
大トロの余韻たのしむ喉ぼとけ　博丈
秋の余韻ひたる間もなく寒気団　龍枝
除夜の鐘余韻残して年は明け　幸子
山寺の鐘の余韻で日が暮れる　重忠
利を産むとうまくだまされ丸裸　友楽
はやり語を次々と産む茶髪の子　美知江
持つマイクそして別れて持つ自由　克枝
グループのしんがりにいて回れ右　芳光
グループの中でも目立つ喇叭吹き　よしえ
雪女そっと木枯し産み落とす　完司
国文祭すんでキツネが落ちました　石花菜
うっかりのお世辞が生んだハプニング　孝恵

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

返答に困った時は頭かく　幸子
山彦の答待ってる小学生　愛
胡蝶蘭答えはひとつ君愛す　孝一
来年もころばずいそがず八十路坂　千恵
来年も現状維持で過したい　正子
蜘蛛の糸ひからせている陽の視線　和子
愛子さま振りまく視線菊日和　東園
半眼でわたしの願いを聴く地蔵　しづ子
幼児と同じ視線で見て悟り　糸子
面映ゆい視線にそっと背を向ける　久子
春に建つ終の家です花咲かそ　里江
こめかみにずしりと重い冬の風　歌子
指導者はあの人らしい髭がある　昭三
生きようと雨のあかつき汗かいて　薫
国境の悩みを知らぬ渡り鳥　勝巳
上昇の風に乗れない竹トンボ　満寿蔵
底冷えの部屋でこけしが春を待つ　武庫坊
喪中葉書もの言いたげに手に残る　半蔵門
風待ちの落葉カラコロ芸をする　寛之
からっぽのわたしに気付く十二月　年代
愛不在こんがりパンが焼けてくる　静
起き伏しの音も秋から冬になる　芳子

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

豆絞り輪を盛り上げる蛸踊り　さとみ
ペン胼胝もパチンコ胼胝もあるわたし　専平
ペンだこの割に売れない小説家　志洋
連凧で国際交流橋わたし　フジ
余興なら俺に委せと蛸踊り　柳宏子
蛸壺の中で昼寝をしてたのに　敏
穴場でも混まなくなった不況風　昇
混んできた車に羽根が欲しくなる　久仁子
混む混まぬ味が決めます値が決める　庸佑
喧嘩する老妻がいるから生きている　いさお
口喧嘩夫婦の仲を確かめる　たけし
退屈をしない程度に口喧嘩　昭平
喧嘩する種もなくなり共白髪　真一
口喧嘩絶えぬ夫婦で仲が良い　一壺
お隣のイヌと喧嘩をせぬように　章司
手のひらの中の喧嘩へ釈迦の笑み　美代子
ポケットの辞表言うべきことは言う　久仁雄
鰯雲あの日のケンカ愛だった　重人
荷物の陰で荷主に隠れ来た異物　扶美代
独り呑むオーナー明日を夢みてる　忠宏
優勝でオーナーの声重くなる　敦子
久雄

オーナーはいま塾にいる竹とんぼ　六点
一坪の主が阻止するエアポート　かつみ
オーナーの咳におしゃべり気付かない　吐来
菜園にミミズなめくじ住まわせる　みつこ
オーナーが代わり新風吹いて来る　泰子
一本の木に団体で行くみかんがり　りつえ

ほたる川柳同好会　田辺正三郎報

突然の指名スピーチ上の空　柳童
伝統に胡坐をかいて消す暖簾　ヤギエ
親を越す失礼だけはしていない　保子
水溜り飛び越え損ね老いを知る　雪子
参るほど飲めぬ不況の忘年会　実
文楽を支えて黒子名も知れず　黒兎
伝統の曳山子らは淡淡と　千里志
来年も無事に越えるか鬼に問う　契子
十一桁なじめと急に言われても　勝
突然の受賞が人生変えて行き　長一
参ったと頭を下げてからの愚痴　よしろう
伝統の食見直している体　桂子
釘打たぬ旧家木組に靭さ秘め　禄骨
出来ちゃった結婚話に親慌て　いさむ
伝統芸外国人が熱入れる　信男
華やかに伝統かつぐギャル神輿　祥風
約変の意味はわたしが知っている　久子
伝統を守るジリ貧覚悟して　正三郎

熊本川柳会　高野宵草報

澄んだ瞳に貧富の差などない笑顔　エツ子
清貧でよし健康という宝　俊子
詫びるたび男の影が薄くなる　大三郎
ブランコに娑婆を揺すってみる不安　敝久
本音で酌む酒に銘柄などいらぬ　百笏
家中のクッション役で母も老い　とし子
もう二十歳親の舵では動かせぬ　柳詩
健康は妻の手加減味加減　清香
似顔絵は少し美人に描いておく　義申
すみませんの連発きっと良い子だろ　康子
開店前暇とお金が並んでる　しゅくろ
舵取りのうまさどうにか夫婦仲　末
戦友の手紙昔の文字で見る　一進
途上国子の瞳澄んでる痛いほど　宵草
野菜みな個性なくした味になり　あや子

西宮北口川柳会　亀岡哲子報

必要に迫られ良い妻演じてる　千代
締切りがせまると檻の熊になる　富喜子
せまられて致死量になる恋の味　満寿蔵
アルバムの亡き友の笑み胸せまる　章子
宗教を捨てて飛び込む彼の胸　光久
無宗教お別れ会の白いバラ　美代子
平穏な日々神様を忘れてる　能子
顔見世のそばに素足の托鉢僧　松煙
宗派など別に挙式のセレモニー　昭三
寂聴の口説きに人生やり直す　晴美
宗教は磁石弱い心を吸いつける　文
宗教は違うが愛は本物だ　房子
渡らねば大人になれぬ背なを押す　てる
老いてなおおんなで渡る橋の数　たず子
手をつなぎ銀河を渡る夢がある　いわゑ
ときめいて渡った橋は地図にない　哲男
そしてまだ渡る世間の塩辛さ　義子
どの川も同じ歩幅で渡り切る　比ろ志
婆が漕ぎ小猫波乗る膝小舟　いたる
古里ののどかに踊る風の盆　江美
みかん山全山黄色海のどか　トミエ
忙中閑のどかに珈琲のんでいる　澄子
鳶が鳴くのどかな海辺の昼下がり　歳子
ランプの宿で時間を止めているのどか　石舟
みかん剥く炬燵に猫も欠伸する　奮水
柚子風呂にレモンの輪切り冬至の夜　春蘭
タマちゃんと言い訳をして無精髭　嘉彦
昼下がりそろそろ自我が出はじめる　求芽
巡る季に合わせて山は化粧する　鹿太
木枯しと憂さがあつ燗せまってる　孝一

尼崎尾浜川柳会　田辺鹿太報

大根の白さと艶が憎らしい　鹿太
柿の葉の枯れて真紅の自己主張　その
気まぐれな旅で出会った阿波踊り　幸子
夕暮れのメロディーとなる焼芋屋　江美
故里の新米母の汗光る　まさ
人形に命吹き込む糸の技　玉枝
いやな事忘れて今日も元気出す　よし子
命綱元気でいてよなあアンタ　秋子
いやなこと忘年会で捨てました　信子
忘れてはならぬと明日の靴の上　耕治

日朝のはざまで揺れる命の灯　亀与子
徒長した枝の野心を切り落す　イサミ
風見鶏いやいや動く風邪気味だ　孝一
何時何が飛んで来るやら不況風　比ろ志
コンパクト競い合ってる専用車　満寿蔵
二十四年祖国の風を忘られず　正治
御仏飯ゆっくり愚痴も聞いてくれ　澄子
命綱互いに頼る老い二人　求芽
ふる里に母が待ってるホームレス　諷云児
生きている今日の目覚めに掌を合わす　柳宏子

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

万病にきっと効くだろ笑い声　裕美
万策の尽きた列車が海へ向く　あき子
華やかな夢を追うても万華鏡　克子
万灯の今年もきれいめぐりあう　三喜夫
万人の夢にそれぞれ彩がある　翠子
万一の時に備えて増やす鍵　美子
万骨は朽ちて歴史の点と線　射月芳
試行錯誤の継続でした新品種　和子
継続の後に必ず出る答　紀久子
共白髪継続という贈り物　和
裁ち切る勇気なくて続いている夫婦　英子
子のために祈り続ける母の四季　順子
首振りの五年で竹に音が出る　愿
毒舌の遺伝子しかと子らが継ぎ　鉄治
継続の努力がトップに立っている　正博
生きている日々の記録が宝もの　佐一
ごろごろが本意ではない日を抜ける　冨美子
空き缶が風のタクトでよく踊る　さち子
核兵器ごろごろ終末の地球　ダン吉
ごろごろと転んでみても四畳半　利治
ごろ寝しつつ膨らませてゆく大志　泰子
ごろごろに愛想つかした親の脛　怜
コンビニの前でゴロゴロする若さ　稚代
ごろごろしてもくれる年金ありがたい　三男
ガラス細工のような女を抱いている　美羽
角度変えれば光輝くガラス玉　佐代子
まだ他人と知ってるガラス張りの部屋　和重
ガラスの破片あつめて愛の絵を描く　輝子
透き通るガラス貴方に勝てはせぬ　優子
海鳴りを聞いて夜汽車のガラス窓　豊太

川柳ささやま　遠山　可住報

本心は振り向きたくて母の背な　恵美
朝の乱ペットがあとのしずめ役　多美子
退院のほほ安心の紅がさす　美智子
我が輩は人だと思うペット猫　八重子
演技などしないペットの主役顔　とみ子
ペット犬の見栄すれちがう散歩道　つや子
落ち込めば猫慰めに寄ってくる　君代
嬉しいお手紙戴きましたすぐ返事　冨子
寒くなりペットも服を着せてやり　康子
聞き上手話し上手でいい返事　朝子
人間と思い込んでる猫と住む　寿子
まだ残る未練を捨てて紅をひく　美紗子
ペット犬出迎え忠勤ありがとう　美緒子
嫉妬だろ美女に懐かぬ狆がいる　哲男
逢える日の紅差指が炎えている　可住

京都塔の会　都倉　求芽報

いつ来ても京の昔をふと思う　紫香
紅葉が一気加速で冬むかう　宏子
雨男誰やろ紅葉濡れている　柳宏子
ウインドーにも紅葉貼りつく風の粋　輝美
餅を搗く音もてなしのごと響く　啓子
湧く霧が錦の保津に彩を添え　シマ子
洛北は時雨れて冬の貌になる　鹿太
見えぬ背にみんな何かを書いている　良子
一人芝居　背中で泣いて笑ってる　福子
背の子をあやして泣いた日和下駄　とし子
曲がる背の骨は一本ずつ歴史　欣之
母さんがいちばん低い背くらべ　満子
肩車親とは違う視野を見る　満寿蔵
痛いほど正直な眼を背に感じ　求芽
野心家の背中に捨てたものがある　義
ひとかどの樹になりたくて背のびする　泰雄
黒幕がいるかやたら出る強気　庸佑
ひとり住むやたら淋しい鮭茶漬　篤子
ピンチかなやたらコロッケつづいてる　静枝
七五三やたら緊張ハイチーズ　幸代
鶏の鍋　女の方は箸がまめ　〆女
やがてやがて流れにまかす花筏　百合子
何かにつけやたら気になる人がいる　澄子
モーツアルトオペラになった凸凹　孝一
凹凸があるから美しいヌード　正坊
二人三脚でこぼこ山を制覇する　春

凸凹の道にも花は咲いている　比ろ志
青春の名残ニキビのあとがある　芳子
凸凹が噛みあわぬまま添い遂げる　益子
わが暮らしもぐら叩きで終りそう　葉子

かわはら川柳会　上田　俊路報

人生の運と不運はとなり合い　登生
努力家に運のいたずら近寄らず　かず恵
強運かも知れぬ修羅場を幾つ越え　泰良
運命の定め厳しき拉致家族　雅予
いい友とめぐり合わせに感謝する　余吏子
運ばかりたよらず足で職さがす　悦子
発表日おがむ気持で時を待つ　道子
孫たちが拝み倒しの術おぼえ　聰
拝む事忘れた街で住みにくい　静子
一粒を拝んだ農を掘り起こす　寿子
だんだんと拝む姿勢になる介護　俊路

三幸川柳教室　古久保和子報

インターネット情報群れて競い合う　一歩
いわし雲寂しがりやが寄ってくる　章子
頂点で転ぶと鬼が群れてくる　鉄治
パンくずに群がる蟻の冬支度　美枝子
群れに居て貫く的を見失う　豊太郎
寄らば大樹僕の保身は群れの中　義雄
声出して読みたい佐藤春夫の詩　次根
物差しの違いに声を噛み殺す　三千子
人間を叱るマグマの声がする　起世子
うぶ声へもう将来を期待する　登美代

我が家では妻の声には逆らえず　武
叱られても素直に聞ける母の声　幸
燃えるものあって声まで若返る　み
声変わりして少年が笑わない　ね
ノーベル賞声も謙虚なエンジニア　朱夏
大胆に抜けば積み木は崩れない　町子
成功をした大胆が褒められる　かず子
大胆に描きたい筆が見当たらず　清史
大胆な男でいつもすっぴんで　当代
大胆なタッチで描きたい余生　イセ
大胆になれないままに煮くずれる　靖子
もう一人の自分が勇気出せと言う　さち子
影法師の上で威張っている自分　純子
自分探しの旅を始める秋桜　正一
自分史の窪み地団駄踏んだ跡　和子
輪の中で自分の位置を確かめる　千秀
結局は自分ひとりの一輪車　准一
古疵もさらして私甦る　保州
なびいても自説は曲げぬすすきの穂　桂香
自己主張捨てて静かに郷に入る　碧嘉平

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

亡き父の帽子が語る従軍記　はるみ
亀は亀うさぎはうさぎのスケジュール　かつ子
スケジュールたてて昼寝をしています　聖子
さざ波がスケジュールをくるわせた　恵美子
ハンチング粋にかぶってボール打ち　好栄
かわせみにそぞろ哀しき冬せまる　民子
古びても父の帽子にある威厳　ちよえ

スケジュールになかった腰痛やってくる　博利
スケジュール手帳勝手に引受ける　清泉
ネクタイをきちんと締めて偽証する　白汀

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

人生の悲しみ知らぬ初歩み　彩人
夢売りが来る日だ酒席ととのえる　蛙痴郎
芋煮会戦災孤児の貌で食う　謙一
野次馬の中へ野次馬巻き込まれ　しげる
宴から醒めて反省ばかりする　妙子
ひっそりと女盛りがまだ続く　ヒサ子
血糖値うらむ酒席の一人ボチ　北歩
三次会送って行けば根が生える　順風
野球拳きわどくなって盛り上がり　慕情
失敗を恐れはしない種子をまく　銀波
金婚のよろこび満ちて内祝い　花匠
ボランティア始める友に拍手する　雅城
始まりから熱情こもる手話の指　愁女
熟女には孤独などない夜会服　ツネ
沢庵が欲しいと思う披露宴　井蛙
祝辞からときどき飛ばす含み針　黙人
炎をはらむ女盛りの影法師　千加子
ジャンケンポン女盛りに負けている　花峯
うなだれた客を見送る競走馬　一花
披露宴父の涙を見てしまう　劦
神様がおでましになる笙の笛　五楽庵

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

かと言ってお婆ひとりにゃ任せない　アキ

お婆だとつくづく思うこの厚着　あずき
おばあちゃん子供の声に足止まる　加津子
本買うと言えば小遣いくれる祖母　慶子
寒空におばあめかしてどこへ行く　弘直
いつだっておばあ一番炎えている　シマ子
目測も危うくなって空掴む　欣史子
ザイル掴む二人一緒の命です　能子
夢掴んだ男は癒し系の才　香住
野良猫が掴んだ伴侶ペルシャ猫　喜美子

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

人生の帳尻かなし紙おむつ　ますみ
帳尻も合うてにっこり除夜の鐘　一風
帳尻に貧乏神が座ってる　宏至
帳尻を母に任せて父は逝く　幸生
よう泣いた分だけ笑わせてる芝居　度
身を守る毒はちょっぴり持っている　巳代一
極上の味はお塩のひとつまみ　欣之
甘酒でちょっぴり青い恋ごころ　柳伸
嘘ちょっぴり混ぜて自分史華になる　ダン吉
逃げ腰の自分を恥じてる昼の月　弥生
逃げこんだとこが刑事の家だった　柳宏子
今ここで逃げるとみんなぱあになる　ミツ子
家中が携帯もって逃げ場なし　欣子
逃げ道をつくっておいて喧嘩売る　きよみ
私でも逃げるワあんな亭主なら　鈴子
マスコットガールの若さ吸って見る　肇民
こわい妻昔は僕のマスコット　庸佑
逆転のチャンスマスコットに祈る　弘直
ふところもお寒し冬の街をゆく　きらり
霜ふれば白菜ゆるりともできず　加津子
皮下脂肪たっぷり付けて冬ごもり　シマ子
ピンクを足して編むやがての冬に　洋
大根の白に問いつめられて冬

川柳塔なら　坊農柳弘報

風向きへ話の軸も揺れていく　蘭香
火だるまになり独裁に抗議する　彰治
貼り紙が美人が良いと無理を言う　積子
下半身軽いダルマは起きられず　博一
手抜きしてほっと一息風になる　敏子
だるまの眼入れて変わった人間味　あやめ
抜け道はない男道女道　卓
一輪車よろめく軸にはしる母　カズ子
ミスコンへ内緒にしとく離婚歴　理恵
にらめっこ達磨は負けた事がない　きらり
茶柱とだるまに元気貰ろて靴　章久
軸足をかえて弾みがついてくる　秋泉
火だるまの記憶に残る苦い恋　春雄
高校は無名プロでは軸になる　太一
歳かくすメークに苦労して応募　とし子
大臣になってだるまに髭を足す　光雄
三人の家族三本軸がある　真理子
核ゼロの理念は頑として曲げぬ　良一
母子家庭ようやく僕が軸になる　一風
辛抱を達磨大師に教えられ　隆盛
応募者は多数空ろな列にいる　ダン吉
当選の皮算用もして応募　國治
マンネリのトゲを抜いてる広辞苑　道子
一人ずつ抜けて夫婦の寒い部屋　秋雄
軸足を器用に替えて生き残る　和夫
娘も応募母子二代の福娘　寿美
ミニ蒐集だるま人形百を越し　春蘭
節節の涙を軸にして生きる　弥生
ロボットもハローワークの列にいる　富子
抜け殻がぽとり寂しい寒の入り　登美子

岩美川柳会　石谷美恵子報

瞳孔が広がる五万円の蟹　蟹郎
戦争は武器弾薬を売るチャンス　石花菜
小部屋にて並ぶ運命の莢豌豆　和枝
風を読むチャンスは今だ羽ばたこう　孝男
村雀並ぶと家の自慢する　一夫
拉致事件のびてチャンスを見失う　かつみ
つまずいた時には広い海に問う　雅女
軍隊式に並ばされると腹が立つ　はるお
終点の夢はでっかく宇宙です　公乃
ヒマワリを描いて私の終点に　和歌子
まっ白な大根の束二百円　よしえ
飲み残す薬が棚に並んでる　故喬水
風呂敷を広げ煽てにのっている　きみ子
終点へ答わからぬままに着く　たぬ
捨て切れぬ欲でチャンスを取り逃す　節子
欲の無い人にチャンスは転げこむ　裕子
バスツアー終点祖谷のカズラ橋　照子
神さまのくれたチャンスは逃すまい　菖子
ポツンと一つ影を忘れて来た広場　季芳

幻を解く終点に近くなり　螢
終点のつくり話を考える　一瑶
人生の終点花に囲まれる　圭一郎
右へ習え軍手が竿に干してある　静生
広い心で見ればこの世は面白い　一京
子を諭すチャンス狂わすお婆さん　睦子
閉店の広がる街は寂れ行く　一粋
反論のチャンス無口が狙ってる　忠良
並べたら伯耆大山うつくしい　重忠
並びたいあなたの席を空けて待つ　希久代
青空が返さぬ僕の竹とんぼ　美恵子

川柳塔きゃらぼく　福代　天雀報

ロマンの調べ弥生の里の今むかし　瑞枝
遊んだ川が街の地図から消えている　晶子
長い道縦糸少し緩み出す　玲子
株分ける分身も咲きあたたまる　ふみ
明暗を分けた二十四年目の帰郷　なみ
出がらしのお茶で話に味がつく　てい子
銀杏の葉私をこのんで舞い落ちる　八重子
崩れそうモヒカン刈りにされた山　恵子
ランプと言うコーヒー館でデートする　千春
握手して波紋広がる日本海　すみえ
ゴミの山プラスチックの墓場だな　繭
立冬をすぎて黄砂が今日は　天雀
新子抄日曜版を糧とする　初枝
国文祭異国の風も手を繋ぎ　春枝
ひざ小僧いつも思いの先を行く　すみこ
幕間はしっかり食事とる時間　千代

これからがとても気になる八十路　富美子
そろりそろり力が抜けていく加齢　日枝子

川柳ねやがわ　江口　度報

以下同文名前だけでは淋しいね　利昭
見出しだけ拾い読みして急ぐ朝　仁清
省略の父の手紙があたたかい　賢子
省略が過ぎて電文読み違い　高栄
省略をされた同士がよう喋り　柳宏子
省略をしたら私が消えていた　正坊
肉省いてもすき焼と言えますか　度
深い谷そこ打ち信じあせらない　忠央
ひとりぼっち都会の渦の真ん中で　美代子
考えがないので渦の中にいる　たもつ
バラの棘抱いて渦中の人となる　朝子
知りすぎた男が渦を抜けられぬ　あやめ
修羅の渦耐えてきれいな母の皺　一風
木枯しが相合傘を渦にする　日出子
妥協せぬ信念守り渦を出る　光子
仏にも鬼にもなれず渦の中　洋
ビルの上鳥居が立っている都会　庸佑
田舎から都会にかける丸太橋　とし子
ぽつねんとわたしが佇っていた都会　扶美代
わくわくと上りホームに佇っている　重人
足腰が弱り便利な都市に住む　ルイ子
千人針の手触り今も忘れない　冬葉
手触りに心変わりをふと気づく　修
広辞苑開いて閉じて手になじみ　かすみ
どんぐりころころ冬の手触り確かめる　茜

積み過ぎた書類の山でおぼれてる　てまり
札束をどんと積むなら考える　礫
漱石全集今年も埃積んだまま　弘一
吃水線すれすれに積む大漁旗　波留吉
窓際の机に夢を積み残す　寿美

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

遺産分け済みコーヒーを熱くする　重人
離婚して髪もさっぱりカットする　寿美子
あきまへんさっぱりだすと儲けてる　正坊
不良債権始末するのに金が要り　紫香
後始末しないあんたの悪い癖　萬的
うす笑い好かん女の鼻柱　都代子
柱状節理もろい地球を見せつける　求芽
柱の傷しかられた数うめてあり　蛙
千載の桧 古塔の心柱　禄骨
浮き沈み知り尽くしてる床柱　庸佑
手のうちを読んで読ませていい夫婦　満寿巳
最後まで利口になれず父の逝く　千津子
校庭は夕焼け時がよく似合う　見清
母の背が逢う度毎に丸くなる　〆女
自営です八十の顔 店の顔　知香子
名簿から削除淋しい年の暮　啓生
同い年同じ失敗笑い合い　英子
おたやんは美人でないがなごみます　千里志
十二月 友は第九へ忙しい　和子
残された命へあるがまま生きる　慶子
車椅子 眠ったままの予定表　つえ子
医療改革 貧乏人は死ねと言う　ことぶき

賀状書く時だけ思い出すお人　玲子

むらくも川柳会　毛利幸報

忘年会チョコ一杯で座が笑う　仲子
ちらちらと心によぎる母の顔　彰
ちらちらと気になる女を目が追って　信夫
今日だけは懐温い忘年会　定子
十八番演歌が唸る忘年会　幸
宴会でお酌ちらちらなまめかし　明朗
ずっしりと靴の並んだ日曜日　恵美子
幼子のずっしり重く手がしびれ　寿
運動会ずっしり重いかごかつぎ　まさ子
ずっしりと実家の嫁にある覚悟　昭子
胃袋に納まりきれぬカルシウム　ふさえ
高原の風にコスモスよく似合う　八重子
齢だとて床の中でも指をおる　島子

南大阪川柳会　吉川寿美報

名勝負崩れた髷へ勝名のり　寿美
タレントになると力士もよく喋る　柳伸
歯切れのいい笑顔十両になりました　アキラ
モンゴルに忍耐の二字教えられ　ダン吉
角番へ嬉しい千秋楽の星　庸佑
異分子が一石投じ席を立つ　萬的
終電車朝と異なるネクタイで　東雲
動物の勘に異状を知らされる　なぎさ
メル友に会いに行ったら異人さん　弘泰
異端児がノーベル賞で光り出す　敏幸
熱燗とウニとで唸るのど仏　朝子
ウニ割って太平洋を食べている　重人
匠より技が上だという異才　雅文
かじかんで割るウニ殻に雪しぐれ　章久
高いからウニは嫌いと言っておく　直子
下座からだんだん大きくなる異論　柳宏子
ウニつるり口は果てない海となる　珠美
ウニ丼をたらふく食べに北の旅　千梢
人はみな見えぬ首輪に繋がれる　楓楽
かごめかごめ花の首輪の野仏と　志華子
十一桁が首輪のように絡みつく　シマ子
思い出はれんげの首輪編んだ頃　叡子
ポチもわたしも首輪でつながれる　三男
夫にも首輪くさりが欲しくなり　久子
産卵の鮭は必死で川上る　たもつ
自爆テロこんなに恐いものはない　度
夫婦喧嘩捨て身になったりなられたり　遠野
堂々と異議申し立てする若さ　宏
異なった価値観持った故の拉致　朝代
座布団が舞って静かに去る力士　明正

岬川柳会　八十田洞庵報

疑いを持たせぬほどに長けた人　茂平
ママゴトの可憐な仕草母に似る　勝
大胆にたたかれ曲った釘の意地　令子
可憐さを少し残してボケ上手　年子
クリスマス可憐な天使雪を連れ　俶子
そっと拭く思い出残るめがね入れ　富美子
残照のチャンス伺うカメラマン　孝子
いいとこ取りして友情の残る歳　勇
年賀状手書き文字だけ読んで置く　里子
若き日の香り残して逝った人　和香
リストラに残るロボット錆びてくる　洞庵
天命のおもむくままと言うお方　昌夫
可憐さが舞台にはえる遊戯会　狸村
疑わず生きるこの世の難しさ　みやこ
なんとなく通うものあり振り返る　和美
隠してもふくらんでいる披露宴　とみ
祝宴も横目でにらむ酒の量　桜琴

いずも川柳会　佐藤治代報

近頃は寒くて酒の数が増え　夢酔
近頃は雑音だけの耳ふたつ　喜子
お隣のピアノ近頃うれしそう　久子
近頃は無罪で過す日記帳　紫晃
近頃は電話もなくて元気です　ちかし
街角で仕入れたニュース運ぶ鳥　満江
大ニュース五十女が産気づき　蘭水
耳よりのニュースとココア飲んでいる　圭詩朗
米を研ぐ寒いニュースを聞きながら　文子
窓閉じて隣のニュース聞いている　美江子
拉致ニュースもう終幕にしてほしい　茂美
泥天神えにしを語る花の宵　房子
愛されるために生まれて来た人形　治代
アリバイを人形だけが知っている　昭二
情念がもつれてとけて人形師　芙佐子
人形も情けもらって歩き出す　玲子
時代おくれの人形に赤札を貼る　桂子
汚色した袋裏返しして使う　キミエ

破れたままの袋を引きずって　靖乃
胃袋にマグマを溜めていませんか　多賀子
袋には人の心を溜めましょう　すみこ
大事なものは袋の中に入れておく　寿美
袋から出よう出ようとしてもがく　多喜
一日がすっぽり入ってゆく袋　章峰
ほのぼのと妻の傘下で釣支度　芳枝
妙好人ほのぼの残る話し振り　博雄
ほのぼのと人柄匂う身嗜み　まこと
ほのぼのを床の間に活け客を待つ　昌枝
逢うて来た余韻ほのぼの抱いて寝る　きみえ
落雁もおいしほのぼの朝のお茶　れいじ

長柳会　加島由一報

ボーナスを見込んで動きだすサンタ　由一
額の絵も心を変えて六十歳　史
クリスマス信じてないが祝います　武男
年の瀬に気兼ねして行く絵画展　たけし
クリスマスサンタ夢みる日もあった　輝子
今はやりリストラ亭主飯を炊く　マサ
雲間から月が顔出す秋の空　輝治
クリスマス孫に届けるラブレター　敬二
絵ハガキの余白にあった愛の文字　英美
ここだけの話あちこち飛んでいる　もこ
ふし穴の向こうもふし穴覗いてる　靖子
児童画展ピカソを抜いた風に会う　和子
安全なカレー食べてるクリスマス　正子
輪を抜けて花に孤独を覗かれる　けい子
お転婆も今日は絵になる披露宴　三和子

真実が恐ぐて瞳覗けない　冨美子
人間の世界覗いて逃げた鬼　和代
高いのはダメですサンタにも都合　正美
いてるかと覗いてめしも食べて行く　良男
青春の影絵の中に消えぬ人　芳野
深い闇覗けど見えぬ妻の淵　直樹
襖絵にシルクロードのあるお寺　正一
素通りが出来ぬと知っていて覗く　幸雄
お隣の事は覗かぬ天邪鬼　潤子
プレゼント届かぬ子等へ光れ星　一慧

富柳会　池森子報

耳洗う話が多い十二月　一夫
集って散って落葉の風の旅　一慧
秋風に愛の絵皿がまた曇る　潤子
葉脈に養分送り枯れ急ぐ　和代
流された所で根づく花の種　鐘造
寂しくて闇一杯の思慕を抱く　和子
お別れの宴がすんで舞う落葉　冬虹
語りつくして夜はすべてを丸くする　アキ
バーゲンに触手が動く五割引き　誠
光明はお二人同時ノーベル賞　勇
美しく老いたく願うぬれ落葉　恵勇
やって来た風邪と闘い負けそうな　たかし
七五三祖父もネクタイ新調し　昭水
諸共に流されていく深い秋　初太郎
思い出の修羅を流した川に居る　文子
傷心を丸ごと流す母の川　紅紫朗
崩壊の始まり石榴実をこぼす　夕子

戻せない時を戻してゆく流れ　巳代一
仕舞風呂流して主婦を折りたたむ　花梢
歳月の速さに小走りが続く　ひろこ
足早のお人に用事聞きたいが　東雲
味噌汁がうまいぞ今日は冴えている　洋介
移り気な風と結んだ風媒花　信子
デスマスク商店街で神と逢う　哲史
侘しさをむき出しに吹く秋の風　春蘭
三途の河渡る裏金貯めている　信博
前向きで流れるような朝の駅　キミエ
思いやり冴えて労る血が温い　欣之
ふる里にやっと二葉の芽が育つ　森子

くろぼこ川柳会　前坂なお美報

持ち合わせの少ない僕を買いますか　一揆
独り者少しまずしく生きて行く　キヨノ
移り気の少ない人を探している　遊子
カラフルに色づけされた二十年　涼子
運動は鈍いが頭秀才だ　小生
パソコンに勘の鈍さを笑われる　故喬水
弾除けになる木を植えて根づかそう　帆雀
丁度いい流れに根づき米を研ぐ　美智子
根付くまで責任果たす水をやる　和代
バーゲンの糠喜びにだまされる　常子
糠床を上げて三度のめしに添え　ふみ子
されこうべ仕上げを磨く糠ぶくろ　はるお
くいしばる歯を持ってると言い聞かす　悦子
言い訳をすると奥歯がむずがゆい　富子
奥歯から声にならない音が漏れ　一眸

反応の鈍い顔してよく稼ぐ　春名
鈍間だが忘けようとは思わない　あらた
糠雨で相合傘が嬉しがり　重忠
糠づけをマニキュアつけてかきまぜる　みち子
ほころんだ笑顔に似合う歯が白い　菜美
歯が抜けるたびに寿命もちぢまりぬ　なお美
一本も歯がないけれど生きている　螢
糠よろこびさせて女は逃げていく　静生
足元のいつも明るいバリアフリー　つや子
病巣に根付く弱気の虫払う　小鹿
大外を騎手を落とした馬がゆく　公弘

川柳塔まつえ吟社　津川　紫晃報

打ちとけていつかはずれる鍵もある　政子
核と言う文化の鍵が争いに　幸子
鍵の数増えて孤独になってゆく　知恵子
合鍵が合わなくなって殻を脱ぐ　昌枝
鍵穴のむこうに果てしなき荒野　圭詩朗
心の鍵開けたあなたが憎らしい　茂美
名ばかりの故郷だけど夢で見る　きみ子
故郷に親父が建てた家がある　螢
母の顔とび出すほどに宅配便　たけし
叱られて夜汽車でそっと発った故郷　早苗
故郷の記録が残る千枚田　与根一
ふるさとをそっとひらいてみるこぶし　章峰
運命のいたずらだとは思えない　邦代
幸運がぐつぐつ煮える大家族　亮
初詣で運をいただく予感する　注湖
ひらひらともみじの運も地ではえる　(多)博子

呱々の声運命線を握りしめ　多賀子
運不運どうあれ一歩前へ出る　淞丘
細い絆水をやったら太くなり　玲子
赤い糸深い絆で結ばれる　房子
愛さえもやがて薄れてゆく絆　多喜
血の絆パズルとなってまだ解けぬ　節子
梅咲いて古い絆を匂わせる　桂子
逆風に出逢うと太くなる絆　叮紅
雑用で流されそうに年のくれ　ちえこ
雑用が増えてきりきり舞をする　静恵
雑用に悲鳴あげてる足の裏　きみえ
一つして一つ忘れてする雑用　秀子
雑用が驚いている長電話　畔
雑用も忘れて眠るかたつむり　紫晃

川柳さんだ　北野　哲男報

紅絹裏のべに散らかして解く着物　千代子
何かあるスリッパの音にぎやかだ　ちあき
不手際に不況不安と不が続き　藤朗
平凡に過ぎた年末温かい　俊昭
一万歩暑い寒いと続かない　菊子
色っぽい眼鏡の中の目が憎い　婦美子
外食にこだわりあってまだ行けず　久恵
取締り忘年会もおーいお茶　雅司
飲みすぎの反省ばかりする師走　朋月
取りたいね酸素マスクをにらんでる　真由子
それぞれの仮面をつけて夫婦する　正和
化粧せずこれ幸いにマスクする　歳子
咳一つ混ぜてマスクを誇張する　千代

桝酒へマスクずらして列に入る　哲男

城北川柳会　川久保睦子報

古いもの罪の意識で捨て切れず　容子
お目出度い話が続き火の車　照子
八十代人生楽しく暮す日々　東雲
耕一さん発表前に戻りたい　柳一
義理欠くも歳のせいかと諦める　美代子
やり直し出来ぬ今日の日だから好き　静枝
よくもまあ呆れる記事の尽きぬこと　高栄
秋風へ夏の疲れがどっと出る　達子
病院の梯子病名五つ持ち　政子
デパートで欲しいと思わぬ淋しさよ　とし子
結婚シーズン貸衣装屋が走る　トヨ子
立ち話出来ぬ相談喫茶店　あい子
雑魚は雑魚釣り合いとれて睦まじい　久留美
四日間あけた我が家の懐かしく　順三
子育てに手抜きがあったまだ嫁かぬ　修
子に託す夢は大きな虹になり　はじめ
明日という白いページは汚すまい　一枝
監督の胸に飛び込むゴールイン　史風
歳月は風おもかげと遥か去り　綏子
芸術の秋へダッシュの絵具皿　千歩
炎えさかる紅葉こころ決めさせる　典子
生きている限り模索がまだ続く　重人
疑いも持たず明日の夢を見る　求芽
現役を退く日が遠い不況風　公一
万全を尽しましたと無影灯　あやめ
金持ちも浄土で金は使えない　昭子

金持ちも逝く花園は皆同じ　あき子
お節介すぎる自分に呆れてる　志華子
多情多恨近くて遠い国憶う　倫子
完走のゴールをぬくい目が包む　萬的

川柳藤井寺　髙田美代子報

両親の悲鳴が響く拉致疑惑　真一
拉致家族互いの胸に血の響き　シマ子
五十年阿吽の呼吸まだ響く　雅枝
響いてた昔を知っている暦　鐘造
響く友あっていそいそ靴を履く　ヨシ枝
梵鐘のひびく彼方に月の影　春蘭
アカペラで異国の丘の敗戦忌　恵勇
法善寺熱いエールがよく響く　重人
尼寺の鐘の響きにある余情　志洋
頼りない人に響いてみたくなる　美子
人情に触れると響き出す命　アキ
雷鳴が響いてマンネリを抜ける　みつこ
低空のヘリが揺さぶる侘住い　一知
ジングルベルぼくの財布にまで響く　六点
打てば響く女で如才のない動き　庸佑
夜半ふとだんだん迫る救急車　喜代子
君が代が響くともめる外野席　和樹
反論の声だな元気よく響く　扶美代
ひびき渡るワンパクだったボクがいた　悦子
歯ぎしりをするなお前は棺の中　一筒
解体に反響よんでる正田邸　アヤ子
心臓にビッビッビッと響く自尊心　しげお
待ちわびるポストで響く母の文　千里
へそくりを隠したピアノひびきよし　栄一
父の背な子供にしっかりと響く　昭子
脳みそが減って響かぬ時もある　花梢
昭和一桁まだまだ響く喉仏　絹歌
響きあうものがあるから越えられる　葉
終章へ響くことばを選っている　美代子
響き合うひとが恋しい十三夜　瑠美子

川柳クラブわたの花　吉村一風報

ためらいを勇気でおさえ体当り　(増)道子
若い時の苦労が無駄なはずがない　宏至
み仏にいつも守られてる元気　ミツ子
煩悩を一つずつ消すお念仏　君江
古稀過ぎた姉のしぐさに母を見る　(馬)宏
仏にも鬼にもなってする介護　一風
棚のボトル亡夫の笑顔が詰めてある　幸枝
この坂を越えると旨い水が湧く　隆盛
晩年にやっと帳尻合う二人　晴美
体重計ちょっぴり動き目は点に　俊子
血管に美食の付けがまわってる　恭一
痛切な意見に黙るほかはない　奈良司
親の恩海に譬える曽孫抱く　友甫
ゴジラ抜けちょっぴりほっと虎ファン　正純
審判のジャッジ不服でベース蹴る　一道
政治家の無法帳尻塀お好き　(本)たえこ
ぐち一つ乗せて初冬の雲が行く　(赤)妙子
同窓会寄れば亭主の棚おろし　ますみ
ばれるまで隠しておこう過去のこと　まさと
蕾まだためらい迷う花鋏　いつふみ
テレ料理のご馳走睨みカップ麺　義明
うれしげに多忙を嘆く定年後　春江
葛藤の溢れ帳尻が合わぬ　順生
仏壇のメロン食べ頃気にかかる　知佐子
セールスへ上手に逃げる妻の口　美代子
プーサンを枕に明日の風を読む　民
過不足の無い帳尻の落し穴　明
供養せず願う時だけ神仏　八寿子
隅に居て我が家の歩み知るバケツ　肇

川柳ふうもん吟社　杉本孝男報

一人に一つ貰う命だ予備がない　洋々
予定表暦に詰めて見栄を張る　忠良
何もかも脱ぎ捨ててから運がつき　蟹郎
何もかも私まかせの夫と居る　節子
輪の中で予期せぬ釘を踏まされる　美恵子
グッドバイ今日一日に感謝する　裕子
天秤にかけて見たいなこの一票　はつ江
何もかも捨てて貴方の元へ行く　保子
雲が行く決断したら振り向かぬ　(下)幸子
歳月は薬だ何もかも癒す　一京
茶柱の予感が冴えたいい知らせ　昌鼓
世界からテログッドバイして欲しい　雅女
グッドバイして行ったのは嫁だった　茂登子
貧乏とグッドバイするクジを買う　鐘馗
惜別の涙予定にないドラマ　志げ緒

ニュアンスの違いが分かり目が開く　修
予め仏の顔になっておく　一粋
更年期奥歯を見せて欠伸する　故喬水
グッドバイ作り笑いに火種秘め　春名
君がいてくれる涙はもういらぬ　美雪
グッドバイ軽い骨です風に舞う　一瑶
へそくりを上手に貯めて知らん振り　益子
何もかも捨てて夜逃げがしたくなる　彰夫
予告編父の背中を見て育つ　無限
貧乏はもう飽きましたグッドバイ　宗明
何もかも許した海が凪いでいる　圭一郎
何もかも無くしてみたら強くなり　金祥
何もかも持って行きたいあの世まで　のり代
何もかも承知と厚い胸たたく　良子
地震予知出来たらきっと勲章だ　孝男

倉吉川柳会　竹信　照彦報

未年母の身体はぬくかった　賀寿恵
棟梁に推され羊の若大将　よしえ
円満に貴方は羊わたし猿　和歌子
報道写真飢餓の子の目が訴える　(西)喜美子
一徹な羊と今日も無事に暮れ　幸子
梵鐘をサド侯爵が撞いている　石花菜
黙秘権行使している貝の口　節子
街の仙人達にも響く除夜の鐘　季芳
鐘がゆがむほど撞く心荒れている　玲子
嫁き遅れ見合い写真も遠くなり　秋草
落柿舎で芭蕉も聞いた昼の鐘　重忠
娘羊がいつもわたしを慰める　きみ子
羊飼い地球を抱いてひと眠り　萩江
黒枠の写真の裏は雨嵐　克枝
七回も午越え未歳迎え　かつみ
凹凸の激しい顔が菩句居士　次男
耳の奥軽い半鐘鳴っている　和枝
野良猫が羊追っかけ自慢顔　一夫
ばあちゃんの黒枠写真若すぎる　ゆり子
伝説は一夜で遠く運ぶ鐘　京子
待ちにまつ娘が産む子未歳　勝誉
若い気が写真に腰をくだかれる　登美枝
建前に本音を噤む民主主義　螢
モンタージュ師走の町を脅かす　(前)喜美子
二十余年拉致を噤んで知らん振り　日出子
古写真育ちの良さがしのばれる　泰輔
雪どけに噤んだ口もほころびる　悠子
五歳児の写真のポーズおどけ顔　和子
国家安康アメリカのイラク攻め　十三男
ホームレス鐘の鳴る丘探してる　照彦

サークル椋樣　西出　楓楽報

妻逝った日からぼんやりしたまんま　あずき
無責任な言葉が優し過ぎないか　楓楽
告白をぼんやりと聞くカフェオーレ　澄子
半分をさらに半分　夫婦愛　光久
歓迎も束の間　諭吉すぐに去り　遠野
思考中ぼんやりしてるわけでない　哲夫
ぼんやりと夜が明け今日も生きている　房子
ぼんやりとしたら躓くルミナリエ　保子
ぼんやりとしてると何時も指名され　正坊
ことわり下手　荷物だんだん重うなる　義子
ぼんやりと雲を見ている淋しい日　みつ子
足元からぼかぼかしだす絶好調　たもつ
半音を下げてあなたに合わすキー　千代
ぼんやりと幸せ行きのバスを待つ　いわゑ

川柳塔おおとり　原　みさお報

孫の部屋覗けば孫の世界あり　彰雄
飽食で世界規格の子に育ち　孝子
テポドンがすぐそこにある世界地図　宏章
図書館で世界一周して帰る　黙光
過去未来どちらの世界にも行けぬ　真一
地球儀の裏へ辞令が赴任する　舎人
母さんへ内緒ばなしの世界地図　紀子
何となく生きて師走を締め括る　登美
身の丈にあった世界を探す日々　幸次郎
来年の句を練っている十二月　せつ子
体調も財布も年を越せそうだ　由多香
十二月びっしり詰まるスケジュール　艶子
どっさりと雪のけじめで十二月　道子
あまりよくないものばかり増えている　天涯
許すことばかりが増える母の海　雄々
金婚に白髪が増えたこと言わず　螢
しみしわが増えて心の角がとれ　清子
ボーナスの増えるはなしがはずまない　和子
ふやしたい妻との時間笑い声　義弘

年金の暮しにきつい負担増　庸二
無農薬増える健康アドバイス　小生
いろいろな荷物を積んだ口車　一弘
抜け道がいろいろあって迷ってる　以和乃津
いろいろと見たり聞いたりして大人　邦昭
最後まで女いろいろ夢をみる　風花
あちこちがいろいろ故障更年期　芙美
いろいろな夢を見ながら服選ぶ　仁子
五臓六腑いろいろ病魔住みついて　冨貴子
いろいろを詰めて今年に蓋をする　みさを

高知川柳社　川竹　松風報

妬くほどに年季が入る夫婦仲　かよ
サンマ焼く煙が民のかまどから　孝雄
健康で食のバランス考えず　幸
家柄にこだわり過ぎて嫁き遅れ　快風
鯖寿司を焼いた記憶のいろり端　暖
故郷を思えば心澄んでくる　悦子
うなされる妻の悪夢に起される　竹萌
風当りチョットしずめた袖の下　功
風当り寄らば大樹の生き上手　美々
風当り強くて石も丸くなり　典雄
風当り遊び上手へ身構える　哲史
母の目に作り笑いが通じない　圭風
見抜かれているとも知らぬ猿芝居　てるみ
人間を見抜かれそうで正座する　佳風
奢られた酒で見抜いた下心　三郎
健康な爪仲人の目にとまり　松風

翠洋会　穴吹　尚士報

カレンダーに追われています丸じるし　春
丸ふたつ少なかったらなあダイヤ　千梢
老母の背なまあるいままの影ぼうし　志華子
人格の丸さ人の輪取りまとめ　叡子
御近所と角削りつつ丸く住む　さと美
こつこつと貯めた年金孫に出し　絹子
研究一筋なっぱ服にもノーベル賞　恭昌
コツコツと靴音無気味午前二時　桃花
こつこつと勤め生涯平社員　正坊
こつこつと借金取りがノックする　舞夢
火種すらないのにくすぐったい噂　真理子
生きている証拠火種は消しません　日の出
紛争の火種くすぶり年暮れる　富子
好奇心むくむく火種かきおこす　伽羅
人を恋う火種命の尽きるまで　理恵
騒動の火種を置いて母帰る　昭
朝毎に美人に逢えるウォーキング　照子
好きだから素知らぬ顔で横にいる　蛙
無茶でんな無いよな利子に税をとる　東雲
親馬鹿が宅配でくる旬の味　正雄
ささやかな奢り内湯に柚子が浮く　石舟
バブル期の酔いなどとうに醒めている　尚士

川柳塔鹿野みか月　中原　諷人報

手拭いにかしこまってるミニトマト　野草
百年の染み消えるまで柱拭く　なが子
うす紅をつけて拭って未だおぼこ　(鹿)節子
窓拭いて小鳥のダンスよく視える　久枝
苛立ちを拭う女の二十五時　八重
悲しみを拭い続ける除夜の鐘　芳光
結露拭くあなたの影を消すように　(垣)宣子
ゆるやかなカーブで拭う不信感　きみ子
呟いてもう何度目かヒツジ年　かおる
穏やかに明けてください未年　和子
戦下から羊の乳が育てたり　汲香
やさしさは未年だと言っておく　みさ子
万札拾って戻る羊に飼いならす　はるお
汚れ着を脱いだ羊に夢かける　実満
狼の腹でもゲームする羊　孔美子
向学心燃やしホコホコ句会する　公子
湯かむりの歌ホコホコと湯気が立ち　喜与志
ほこほこのママのふところ大好きよ　富久江
お大事にいのちホコホコ抱いて生き　螢
ホコホコが続く予定日近くなる　弘子
ホコホコの布団で包む反抗期　茶子
ふる里はホコホコ母の音がする　菊乃
訥弁の父の一喝株あげる　くに子
たまに出す妻の料理も株あげる　睦子
株分けもやがて素敵な花になる　みどり
株分けて就職口が一つ増え　保子
鉢を出た株よ大きくなれたのか　ひろこ
古株のいい芽すっくり天をみる　立亥
人徳という株分けをしてもらう　盛桜
至福まで花の株主する野ばら　諷人

柳界展望

★第29回堺まつり協賛400号記念誌上大会の本社関係者天位は次のとおり（参加210名）

マイペース気ままに生きる蝸牛　井上　富子

女は真っ赤男は白い嘘を吐く　銭山　昌枝

万華鏡わたしひとりのドアがある　西口いわゑ

ノックして私も世界広がった　齋藤さくら

★京都塔の会では平成14年度成績を発表した。

〈最優秀句賞〉

大野百合子・都倉求芽

〈得点賞〉（○内順位）

①桝本宏子②大野百合子③阿萬萬的③都倉求芽④西村益子⑤山田葉子

▽御芳志御礼△

□辻晩穂氏（北見川柳社）からご芳志拝受。

□笠井欣子・國見蘭香・西川更紗・中岡妙・飛永ふりこ・星野きらり各氏からご芳志拝受。

□奥谷彩子さん（鳥取県）から亡夫冨士郎氏の供養としてご芳志拝受。

▼訃　報▲

■野田素身郎氏（理事・倉敷市）12月24日肝臓癌のため逝去。73歳（P96）

■権代康女さん（同人・鳥取県）12月26日脳出血のため逝去。67歳（P97）

▼訂正とお詫び▲

□12月号＝P37上段9行目、人並み→人波　P108上段3行目、行為→好意

▼常任理事会＝1月9日、出席者23名　①企画部から年間行事説明　②各地句会へのアンケートの件（同人部）　③参与からの文書提案の検討　④一路賞・各地柳壇賞選者　⑤新同人1名承認　⑥その他

▼次回常任理事会＝2月3日(月)13時　アウィーナ207号

新同人紹介

安土理恵（あづち　りえ）

―みつ子・恭昌・楓楽推薦

なにわ柳壇平成14年十秀（12月29日付朝日新聞）

橘高薫風選（太字は本社同人）

最優秀句

ティータイム指輪の欲しい恋でなし　**指宿千枝子**

秀　句

馬の目に恥じる戦の世の中を　森下　一知

平和です犬も炬燵で丸くなる　柿原　昭一

毛糸玉転がり童話今佳境　**大川　桃花**

孫自慢花自慢とが日向ぼこ　西岡　英子

志　ペンペン草も花のとき　**大内　朝子**

頬っぺたが膨らむような飴がない　小畑　里子

ののちゃんも大変なんだ夏休み　**石森　利昭**

割り勘で美食の見栄をちらつかす　高岡　健太

華やいだ町で絵になるプレゼント　伊藤　礎由

田中新一選（太字は本社同人）

最優秀句

やせ蛙一茶の魔法がきれかかる　茂本　隆子

秀　句

羅漢さん雨に濡れてもわろてはる　重松　良彦

春の喜劇いっぱい食べて殻を出る　渡辺　邦晴

胸を打つシュート日本が好きになる　**村上　直樹**

悔しさを練り込みいつか咲かす花　伴　洋子

信念を通して世渡り下手になる　江上　正保

喧嘩もう止めよう腹が減ってきた　脇　正夫

先読めば喉通らない今日のメシ　吉村久仁雄

障害を砕いて一歩前に出る　池田　房子

毒少し飲むと痛みをやわらげる　谷川ユミ子

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	15日(土)午後1時から 藁・呑気・伏せる・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8　神夏磯典子
岸和田川柳会	15日(土)午後1時半から 抜く・寝る・残る・入る	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610—85　芳地狸村
川柳会梨花	15日(土)まで 囲炉裏・白・静・一茶・雑詠	投句先 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4—268—205 坂田和歌子
岬川柳会	16日(日)午後1時半から 福・即席・善人・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳ねやがわ	16日(日)午後1時半から 逃げる・ポケット・病院 自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
もくせい川柳会	17日(月)午後1時から きっと・敬う・テント・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801　田中正坊
高槻川柳サークル卯の花	20日(木)正午から 疼く・不整脈・ほとほと 喉・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3—8—8　川島諷云児
東大阪市川柳同好会	22日(土)午後6時から だんだん・言葉・根性・音	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
はびきの市民川柳会	23日(日)午後1時から 家・切ない・ノルマ 「おちおち」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳ふうもん吟社	23日(日)午後1時から 求・パートナー・あっけない	JR鳥取駅構内　シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京
京都塔の会	24日(月)午後1時から 仮・寄る・中古	ハートピア京都 地下鉄烏丸線丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328　都倉求芽
川柳塔みぞくち	24日(月)午後7時半から 寒い・正面・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々
南大阪川柳会	26日(水)午後6時から 絵画・器・くら・敬遠	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18　寺井東雲
川柳クラブわたの花	28日(金)午前10時から 大・騒ぐ・胡座・雑詠	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16　吉村一風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

2月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
富柳会	1日(土)午後1時から 平均・ハンドル・雑詠	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
倉吉川柳会	1日(土)午後1時から 赤・道・申し込む	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔なら	6日(木)午後1時から 学ぶ・ムード・工夫	船橋フロムワン（近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分） 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62—6 渡辺富子
尼崎いくしま	7日(金)午後1時から 鍋・土・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F　阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17　春城年代
打吹川柳会	8日(土)午後1時から 真相・ぎしぎし・柔らか	倉吉市上灘町　上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879　高多博丈
川柳塔まつえ	8日(土)午後1時半から 愛敬・盛る・真似る	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22　三島淞丘
川柳塔みちのく	8日(土)午後4時から 開く・別れ・決心	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5　波多野五楽庵
八尾市民川柳会	9日(日)午後1時から 交・閉じる・拳骨・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室（近鉄山本駅） 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15　宮崎シマ子
川柳塔わかやま	9日(日)午後1時から 休む・メンバー・なるほど 「は（助詞）」	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2　牛尾緑良
西宮北口川柳会	10日(月)午後1時から 相棒・悟る・さっそう・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分　プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山本義子
川柳塔唐津支部	10日(月)午後1時半から 止める・極める・除く	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13　宗　水笑
ほたる川柳同好会	11日(火)午後1時から 葬式・つぶやく・ずるい	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1—7—5　田辺正三郎
尼崎尾浜川柳会	13日(木)午後1時半から おでん・背負う・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス㊽番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47　田辺鹿太
堺川柳会	13日(木)午後1時から みかん（共選）・掃除 ふ・ら・の（折り句）	堺市民会館小集会室 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3　河内天笑

編集後記

☆昨冬の3ヵ月、本社句会が午後1時開催となり、出席者が23・5%多くなった。この冬も同様、1時からの開催を実施しているが、今のところ予想したより人数が伸びていない。より多くの皆様の参加をいただき、賑やかな句会にして下さるようお願いします。

☆すでにお気付きと思うが一月号から湯川胃腸病院の広告をいただいている。ノーベル賞の湯川秀樹博士夫人のご実家である由緒ある病院の広告を掲載できることは、『川柳塔』のグレードアップに繋がり、大変うれしく思っている。

☆同人の山崎君子さんの娘さんが、同病院の事務長をしておられ、文芸に理解ある理事長さんのお声がかりで広告のお話が進んだ、というのが経緯である。

☆11月末、病院へ打合わせに伺い、山崎事務長にお目にかかった。私の息子世代かな（?）、という若さで大病院を背負っておられる実力者。しゃんと背筋の伸びた、現代女性の範となるような人物であった。

☆その折、昨年の10月からオープンされた院内のホスピスを特別に案内していただいた。元々60床を24床にゆったり改装された施設は、ホテルと見まがう落着いた雰囲気。ここでは癌を主とした治療困難な患者が、その人らしい生き方を全う出来るために、様々な配慮がなされている。帰り道で、五年前癌で逝った夫の最期の入院生活を振り返り、もっと早くにこういう病院に会いたかったと、改めて無念さが甦った。（ふ）

ひとこと

川柳あるばむ

長い年月、作りっぱなしだった川柳の整理をした。今、三十八歳になる娘が生まれた頃からのだ。

詩性には程遠い暮らしの中からの発信ばかりではあるが、一句一句に、その頃が思い出され感慨無量であった。

質はともかく、背景に暮らしや思いが見えてくる句ばかりを選び出し小冊子にまとめた。

ワープロの練習から製本まで全て手作りで、わずかな部数の自分史が出来上がった。これは私の元から翔び立って行った者達へ母からのメッセージである。

生きてきた道のそこやここで、自分の思いを句に託し、心の中を見つめることで、平穏をわずかに保つことが出来たとしみじみ思うこの頃である。

宮尾　みのり

○昨年末、大笑いした。したとは失礼だからさせていただいたと言うべきか。新聞紙上に中学教科書の一頁に新潟県中里村が制定した「雪国はつらつ条例」を「雪国はつらいよ条例」と誤植し、且つ中里村を中里町と印刷したとのこと。この巧まざるユーモアに笑った。

○編集部の末席に身をおく者としてついウンウンと頷いてしまう。原稿のチェック、編集、校正のチェック等目を皿にしてもミスはでるものと達観していたが、この一文にうれしくなった。

○その後日談。村ご当局はこの騒動を逆手にとって全国から「つらいよ」を集め「つらいよ常例（条例）」を作ると言う。「雪国はつらいよ」「農山村はつらいよ」「都会はつらいよ」「その他」の四部門。日常のつらさを明るさとユーモアで七条以内の条文形式とのこと。締切は「ブナの芽吹く頃（4月上旬）」と。この設定がまた甚だよろしい。村に雪が消え山、森、たんぼに春来るのを期待申す次第。

○さしずめ私、「編集部はつらいよ」の一文をモノにしようかと考えている最中。でも「♪奮闘努力の甲斐もなく」となるか、はたまた「編集部はつらつ」に一歩でも近づくよう勉強勉強。

○皆様寒さ厳しき候　御身お大切にお過ごし下さいますよう祈念。（よ）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**4月号**）　地名　　姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

本社2月句会

とき　2月7日（金）午後1時・2時半締切

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛

―開会時間にご注意下さい。

天王寺区石ケ辻町19－12　電06・6772・1441

兼題「ちぐはぐ」　森　茜　選

「酔　う」　坊　農　柳　弘　選

「ふわふわ」　玉　置　重　人　選

「におう」　奥　田　みつ子　選

「秘める」　河　内　天　笑　選

席題　1題　当日発表（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円

本社3月句会　3月6日（木）

兼題「やわらかい」「　愛　」「ほいほい」「踊　る」「生　む」

作品募集

4月号発表（2月15日締切）

川柳塔（8句）　河　内　天　笑　選

水煙抄（8句）　奥　田　みつ子　選

愛染帖（3句）　波多野　五楽庵　選

茴香の花（3句）　政　岡　日枝子　選

「迷　う」　宮　川　珠　笑　選

「ジョーク」　中　村　金　祥　選

「　噂　」　片　岡　智恵子　選

課題吟（3句）

初歩教室「もっと」（3句）　三　宅　保　州　担当

5月号

課題吟「　正　」「けれども」「　種　」

初歩教室「休　み」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。

(2)愛染帖・茴香の花・一路集（課題吟）への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。

(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

夜市川柳募集

第9回「長　い」　中田たつお選

ハガキに3句　2月末締切

投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3

河内天笑方　堺川柳会

定価　八百円（送料76円）

半年分　五千円（送料共）

一年分　九千八百円（同）

二〇〇三年（平成十五年）二月一日発行

編集兼発行人　河　内　權　治

印刷所　美研アート

〒545-0005

大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所　川柳塔社

電話（〇六）六六一六九一四番

振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十五年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九〇九号 川柳塔 二月号 定価 八百円（税抜 七百六円）

医療法人社団

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科（内科・外科）
放射線科
ホスピス

診療時間 月～金 9：00～17：00
土 9：00～13：00

電話 大阪(06) 6771－4861(代)
http://www.yukawa.or.jp

〒543-0033
大阪市天王寺区堂ケ芝2丁目10－2
ＪＲ大阪環状線桃谷駅徒歩3分

自費出版
川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号
TEL（06）6372－1178

雑誌 05703－2